

SD566 SD566は大型土坑SK533の南で検出された遺構で、先に報告したSD557の西側約2.5mの位置で平行する。確認された規模は長さ約5mで、幅は約50cm、深さ約20cmである。

中国産白磁

出土した主要遺物は第110図14～16で、14は中国産の白磁である。銅銭である15の銭貨名は1038年初鑄の「皇宋通寶」、16は1111年初鑄の「政和通寶」である。この他、糸切り底の小破片が出土しており、14世紀代と考える。

SD557とSD566の遺構の状況は類似しており、同時期に存在し、関連し合うと考える。

### (3) 土坑

府内町跡第51次調査南部地区の調査では、多数の土坑が調査された。土坑は、後述する柱穴状遺構との区別が小さくなるほど、曖昧である。また、細長い土坑は、前述した溝状遺構とも類似しており、区別が曖昧なものもある。基本的には、規模が大きく、遺構内から礫や遺物がまるとまって出土するものを土坑としたが、基準はない。このため、ここに報告する土坑と判断したものは恣意的である。客観的には柱穴遺構や溝状遺構も含まれる。

土坑の検出は、大きく2面に分かれる。第1面は、包含層除去後最初に検出される第2南北街路に掘り込まれた土坑群である。この土坑群は焼土を含む場合が多く、天正14年の島津氏侵攻に起因する火災処理土坑の可能性が強いものである。

第2面は、街路の版築状の積土除去後に検出される土坑に区分される。この土坑群は、街路下に南北方向に連続的に掘り込まれており、土坑内からは礫や破片となった陶磁器や瓦質土器・土師質土器などが出土する。街路整備以前に町屋から排出される廃棄物をこの部分に埋め立てたものと想定できる。

このような土坑は形態が不定形で、不明瞭なものが多い。こうした中から、遺物が出土し、形態の明確なもの、また良好な出土遺物を中心に報告する。

なお、遺構番号は、最初に調査を開始したI・J・K35の工業用水管・桜ヶ丘雨水幹線敷設部からS001とし、S032まで続く。そして番号は先に報告した北部地区に継続しS033～S088間で続く。調査は南部地区と北部地区は並行して実施したため、重複を避けるため、南部地区は200番台から始め、最終番号は500番台に達した。

SK001 包含層除去後、遺構検出作業を行なったが、その際、SF012である街路上面で東西方向に細長い掘り込みが、数ヶ所確認された。街路に掘り込まれた状態であった。

出土遺物は第111図1～3に図示した京都系土師器が出土した。復元できる2・3の口径は12cm程度である。遺構の検出位置からこの遺構は、検出された位置から近世の掘り込みの可能性が強く、京都系土師器土師器は混入と考える。

SK003 SK003もJ35で検出されたSK001と同じ状況の遺構で、幅約2mで、東西5mの範囲で深さ5cm程度に浅く掘り窪められている。遺構内の埋土も包含層と同じであった。

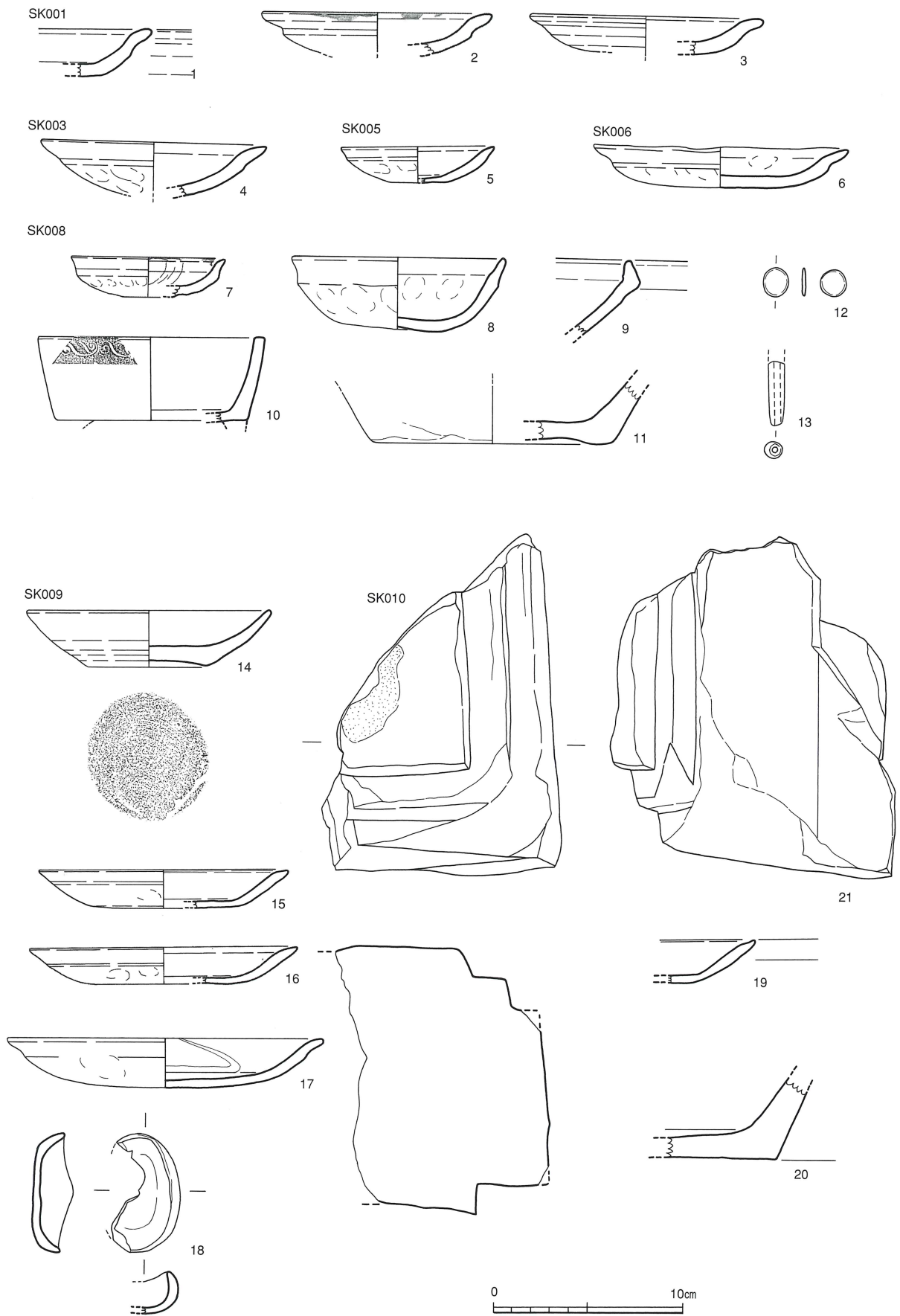
出土遺物は第111図4に図示した京都系土師器があるが、遺構の時期は近世と考えられ、遺物は混入であろう。

SK005 SK005はJ35で検出された土坑で、規模は直径約50cmで、深さは約30cmである。柱穴状遺構とも理解できる遺構である。遺構内からは礫や、第111図5に図示した京都系土師器が出土している。遺物は口径8cmで、最小タイプである。遺構の時期はこの京都系土師器から16世紀後葉と考える。

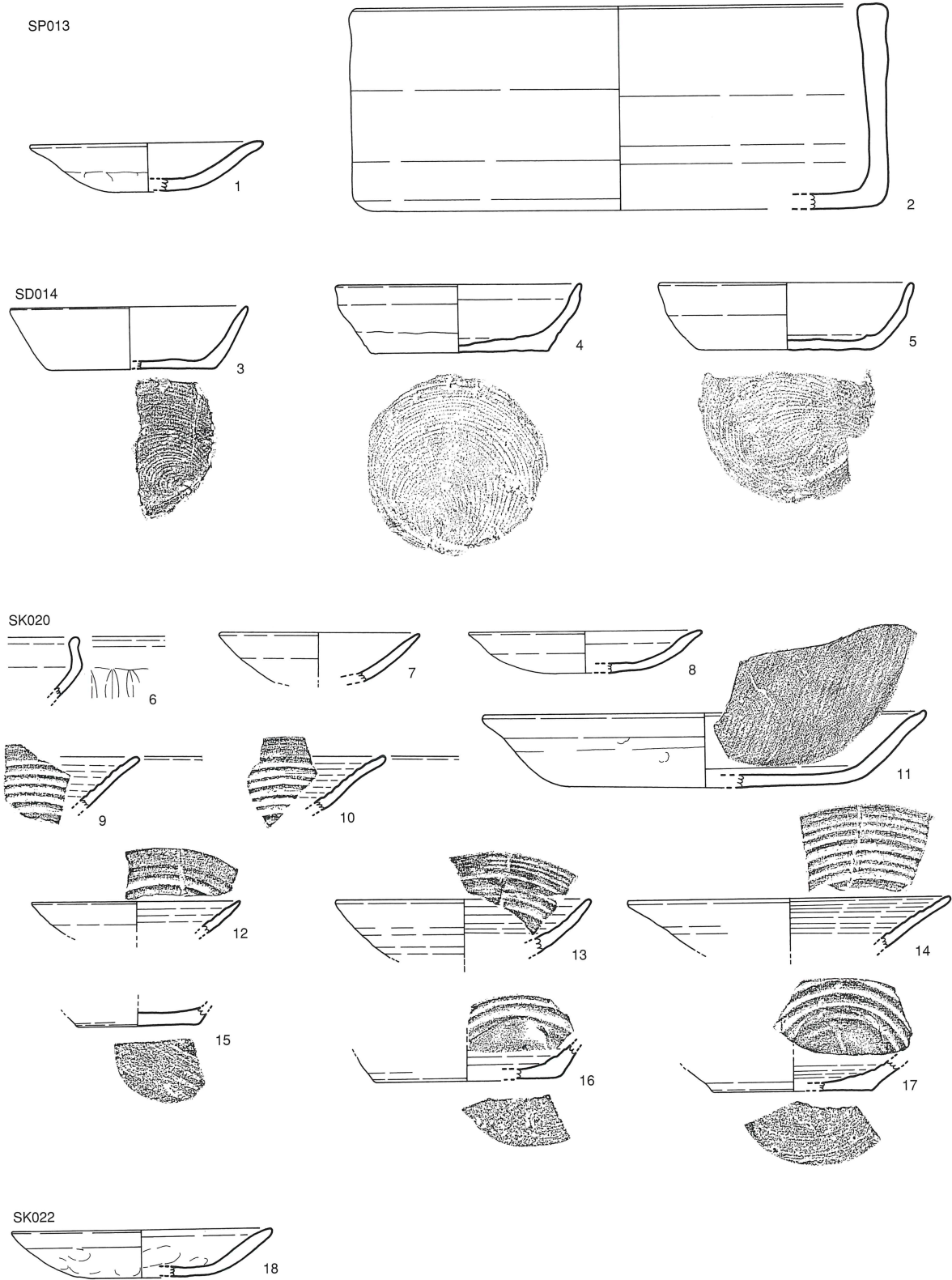
SK006 SK006もJ35で検出された遺構で、東西約2m、南北3m以上あり、深さは約10cmで床面は平坦である。遺構は、SK001・003・005・007に切られている。遺構の規模は大きい、小破片の遺物が多く、代表する遺物として第111図6に京都系土師器を図示した。

遺構の時期は、出土遺物や、SK005に切られることから、16世紀後葉と考える。

SK008 SK008はJ35の東側で検出された幅約40cm、深さ約10cmの南北方向の細い溝である。位



第111図 SK001・003・005・006・008・009・010出土遺物実測図 (1/3)



第112図 SP013・SD014・SK020・022出土遺物実測図 (1/3)

置や形状から、第2南北街路の東側側溝と考える。

碁石状

出土した遺物は、第111図7～13である。7は口径8cmの最小タイプの京都系土師器で、8は口径11.2cm、器高3.9cmの在地化した坏である。9は破片であるが、口縁部の断面が三角形になる東播系の鉢形土器である。10は口径12cmに復元される瓦質土器の香炉である。口縁部外面には、双頭蕨手文のスタンプが連続して押捺しており、底部には、3ヶ所脚が付くと想定できる。11は、底径12.5cmに復元される須恵質土器の底部である。12は黒色に近い色をした直径1.4cm、厚さ0.4cm、重さ9gの蛇紋岩製で、碁石状をしている。13は一部を欠くが、紡錘形をした土錘である。

遺構の時期は16世紀後葉である。

**SK009** SK009はSK006の東に隣接して街路除去後に検出された土坑である。東西約2m、南北も2m以上が想定され、深さは約10cm、床面は平坦である。

耳皿

出土遺物は、第111図14～18に図示した。14は糸切り底で、口径が13cmあり、口縁部が大きく開く。14世紀の在地系土師器とは雰囲気異なる、15～17は京都系土師器である。口径は15が13.1cm、16は14.1cm、17は16.8cmであり、比較的大型の京都系土師器が目立つ。18は口径5cm程度で、口縁部が直立する、焼塩壺の蓋の可能性を持つ京都系土師器の両端に力を加えて作製した耳皿である。

遺構の時期は16世紀後葉と考える。

**SK010** SK010は、K35で確認されたSK011と同じ遺構である。検出時は別遺構と理解したが、調査が進行すると、井戸枠とその周辺の掘り込みであることが判明した。すなわち、井戸遺構で、SE010とすべき遺構である。遺構は半分以上が東側の調査区外に広がっていたため、完全な調査は出来なかった。調査した範囲で想定すると、直径は3m以上になる。

出土した遺物は第111図19～21に図示した。19は京都系土師器で、20は備前焼の大甕の底部である。21は石造品の破片である。阿蘇溶結凝灰岩を素材にしており、石塔類と想定できるが不明である。時期は小破片であるが、京都系土師器や備前焼の大甕が出土していることから、16世紀後葉と考える。

**SK020** SK020は井戸遺構であるSK010の西側で検出された遺構である。検出時は北側に隣接するSK021と別遺構と理解したが、同じ遺構ととらえた。土坑はSK010に東側の大半を切られており、形態と規模を知ることは出来ない。

第112図6～17は出土した主要遺物である。6は龍泉窯系の青磁碗で、胴部に鎬連弁が施文されている。7・8・11は京都系土師器である。復元口径は、7が9.8cm、8が11.4cmであるが、11は21.6cmであり豊後府内最大級である。11の見込みには刷毛状の調整痕が観察出来る。9・10・12～17は内面に螺旋状のロクロ痕跡が残るロクロ目土師器である。小破片が多く、全体を知ることは困難であるが、京都系土師器に比較すると胎土の色調は赤みを帯びている。復元された口径は12が10.2cm、13が12.4cm、14が15.8cmで、京都系土師器と同様に法量分化していることが理解できる。

遺構の時期は、京都系土師器が含まれることから16世紀後葉と考えざるを得ないが、15世紀後葉から16世紀初頭に編年されているロクロ目土師器が多く含まれる。京都系土師器が上層からの混入と見れば、古い遺構の可能性はある。

灰状の炭

**SK022** SK022は、I35で検出された土坑である。土坑は、街路除去後に確認でき、街路以前の遺構で、そして、その後調査したI33・I34から続く街路下の土坑群の一部であることが判った。遺構の規模は、東西約1.5mあり、南北も約2mが想定出来る。深さは約40cmで、内部からは灰状の炭が多量に出土した。

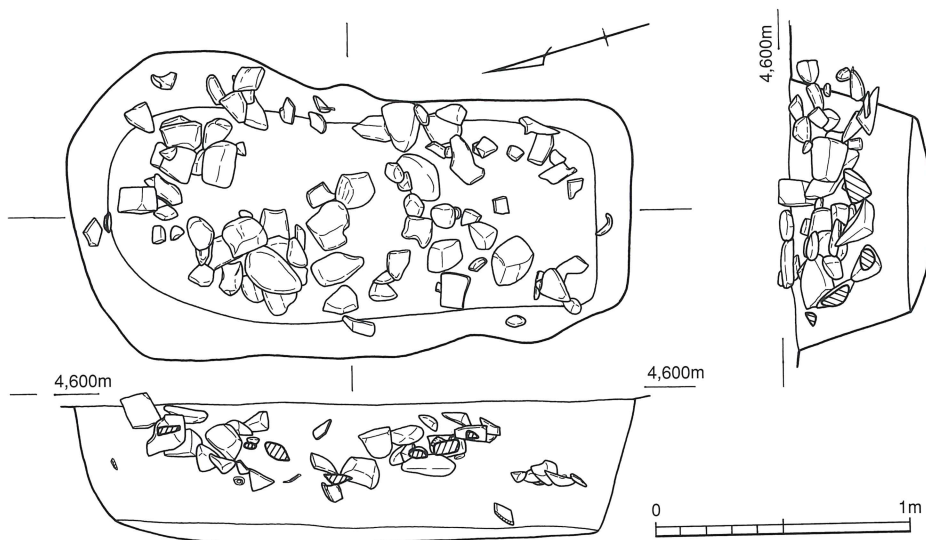
出土遺物は少なく第112図18に1点のみ図示した。遺物は口径12.4cmの京都系土師器で、時期は16世紀後葉と考える。

**SK207** SK207はK40で検出された遺構である。この場所は、万寿寺の境内にあたる。直径約60cm、深さ約20cmである。遺構内からは第117図1に図示した京都土師器が出土している。

遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SK208 SK207もK40で検出された土坑で、万寿寺境内の北西隅にあたる。遺構の規模は直径約50cmの円形で、深さは約15cmである。出土遺物は第117図2に図示した京都系土師器がある。

SK207と同様16世紀後葉と考える。



第113図 SK215実測図 (1/30)

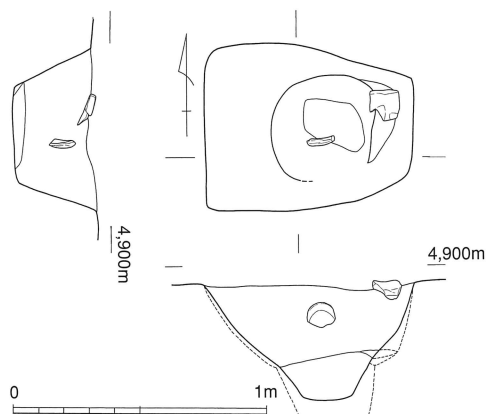
SK215 万寿寺の周囲を囲む堀であるSD200を既に報告したが、SK215はこの堀が埋立てられてた後に掘り込まれた土坑で、J40で検出された。遺構は第113図に図示したが、南北2.3m、東西1.1mの長方形の平面系形態である。深さは55cmで床面は平坦である。

遺構内からは多量の礫に混じり土師質土器や陶磁器が出土し、第117図3～7に図示した。3は景德鎮窯系の青花碗で、約10m西に離れたI40のSP266から出土した破片と接合する。4・5

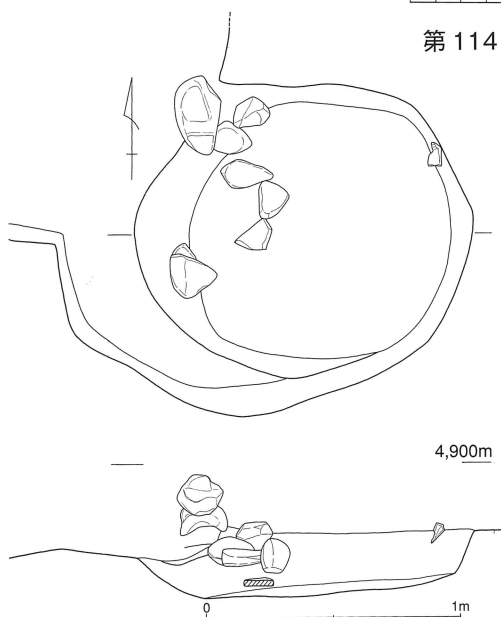
景德鎮窯系

備前焼

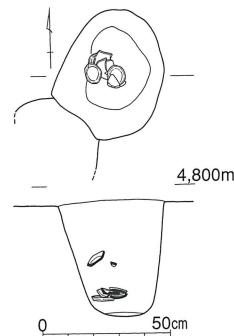
は備前焼で、4は碗で、胴部にヘラ削りの痕跡が残る。南西に10m以上離れたSK263出土の破片と接合する。5は徳利の口縁部である。6・7の京都系土師器は、6が口径11.8の皿である。7は口径10.2cm、器高3.4cmの碗形をしている。時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第114図 SK221実測図 (1/30)



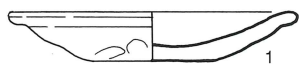
第115図 SK225実測図 (1/30)



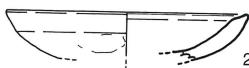
第116図 SK226実測図(1/30)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

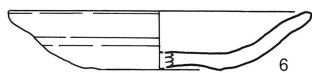
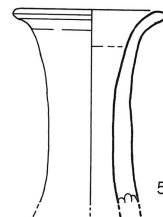
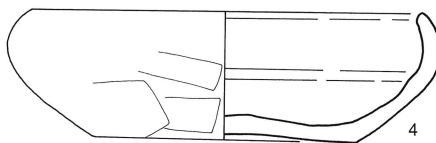
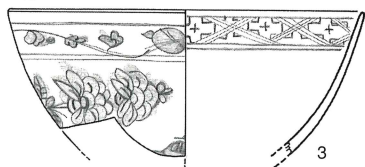
SK207



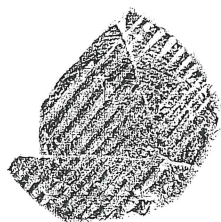
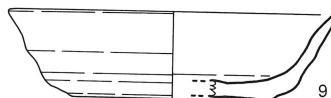
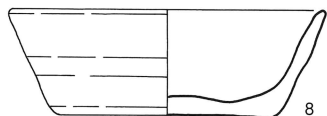
SK208



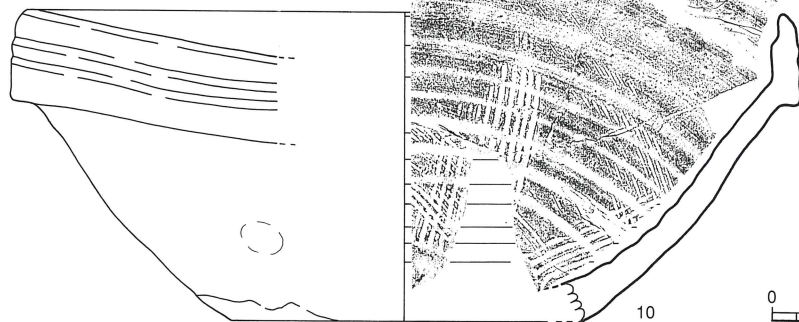
SK215



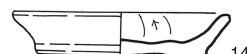
SK221



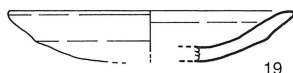
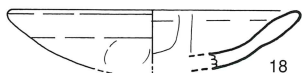
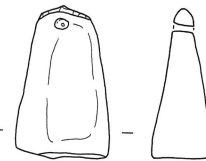
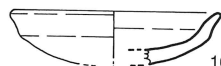
SK225



SK226



SK229



第117図 SK207・208・215・221・225・226・229出土遺物実測図 (1/3)

SK221 第114図に図示したSK221は、J40の東端、K40との境で検出された遺構で、上面は東に延びる。位置は万寿寺の境内の西北部に当る。規模は東西82cm、南北70cmの方形をしており、深さは最深部で60cmである。出土遺物は、第117図8・9の2点の在り系土師器の坏がある。8の底部には板目が付く。14世紀代の遺物である。

SK224 SK224はSD200に西半分を削られた直径1.4mの円形の遺構で、深さは約20cmである。遺物は、第119図1の阿蘇溶結凝灰岩製の石製品が出土している。脚が4ヶ所に付き、口縁部が片口になる容器である。

SK225 SK225はSK224の南東部に接して検出された遺構で、万寿寺境内になる。第115図に図示した遺構の規模は、直径1.3mの円形で、西部が二段になっている。深さは25cmで床面は平坦である。出土遺物は第117図10の備前焼の播鉢が出土している。播鉢は16世紀後葉から末葉である。

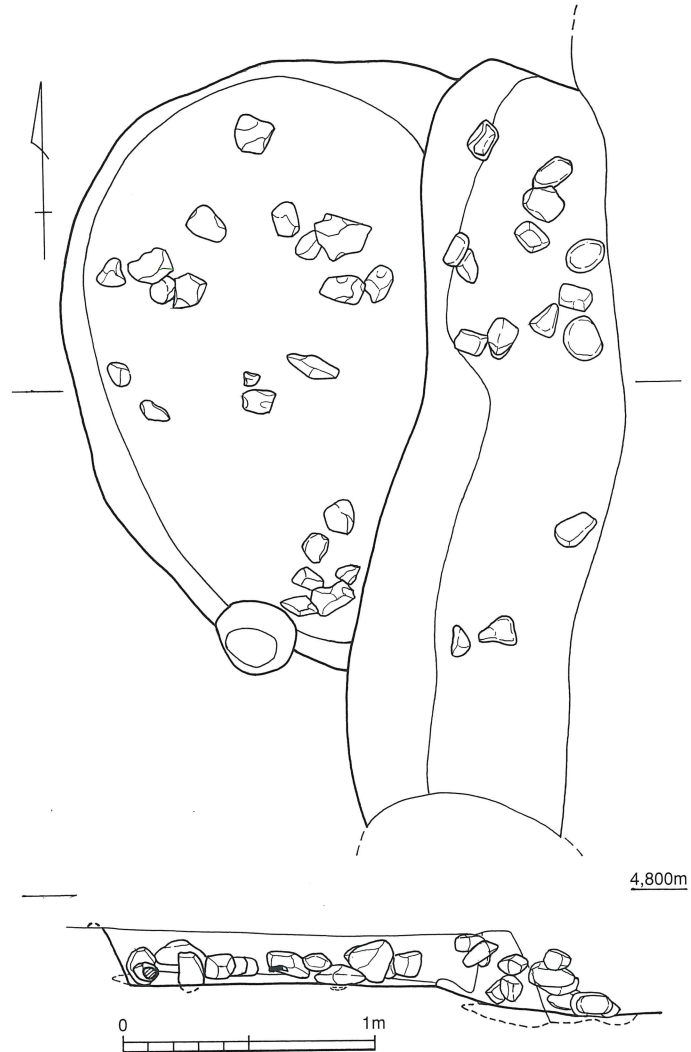
SK226 第116図に図示したSK226も万寿寺境内の遺構である。南北約50cm、東西約40cm、深さ50cmの柱穴状の土坑である。遺構内からは、第117図11～14の在り系土師器の皿の完形品が出土している。埋納品の可能性が強く、14世紀代の遺構と考える。

SK229 SK229はJ39の東南角で検出された遺構で、西側をSD200に削られ、残された部分は、南北約5m、東西約3mと広いが、深さは約10cmと浅い。出土遺物は第117図の15～19の京都系土師器と20の分銅形の石製品がある。京都系土師器は多数出土している。石製品は頂部に穿孔があり、重量は61.9gである。時期は16世紀後葉である。

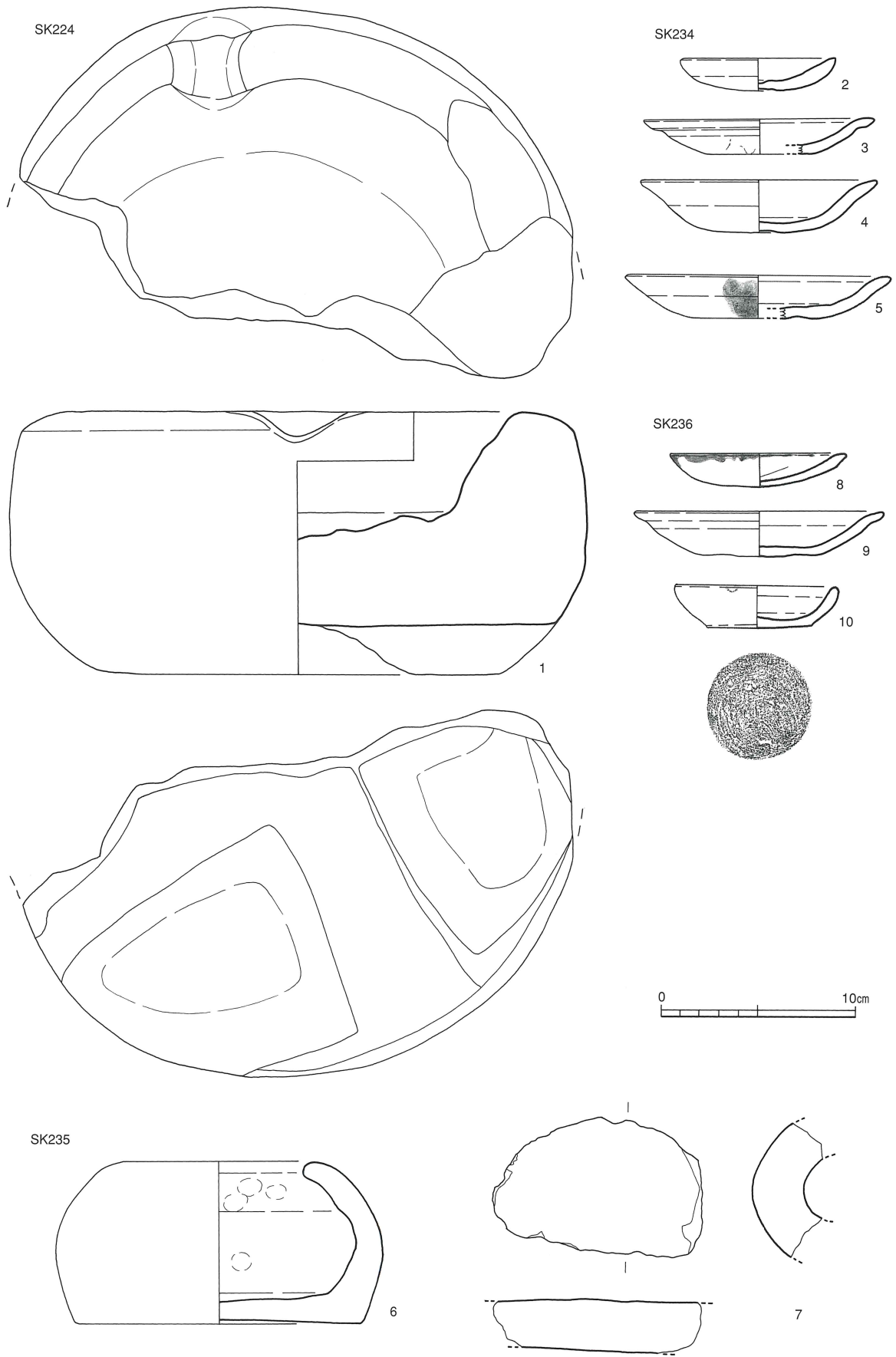
SK234 SK234は第2南北街路を除去後にI40で検出された土坑で、第118図に図示した。遺構の規模は、南北約2.5m、東西約1.5m、深さは約20cmが確認された。しかし東側はSK235と重複しており、最終的にはSD200から切られている。出土遺物は、第119図2～5に図示した京都系土師器と礫が出土している。京都系土師器の時期は16世紀後葉で、全て破片であり、一括性の強い廃棄土坑である。

SK235 SK235は第2南北街路を除去後、SK234の東側で検出された土坑で、両者の前後関係は不明であるが、大きな時期差は

分銅形の  
石製品



第118図 SK234実測図 (1/30)



第119図 SK224・234・235・236出土遺物実測図 (1/3)



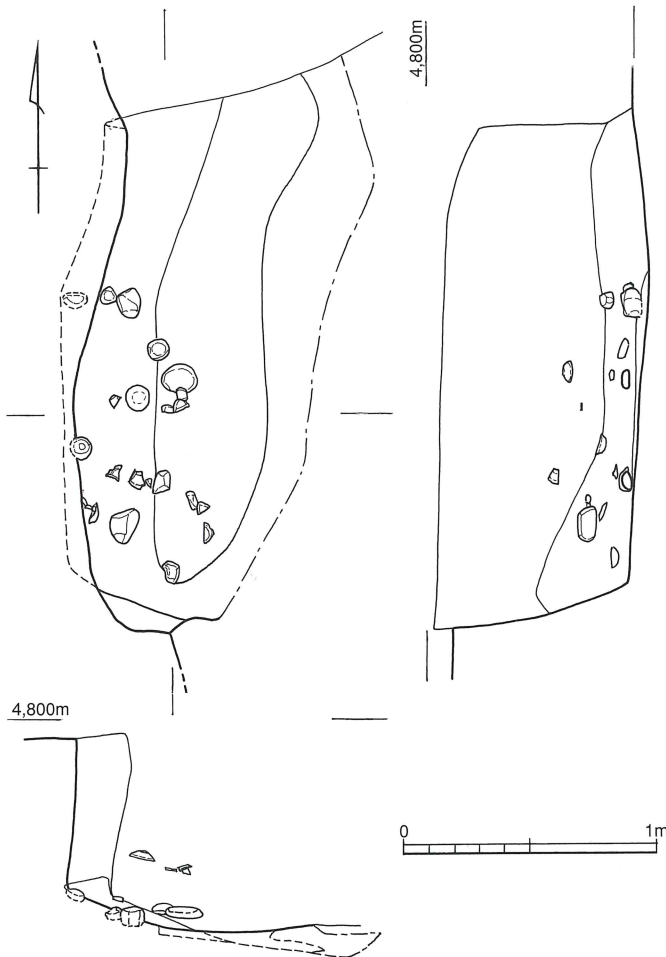
ない。第118図に図示したこの土坑は東側をSD200に切られており、南側はSK236と重なり合う。確認できる遺構の規模は南北約3mで、深さは最深部が約30cmである。

遺構内からは拳大の礫と第118図6・7に図示した遺物が出土している。6は口縁部が内湾し、広い  
 フイゴの羽口 底部を持つ瓦質土器の鉢である。7は土製のフイゴの羽口で内側の径は3.5cmあり、大型である。

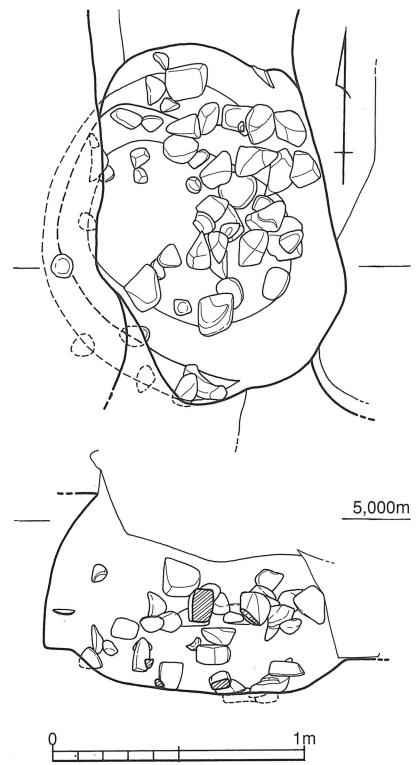
時期は16世紀後葉と考える

**SK236** SK236はSK235の南に掘り込まれた土坑で、第2南北街路を除去後にI40で検出された。遺構は第121図に図示したが、上面は直径約1mの円形で、下面は中央が窪む直径約1.5mの円形で、断面形がフラスコ状になるが、東側をSD200から切られている。

遺構内からは、多くの礫と共に、第119図8～10に図示した遺物が出土した。8は口径9cmの京都



第120図 SK235 実測図 (1/30)



第121図 SK236 実測図 (1/30)

系土師器で、灯明皿として使用されている。9も口径12.8cmの京都系土師器である。10は底部に糸切り痕が残る土師器皿で、口径は8.4cmで胎土は京都系土師器と類似する。時期は16世紀後葉である。

SK237 SK237はSK235の北側に掘り込まれた土坑で、第2南北街路を除去後にI40で検出された比較的大型の土坑である。第122図に図示した土坑の規模は、南北約3m、東西約2mの小判形をしており、床面は中央部が深く1.1mある。壁は抉れており、断面はフラスコ状になる。

瀬戸美濃系  
天目茶碗  
京都系土師器

遺構内からは床面近くに平坦に礫が出土し、間層を挟み上部にももう一層の礫を含む遺物群がある。出土遺物は第123図1～21に図示した。1は瀬戸美濃系の内反り高台の天目茶碗である。2は瓦質土器で器壁が1.5cmの鉢である。3～21は京都系土師器である。口径は4～13が9cm前後で、14～21は11～12cm台で、二法量があり、3・6・9・10・15は灯明皿として使用されている。

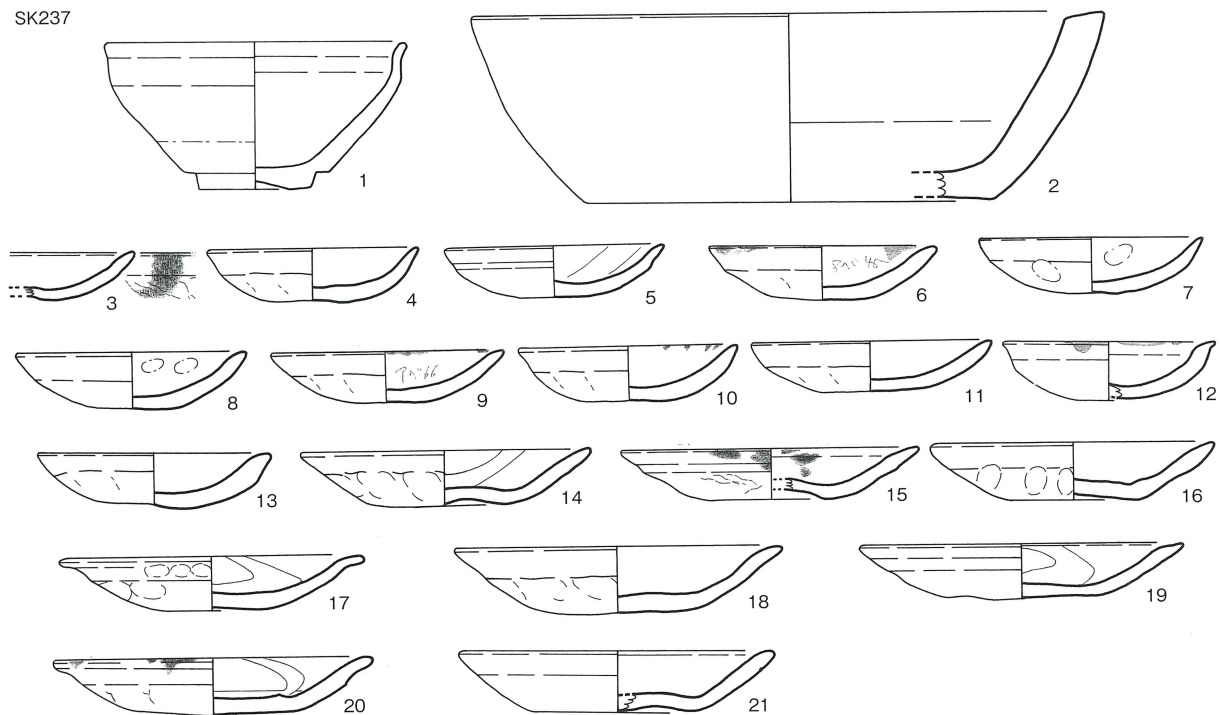
時期は16世紀後葉と考える

SK239 SK239はI40・41境の第2南北街路下で検出された不定形な土坑である。第124図に図示した規模は東西約1.5m、南北0.7mで、床面は二段になっていおり、深さは最深部で約1mある。遺

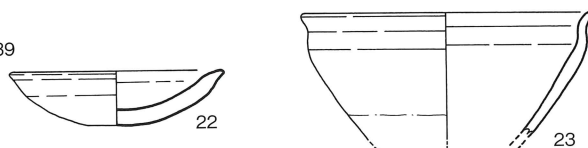


第122図 SK237 実測図 (1/30)

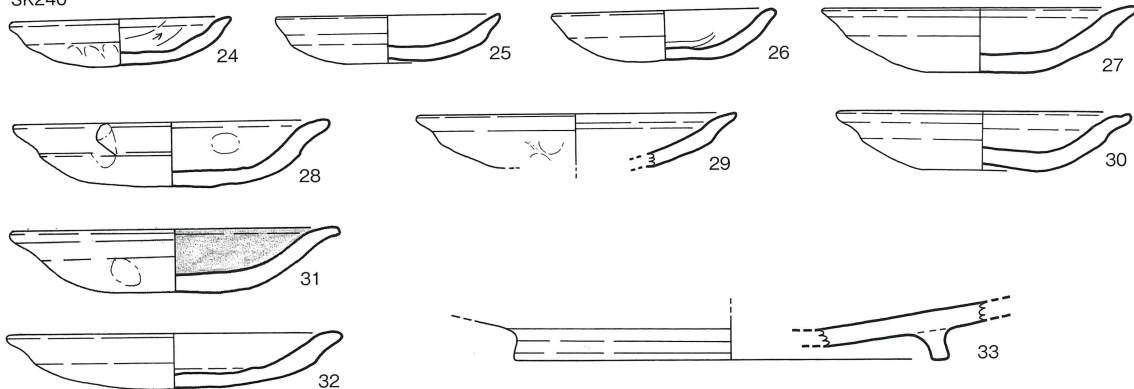
SK237



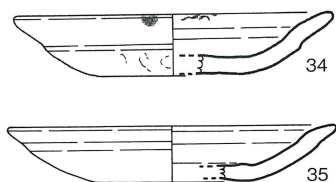
SK239



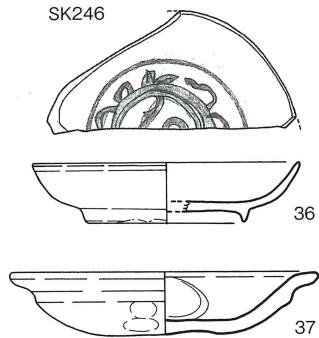
SK240



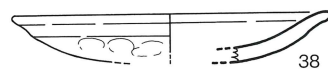
SK245



SK246



SK247



第123図 SK237・239・240・245・246・247出土遺物実測図 (1/3)

天目茶碗

構は東側をSD200に切られている。遺構内からは数点の礫と第123図22・23が出土した。22は口径8.4cmの京都系土師器である。23は瀬戸美濃系の天目茶碗である。時期は16世紀後葉と考える

SK240 SK240は、I41の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の東側はSK241とSD200に切られている。第125図に図示した遺構の規模は、南北約2m東西0.8m以上が想定でき、床面は中央部が深くなり、最深部は約1mある。遺構内からは礫や第123図24～33の遺物が出土した。24～32は京都系土師器で、24～26は口径8cm台で、27～32は口径12cm前後である。31の内面はススのため黒色化している。33は瓦質土器の鉢の底部である。時期は16世紀後葉である。

SK241 第126図に図示したSK241は、SK240の東側に掘り込まれた南北に細長い土坑である。遺構の規模は南北2.5m、東西0.8m、床面は凹凸があり、最深部は1.2mである。遺構の東側はSD200に切られている。遺構内からは拳大の礫と第132図1～17に図示した遺物が出土している。1は景德鎮窯系の青花碗で、2は見込みに青花文のある漳州窯系の皿である。3～14は京都系土師器で、口径は3～7が9cm前後で、8～12は12cm前後、13・14は14cm前後である。15の銅銭は一部を欠くが「景祐通寶」と考えられる。16は紡錘形の土錘で5.4gある。17は口縁部に刻目突帯の巡る縄文晩期の深鉢である。

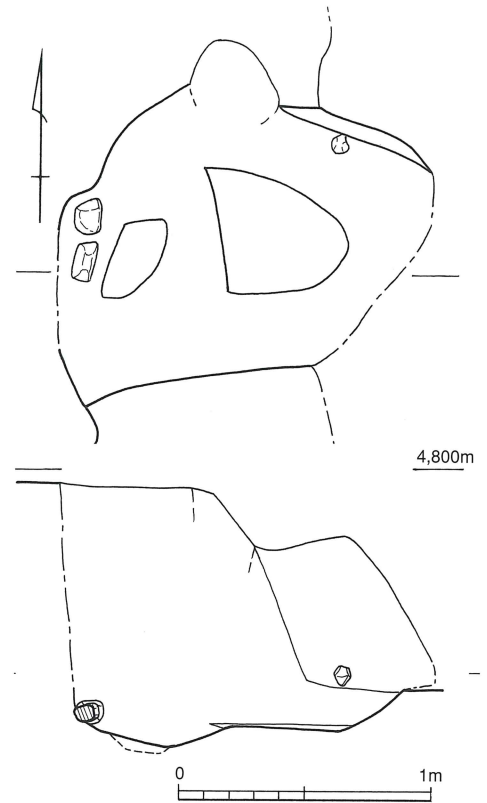
時期は16世紀後葉である。

SK245 第127図に図示したSK245はI41の第2南北街路下で検出された土坑で、上面をSD200で削られている。状況的にはSD200の斜面で検出された土坑である。残された遺構の規模は、南北約1.3m、東西約1mの楕円形をしており、深さは最深部で15cmである。出土遺物は第123図34・35に図示した口径12.6cmと13cmの京都系土師器がある。時期は16世紀後葉である。

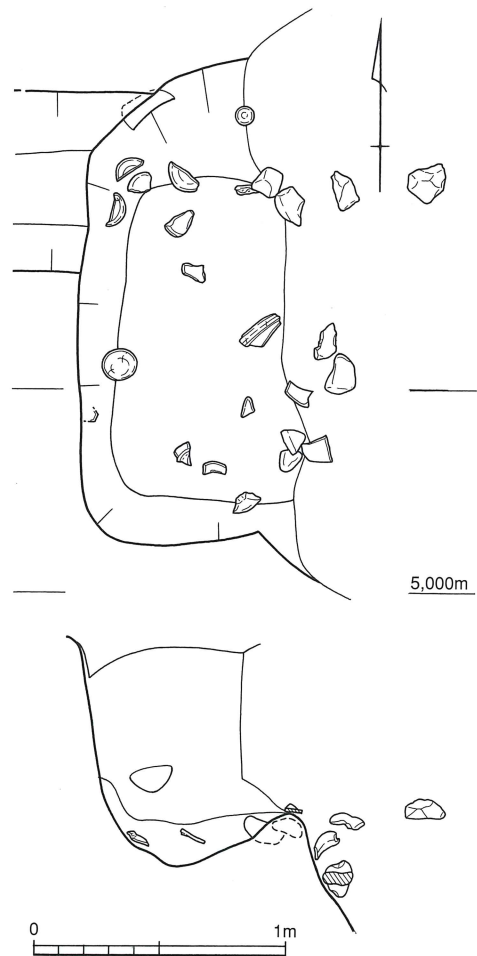
SK246 第129図に図示したSK246はI41のSD200の西側斜面状で検出された土坑で、SK245の南に接している。平面形は直径1.5mの円形状で床面は南北約1m、東西約0.4mの細長い形状をしている。出土遺物は、第123図36・37に図示した。36は景德鎮窯系の皿で、見込みに龍の文様がある。37は口径12cm、器高2.6cmの在地化した京都系土師器である。時期は

景德鎮窯系  
漳州窯系

刻目突帯



第124図 SK239 実測図 (1/30)



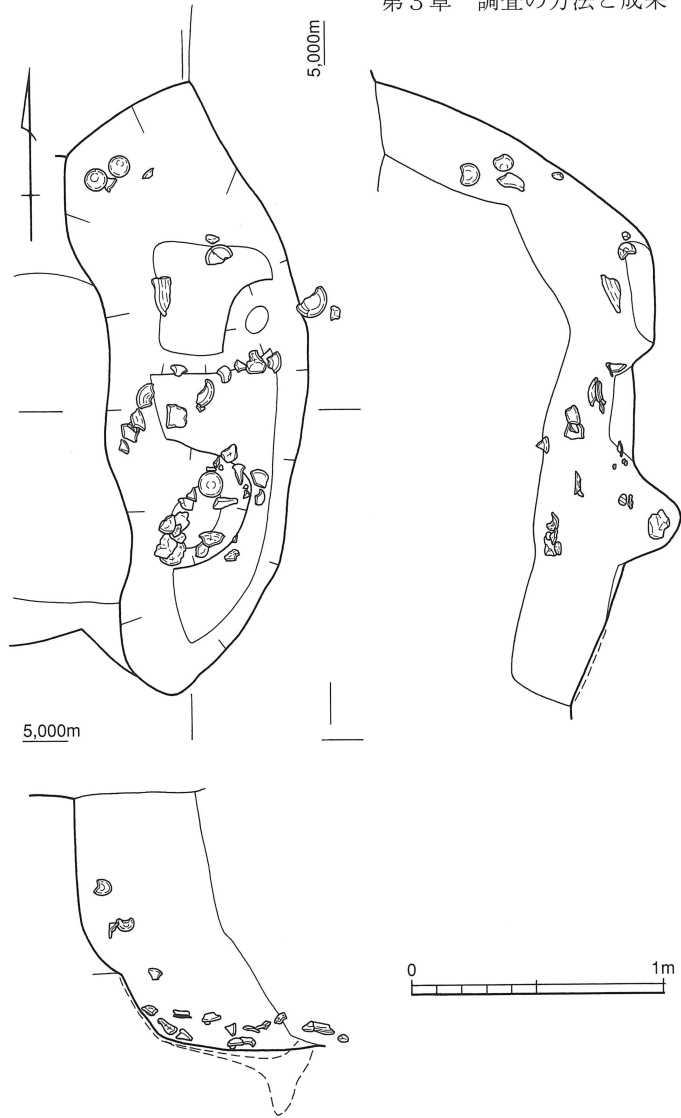
第125図 SK240 実測図 (1/30)

16世紀後葉である。

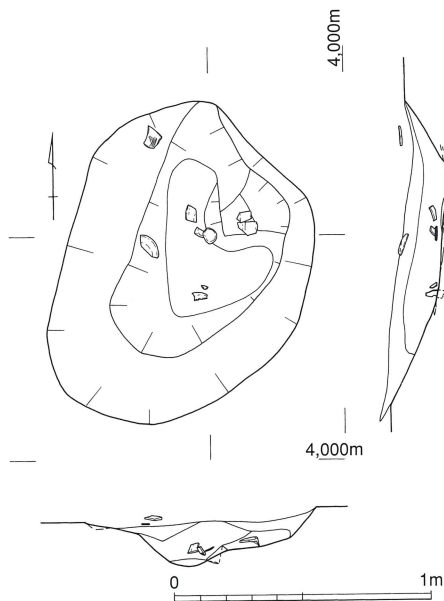
**SK247** SK247はI41の街路下のSK253とSK241の間で検出された南北約1.5mの細長い土坑である。しかし、東側の大部分をSD200に削られており、わずかに西側の掘り込み部が残る。出土遺物は第123図38の口径12.5cmの京都系土師器が出土しており、時期は、周辺の土坑と同様16世紀後葉と考える。

**SK249** SK249はK40で検出された土坑である。位置は万寿寺の西側にあたる。SK250と切りあうため遺構の規模や形状は不明であるが、第132図18・19に図示した京都系土師器と銅銭が出土している。京都系土師器は口径12cmであり、銅銭は半分以上欠けており、銭貨名は不明である。時期は16世紀後葉と考える。

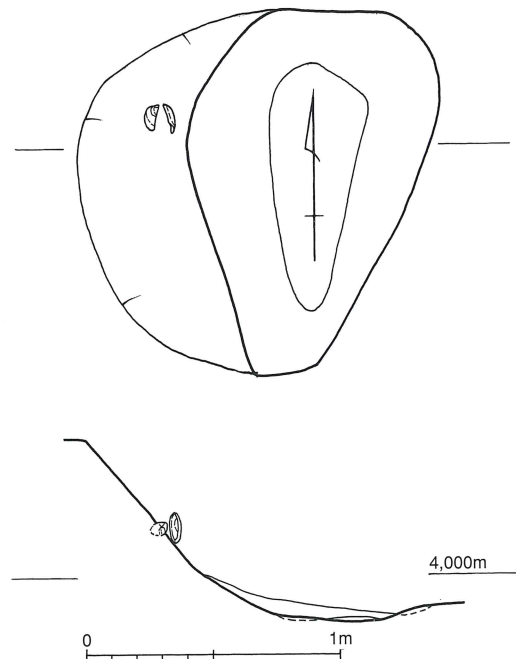
**SK250** SK250はJ・K40・41の境で検出されて土坑である。位置は万寿寺の境内の西側にあたる。遺構の規模と形態は、南北約1.7m、東西約1mの長方形をして



第126図 SK241実測図 (1/30)



第127図 SK245実測図 (1/30)



第128図 SK246実測図 (1/30)

おり、平坦な床面までの深さは約10cmである。出土遺物は少なく、第132図20に図示した口径9.8cmの完形品の京都系土師器が出土している。このため、時期は16世紀後葉と考える。

**SK253** 第120図に図示したSK253は第2南北街路下のI41の北側で検出された細長い土坑である。北側はSK239で切られ、さらに東側をSD200に削られている。このため遺構全体の形状を知ることができない。残された遺構の規模は、南北2.2m以上、東西は1m以上ある。床面はほぼ平坦で深さは約70cmである。壁は西側に抉れている。

景德鎮窯系  
麒麟

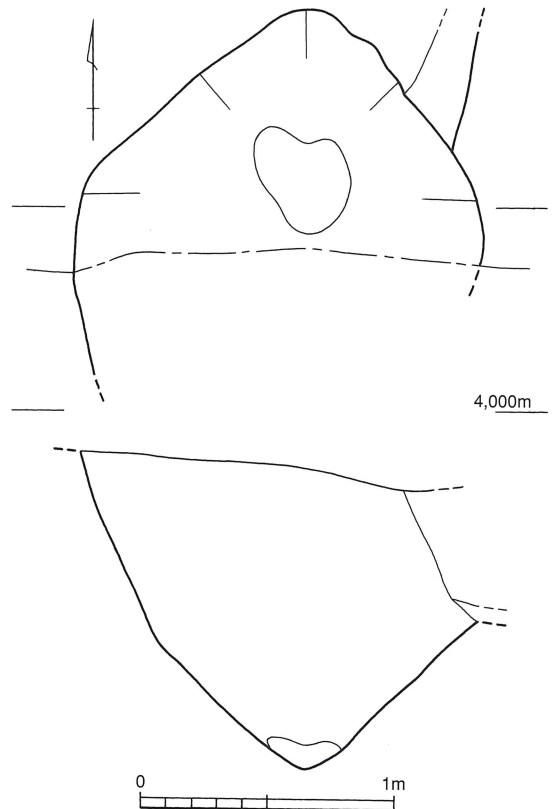
遺構内からからは小礫と一緒に第132図21～29に図示した遺物が出土している。21は景德鎮窯系の青花碗で外面に麒麟が描かれている。22～25・28は京都系土師器である。口径は22～24が9cm前後で、25・28は12cm台である。26・27は口径8cm台の糸切り底の皿である。胎土は京都系土師器に類似する。29は一部を欠くが、1119年初鑄の「宣和通寶」である。

府内町跡53次  
調査

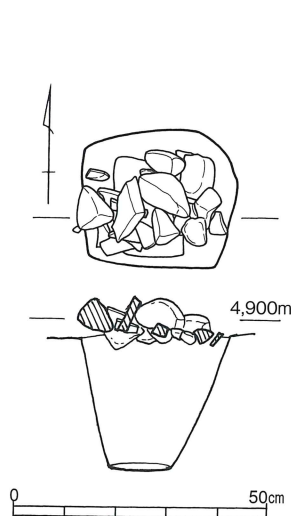
**SK256** 第129図に図示したSK256は南部調査区の最南端で検出した土坑である。この遺構以南は大分市教育委員会が府内町跡53次調査として実施した。遺構は第2南北街路下で検出され、東側はSD200に削られている。残された遺構の規模は、南北1.9m、東西1.6mの楕円形をしており、底は尖るように狭くなり、最深部の深さは1.2mである。

出土遺物は、小破片のみであるが、京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。

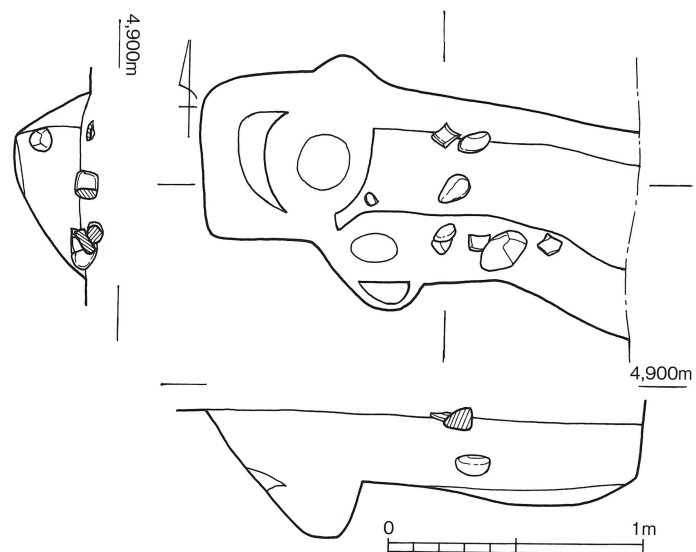
**SK257** 第130図に図示したSK257はJ40で検出された土坑で、SD200の上面に掘り込まれていた。遺構の規模は、検出面が南北25cm、東西30cmの方



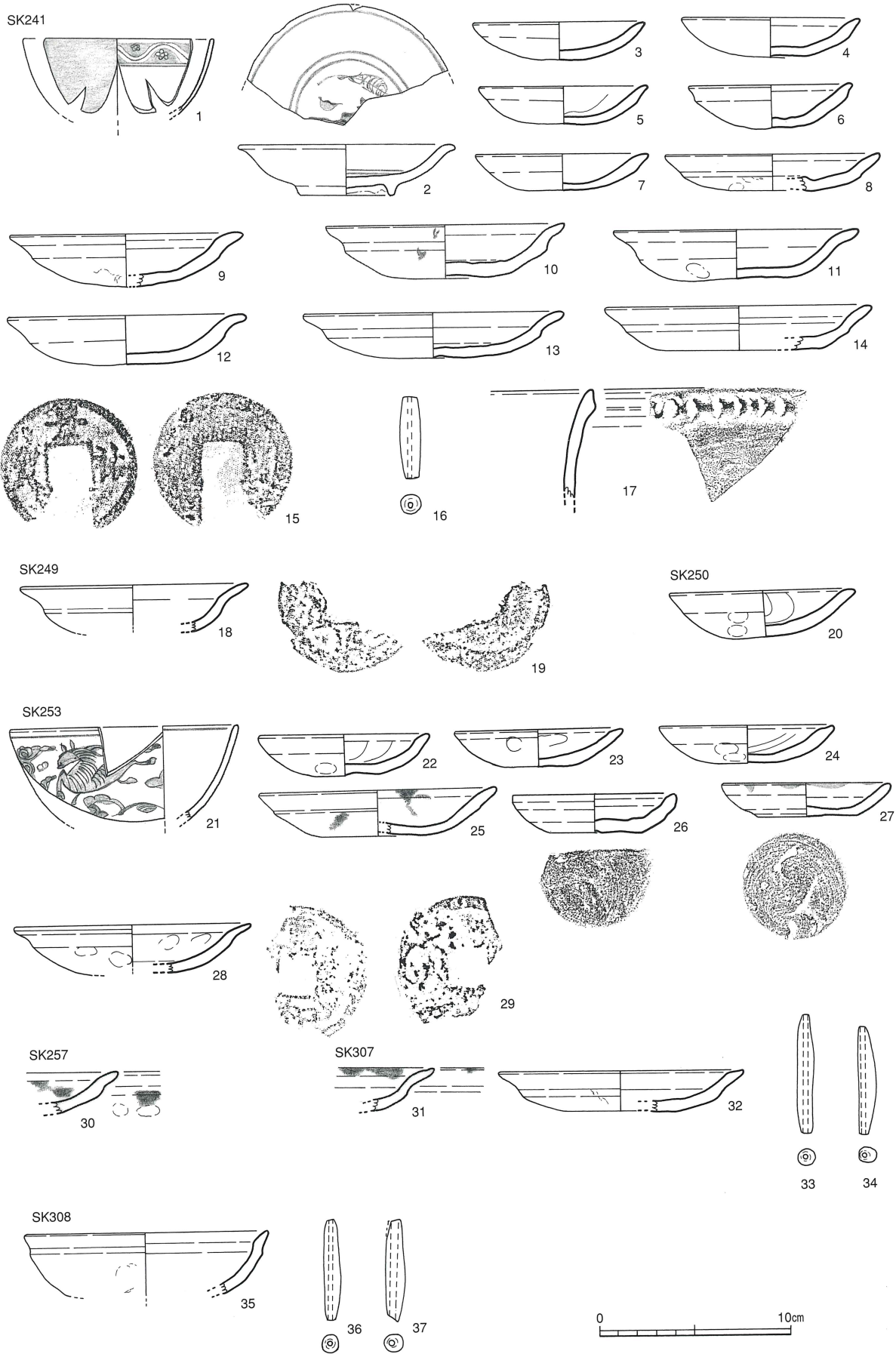
第129図 SK256 実測図 (1/30)



第130図 SK257 実測図



第131図 SK270 実測図 (1/30)



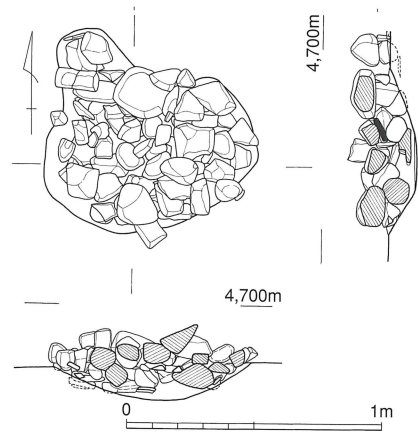
第132図 SK241・249・250・253・257・307・308出土遺物実測図(1/3) 15・19・29(1/1)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

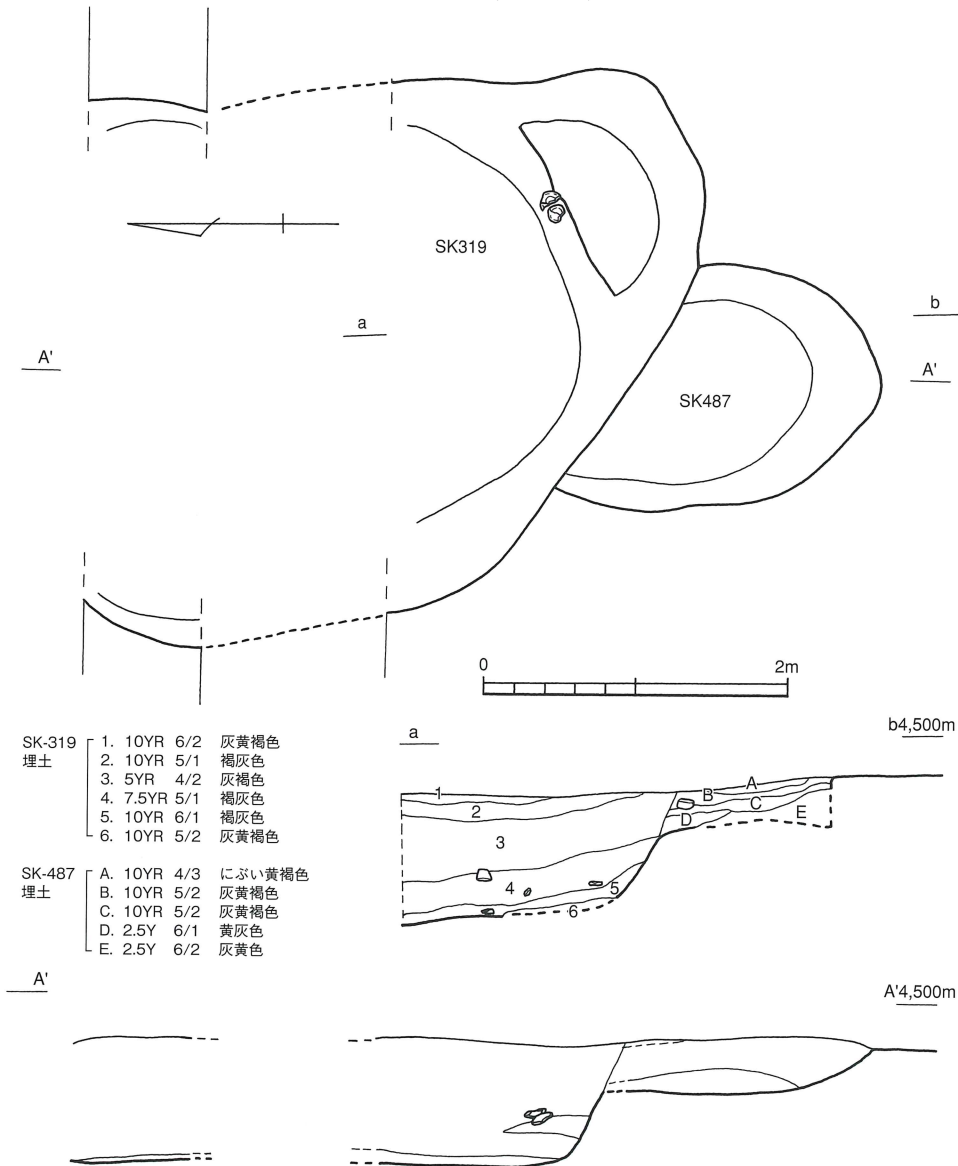
京都系土師器 形で、深さは30cmである。上面には拳大の礫が覆っていた。出土遺物は第132図30に図示した京都系土師器が出土しており、遺構の検出状況から、16世紀末葉と考える。

SK270 第131図に図示したSK270は、K40で検出された遺構で、万寿寺の境内にあたる。遺構の規模は東西1.8m、南北0.7mの溝状をしており、東は調査区外に延びている。また、西端にはSK221が掘り込まれている。遺構の中からは京都系土師器の破片が出土しており、16世紀後葉と考える。このことから、SK221が14世紀の遺構であることから、上面に掘り込まれた遺構と言える。

SK307 SK307はJ31の北端のK31境で検出され

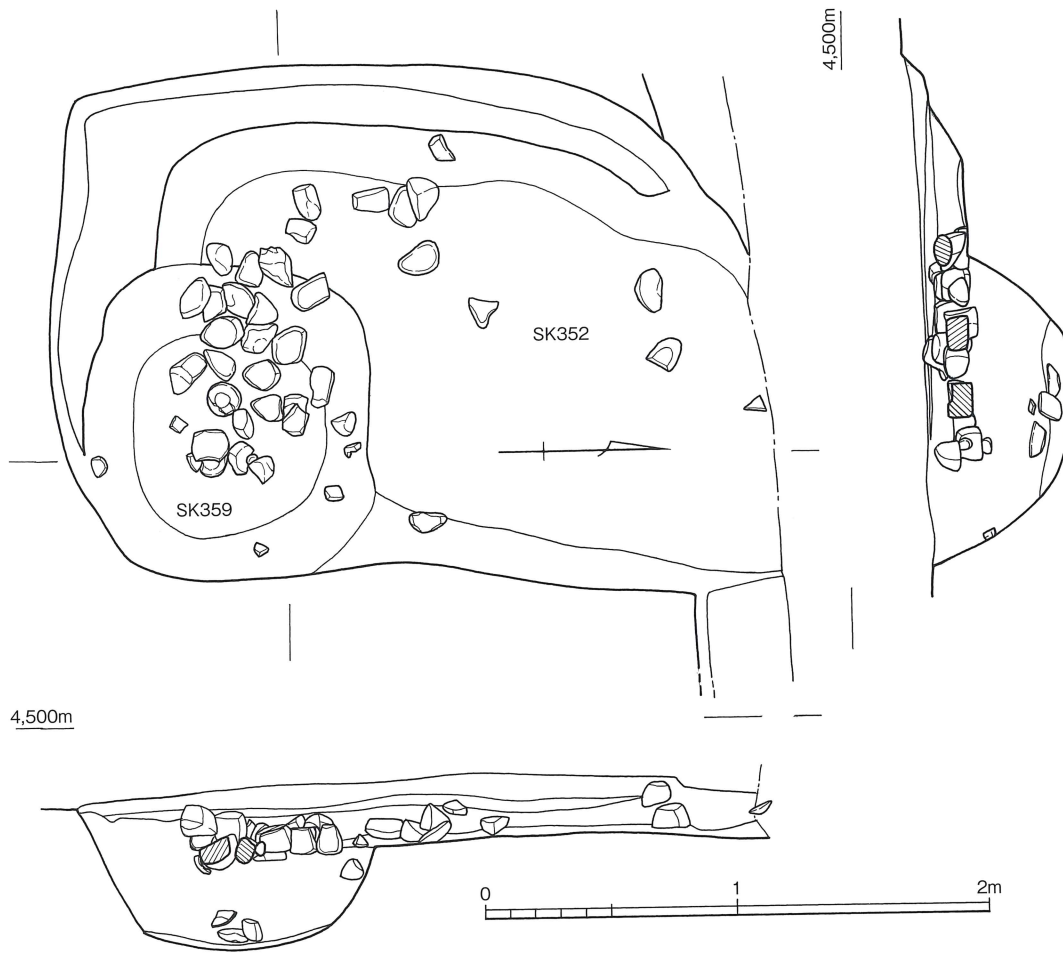


第133図 SK311 実測図 (1/30)

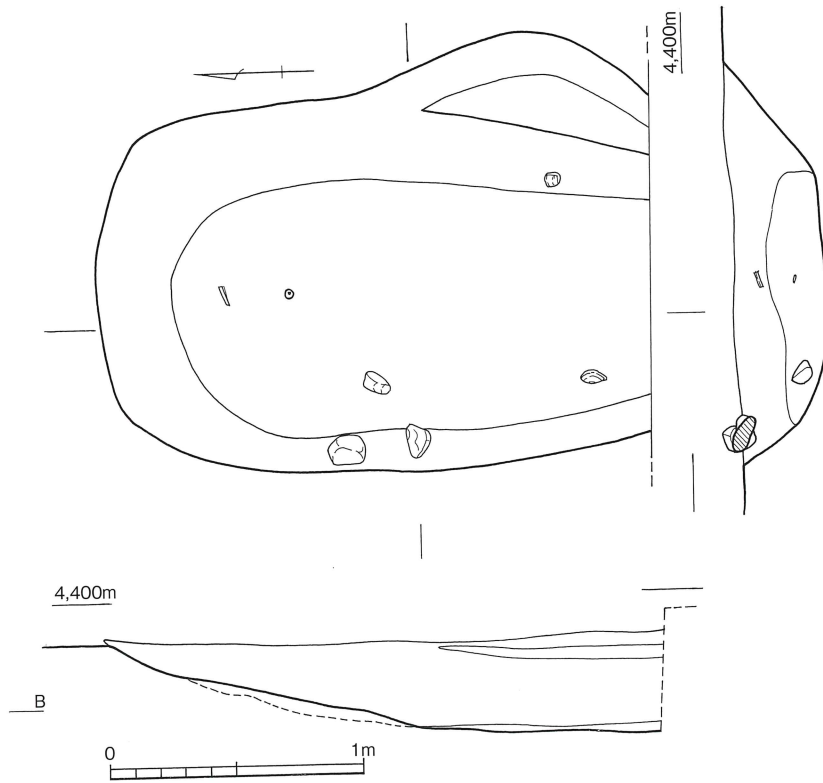


第134図 SK319・487 実測図 (1/50)





第135図 SK352・359実測図(1/30)



第136図 SK353実測図(1/30)

土錘

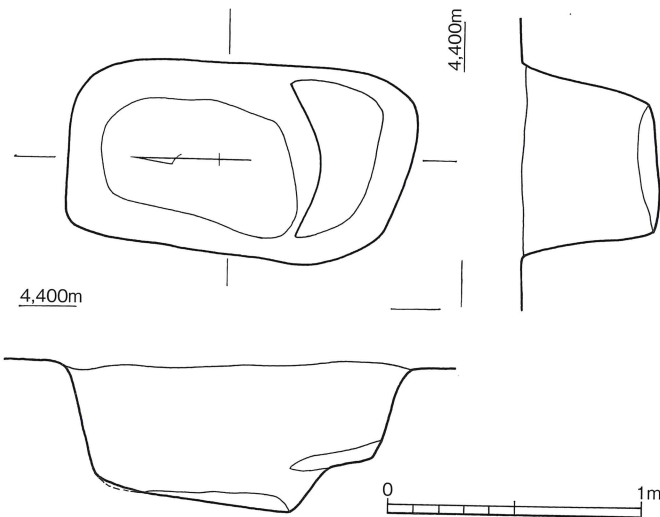
た土坑である。輪郭は不明であるが焼土の広がりや浅い窪みで構成される。出土遺物は、第132図31～34図がある。31・32は京都系土師器である。32の口径は12.8cmである。33・34は紡錘形をした土錘で、2点とも5gである。

時期は、焼土を含むことから、天正14年（1586）以後の16世紀末葉と考える。

**SK308** SK307はJ31で確認された焼土を含む浅い土坑で、輪郭が不明瞭なことなどでSK308と同様である。位置も南西に隣接し、本来は同じ遺構の可能性が高い。出土遺物は第132図35～37に図示した。35は口径12.8cmの在り地化した京都系土師器である坏である。36・37は紡錘形の土錘で重さは4.3gと4.8gである。時期は、SK308と同様で16世紀末葉と考える。

**SK309** SK309はJ31で確認された土坑で、埋められたSD393の上面に掘り込まれている。遺構の規模は、東西1.1m、南北0.9mの楕円形をしており、深さは約20cmである。遺構内の埋土には焼土も含まれる。遺物は第140図1に図示した瓦質土器の鉢が出土している。この鉢は、口縁部が直口し、胴部がゆるやかに張る。時期は、検出状況や京都系土師器の小破片を含むことから16世紀末葉と考える。

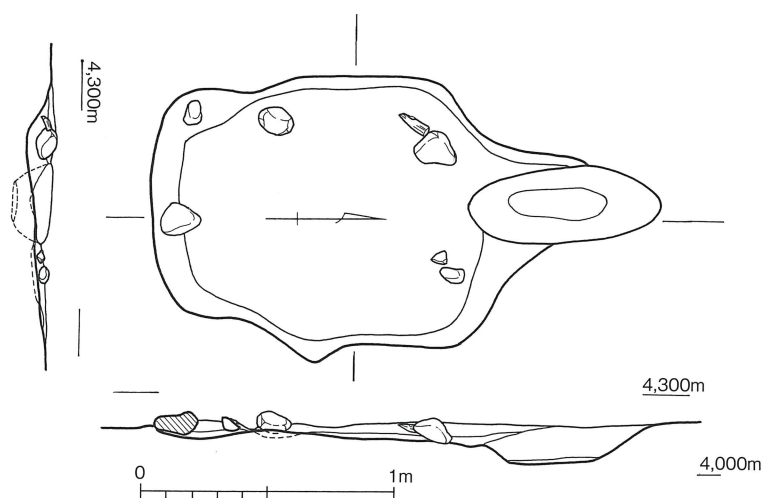
**SK311** 第133図に図示したSK311はI31で検出された集石を伴う土坑である。検出面はSD060を埋立てた上面である。集石を除いた後の土坑の規模は、南北60cm、東西80cmの楕円形で、深さは13cmである。集石には京都系土師器や瓦質土器の破片が含まれる。遺構の時期は、検出状況から16世紀後葉から末葉と考える。



第137図 SK355 実測図 (1/30)

**SK319** 第134図に図示したSK319はI・J32の北端で検出された土坑で、第2南北街路の積み土を除去後に検出された。遺構の規模は一部未調査部もあるが、南北4m以上、東西3.6mで、平坦な床面までの深さは0.8mである。南端でSK487と切りあい、土層観察ではSK319が新しい。遺構内からは、第140図2～6が出土している。2～4は京都系土師器で、口径は13cm前後である。5は内面にロクロによる螺旋状の窪みのあるロクロ目土師器である。6は備前焼の播鉢で、内面には斜め播り目が観察できる。

SK319の時期は第2南北街路下であるが、16世紀後葉である。



第138図 SK356 実測図 (1/30)

備前焼播鉢  
斜め播り目

SK352 第132図に図示したSK352は第2南北街路除去後、J31で検出された土坑で、北側は未調査である。また、南端はSK359が掘り込まれている。両者の関係は、SK352の床面と同じレベルで礫が広がっていることから、SK352が新しいことが判る。遺構の規模は、南北3m以上、東西2mである。平坦な床面までの深さは25cmである。

遺構は大型であるが遺物の出土は少なく、瓦質土器や京都系土師器の小破片がある。時期は16世紀後葉と考える。

SK353 第136図に図示したSK353は、第2南北街路下のJ31で検出された土坑である。土坑の規模は、南北2.2m以上で、東西は1.5mの長楕円形をしている。床面は皿状で北壁の傾斜が緩い。遺構内からは第353図7～11の遺物が出土している。7・8は京都系土師器で、8の口径は11.6cmである。9は金銅製の長さ7.7cm以上ある小柄である。10は表面を先端の鋭い工具で打ち、花の文様を陽刻した青銅製で塗金した板である。11は銅銭であるが、銭貨名は不明である。

青銅製塗金板

SK353の時期は16世紀後葉と考える。

SK355 第137図に図示したSK355は、第2南北街路下のJ31で検出された土坑である。遺構の規模は南北1.3m、東西0.8mの隅丸長方形をしている。床面は二段になっており、最深部は深さ60cmである。この土坑の埋土は砂質土で一気に埋められている。このためか、出土遺物はない。

時期は、遺構の検出状況や埋土の状況から16世紀後葉と考える。

SK356 第138図に図示したSK356は第2南北街路下で確認された浅い土坑である。遺構の規模は、南北約1.5m、東西約1.1mの隅丸方形をしている。深さは約5cmで、北には細長い柱穴状の土坑がある。出土遺物は礫が数点と、京都系土師器の小片と第140図12に図示した青銅製品がある。この遺物は、直径0.8cm、厚さ0.4cm、重さ1gで、太鼓形分銅の可能性もある。

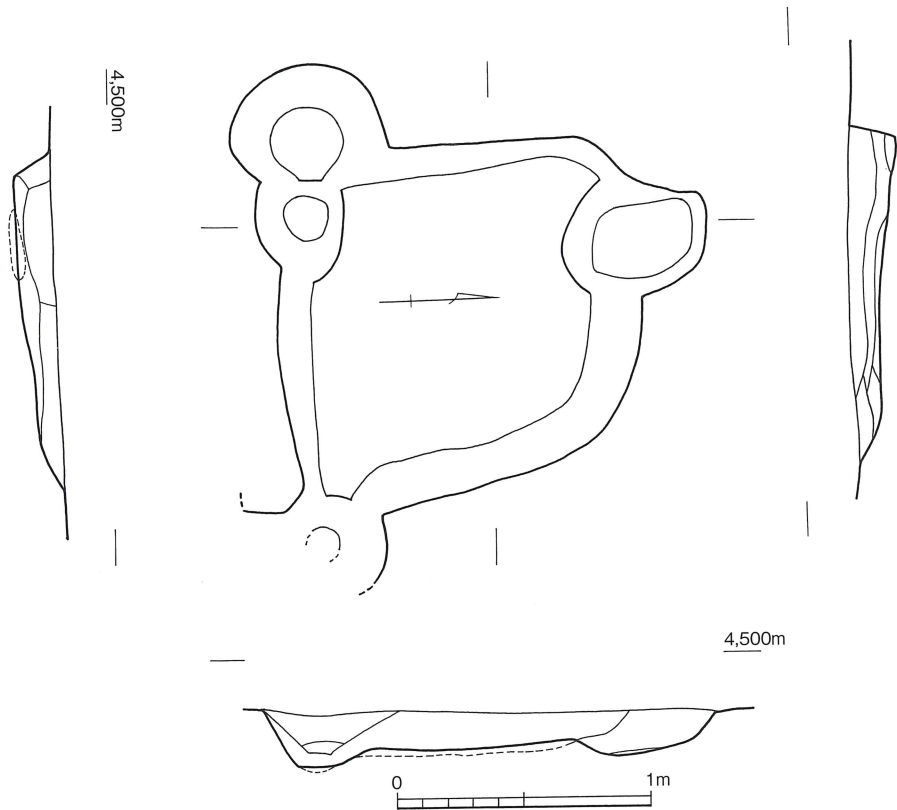
太鼓形分銅？

SK359 第132図に図示したSK359は第2南北街路下で確認されたSK352に上面を削られている土坑である。残された遺構の規模は、南北1.1m、東西1.3mで、断面形はU字型をしており、最深部の深さは約60cmである。

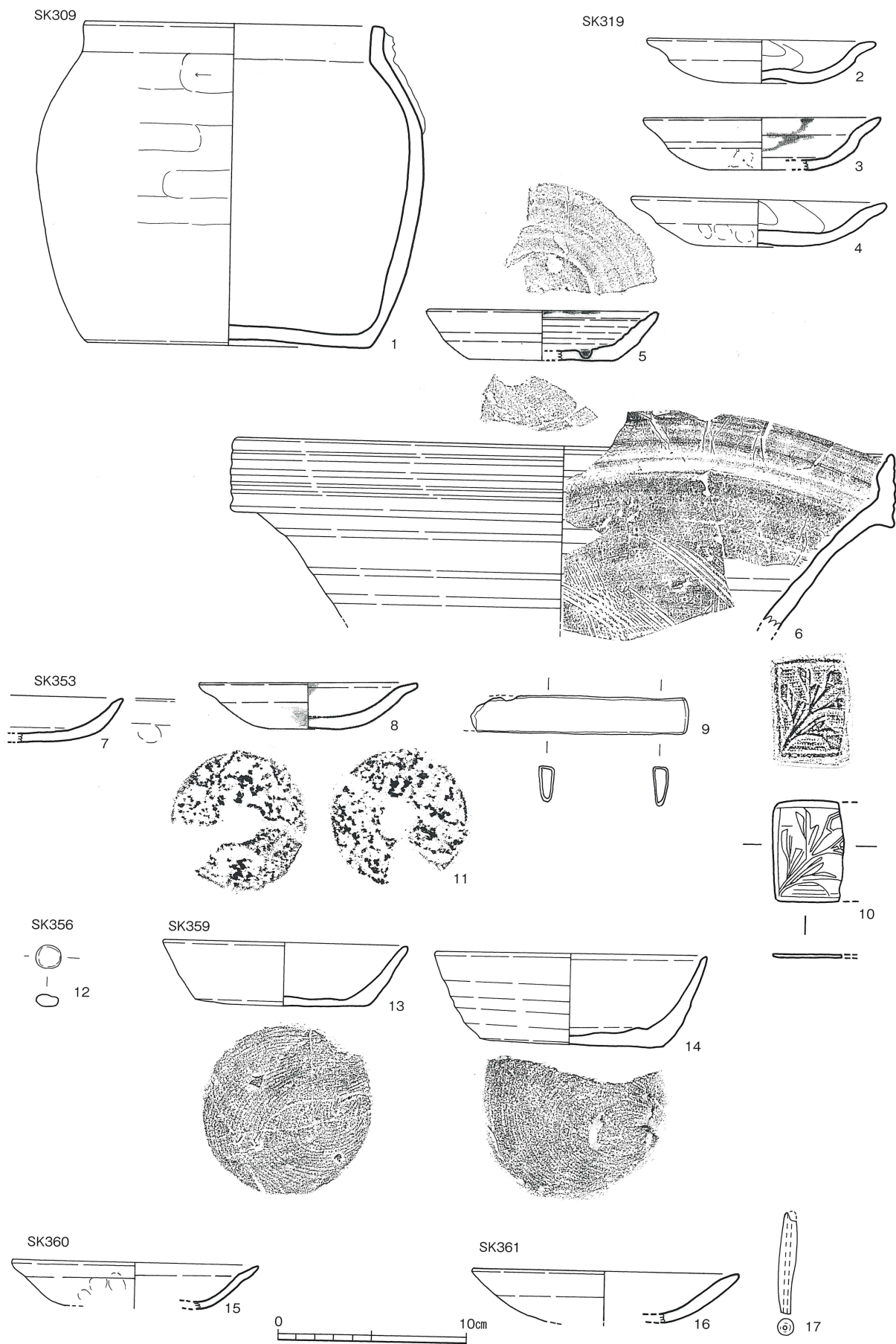
出土遺物は第140図13・14に図示したほぼ完形品の在地系土師器が出土している。口径は13が13cm、14が14.4cmである。時期は14世紀代の遺構である。

#### SK360

第139図に図示したSK360は第2南北街路下のJ・K31で検出さ



第139図 SK360実測図 (1/30)

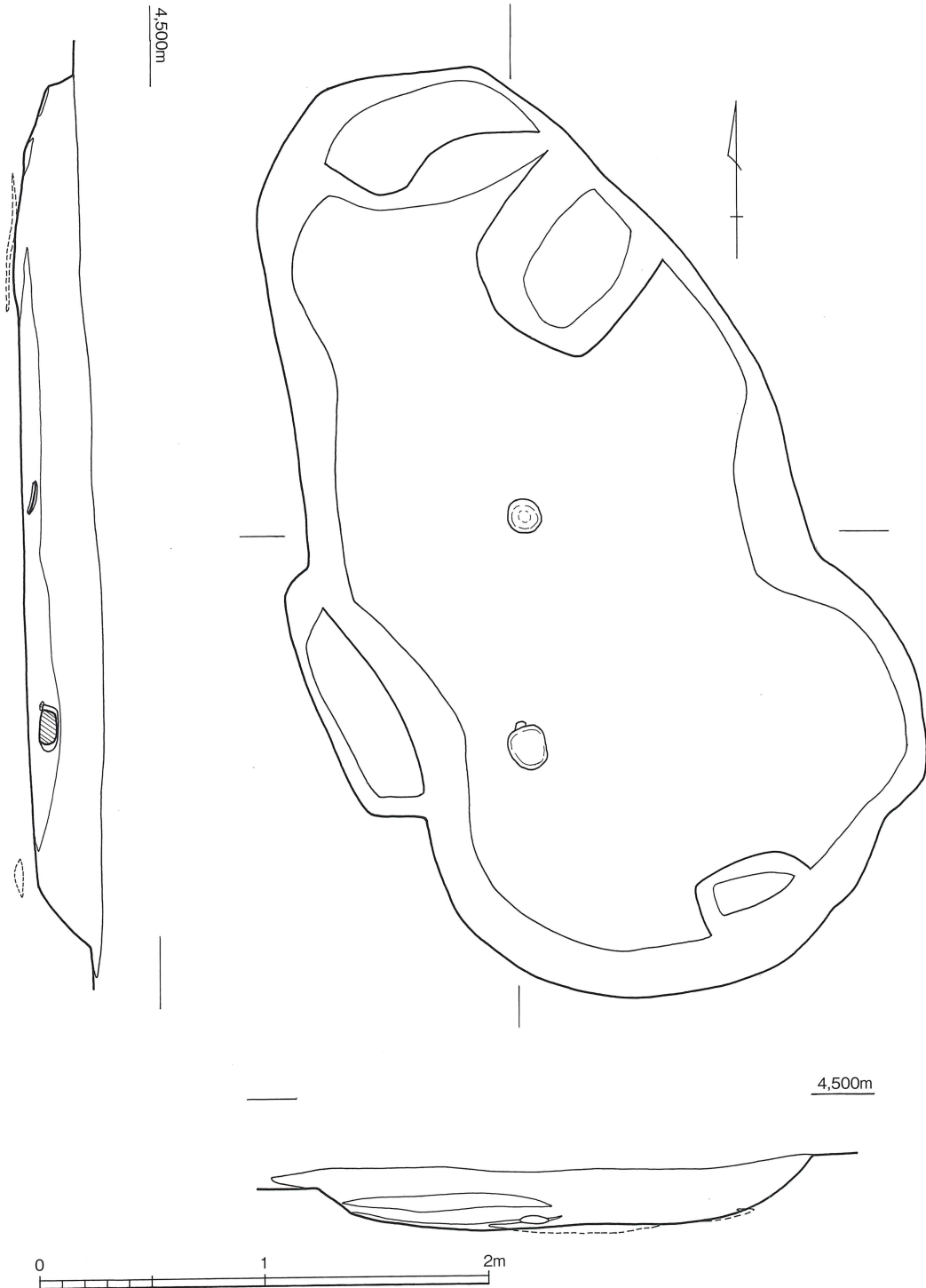


第140図 SK309・319・353・356・359・360・361出土遺物実測図 (1/3) 9(1/2) 10・11(1/1)

れた土坑である。遺構の規模は、南北1.5m、東西1.4mで、平坦な床面までの深さは約10cmと比較的浅い。遺構の周辺は柱穴状遺構が掘り込まれている。出土遺物は第140図15に図示した口径13cmの京都系土師器の他、備前焼の破片が出土している。

京都系土師器 遺構の時期は京都系土師器や備前焼から16世紀後葉と考える。

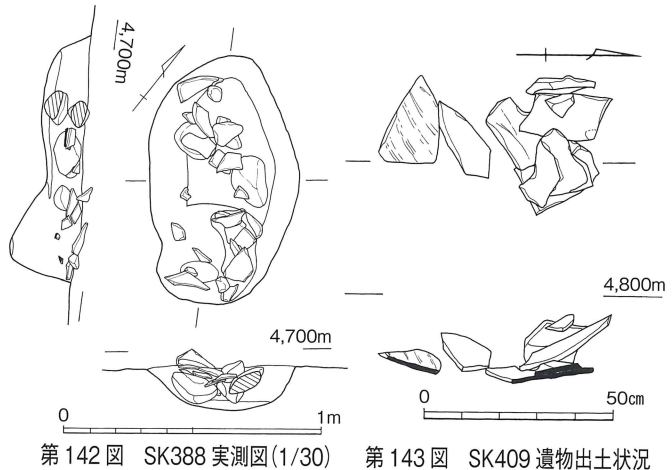
SK361 第139図に図示したSK361・362は第2南北街路下のJ・K31で検出された土坑である。検出した当初は隣接する二つの遺構と判断したが、調査を進行すると同じ遺構であることが判明した。遺構の規模は、南北4.4m、東西2.3mで、平坦な床面までの深さは約30cmである。出土遺物の量は少なく第140図16・17に図示した。16は口径14.2cmの京都系土師器である。17は紡錘形の4.2gの土錘である。



第141図 SK361・362実測図(1/30)

灯明皿

SK388 第142図に図示したSK388はSD363の上面で検出された土坑である。遺構の規模は、長軸が1m、短軸が0.6mの楕円形をしている。深さは、南側に掘り込みがあり15cmと30cmの二段になっている。遺構内からは、礫と共に多量の瓦質土器が出土した。第153図2がそれで、3ヶ所に脚が付く火鉢である。この他1の口径11cmで灯明皿に転用された京都系土師器が出土している。

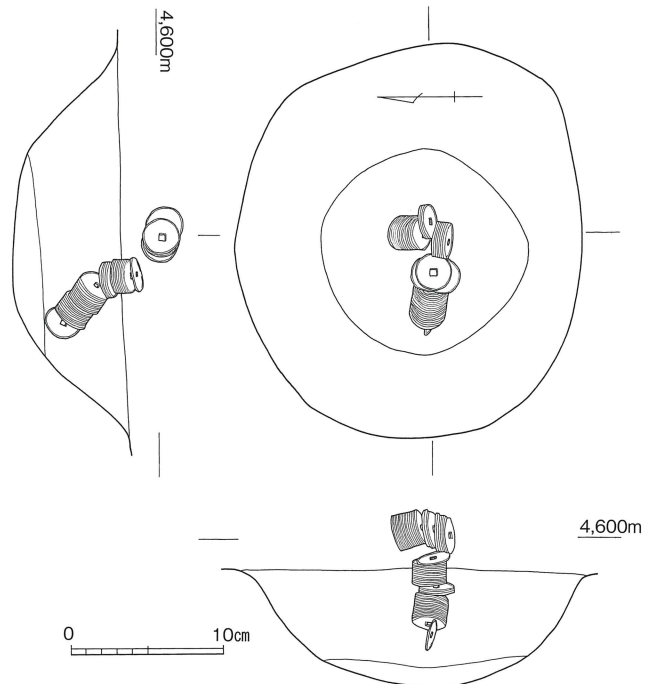


第142図 SK388実測図(1/30)

第143図 SK409遺物出土状況実測図(1/20)

遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SK404 SK404は包含層掘削後、第2南北街路の検出を行なった。その際J35で東西に細長い浅い土坑を検出した。時期は近世の可能性が高い。出土した遺物は、第153図3～6に図示した遺物が出土している。3～5は京都系土師器であるが、5の口径は10.8cmである。6は完形品であるが、銭貨名は判読できない。時期は遺構の検出状況から近世の可能性が高い。



第144図 SK410実測図(1/5)

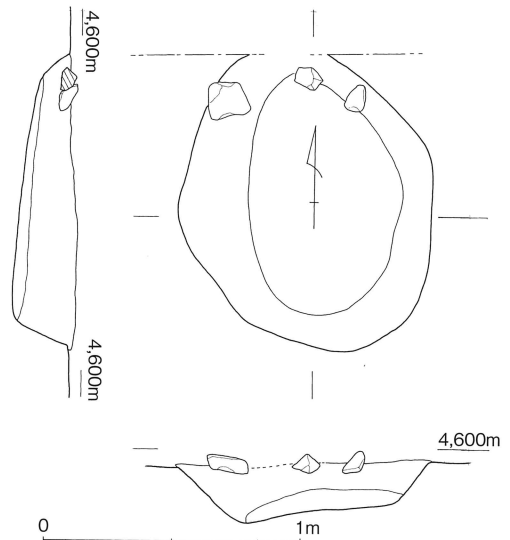
備前焼大甕

SK409 SK409は第2南北街路の上面で検出した土坑である。位置はJ36で、第143図に図示した備前焼の大甕の破片が出土した。遺構の輪郭は明確でないが、大甕を埋設した土坑の存在を想定した。時期は、16世紀後葉から末葉と考える。

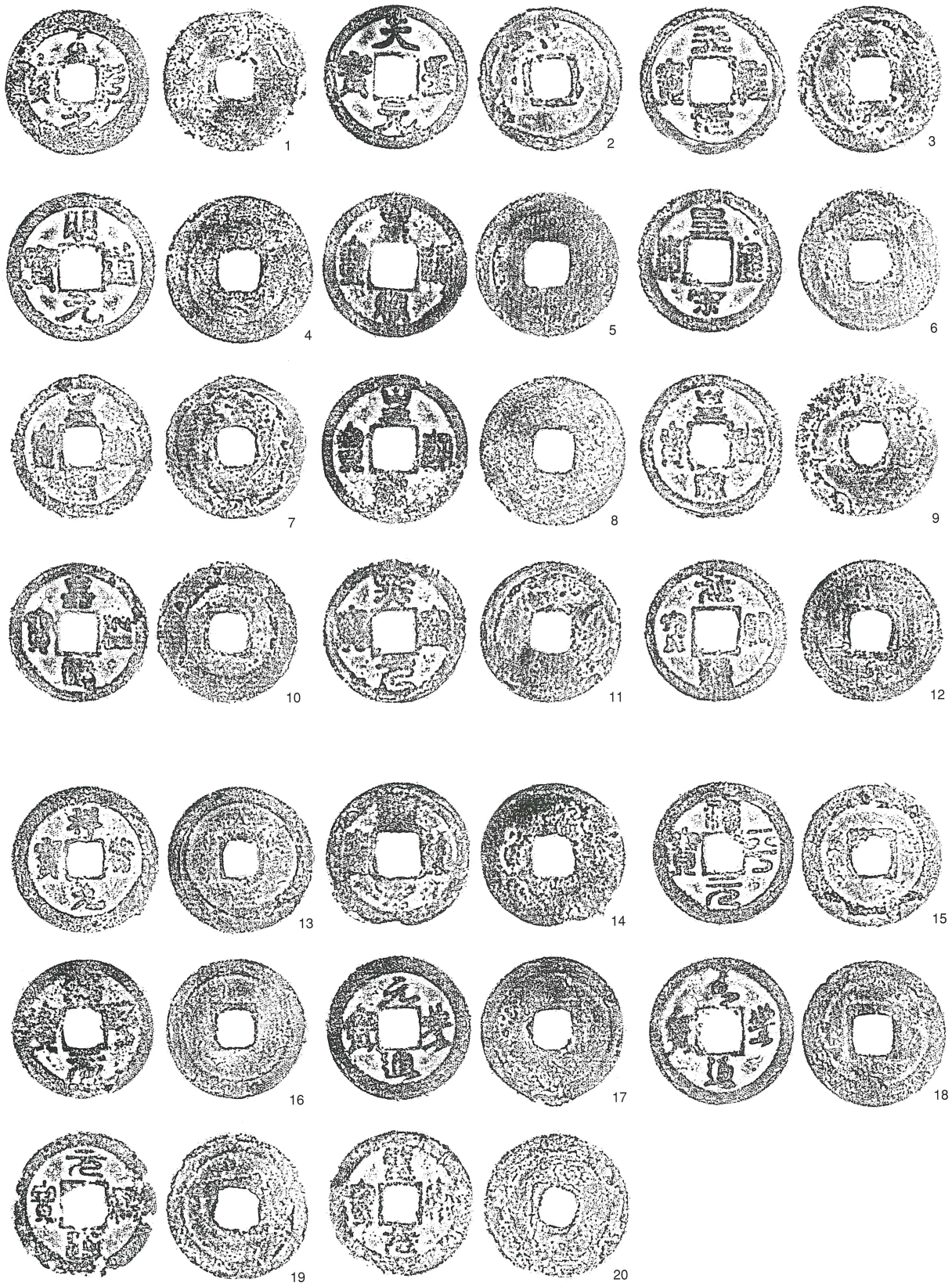
緋銭

SK410 第144図に図示したSK410はSD363の上面で確認された土坑である。遺構の規模は、南北23cm、東西26cm、深さ8cmの小規模なものである。断面はボール状で底は丸い。遺構内からは、第146～148に図示した銅銭が出土した。報告にあたり、上位出土をNo.1、下位出土をNo.2としたが、出土状態を見ると、本来は一本の緋銭であった可能性が高い。

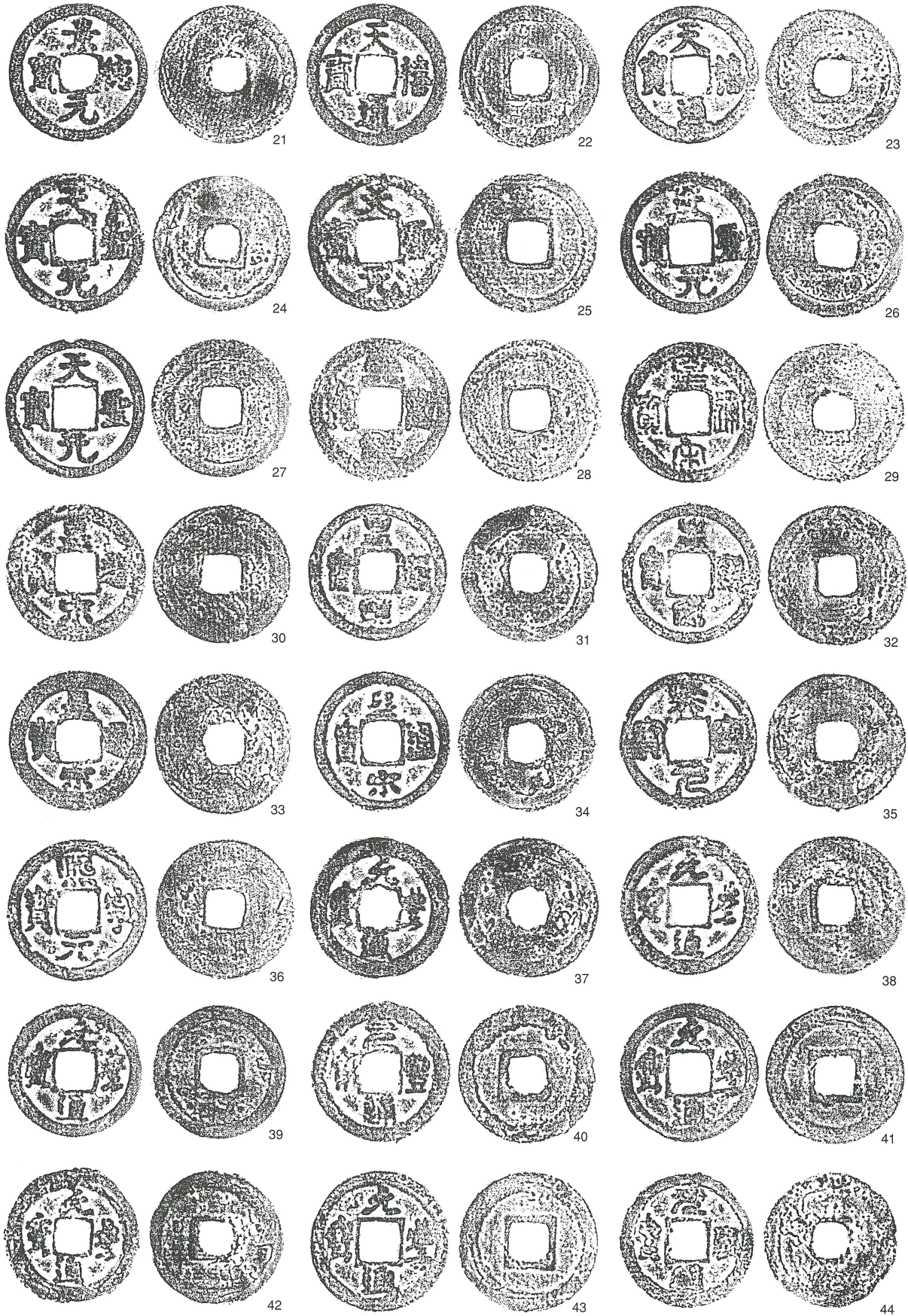
銅銭は60枚が確認されたが、銭貨名と数は、初鑄順に995年の「至道元寶」が1枚、1004年の「景德元寶」1枚、1009年の「祥符元寶」1枚、1017年の「天禧通寶」2枚、1023年の「天聖元寶」7枚、1032年の「明道元寶」1枚、1038年の「皇宋通寶」12枚、1056年の「嘉祐通寶」1枚、1064年の「治平元寶」2枚、1068年の「熙寧元寶」3枚、



第145図 SK415実測図(1/30)



第146図 SK410出土銅銭実測図① (1/1)



第147図 SK410出土銅銭実測図② (1/1)



1078年の「元豊通寶」9枚、1086年の「元祐通寶」12枚、1094年の「紹聖元寶」2枚、1098年の「元符通寶」3枚、1101年の「聖宋元寶」3枚である。

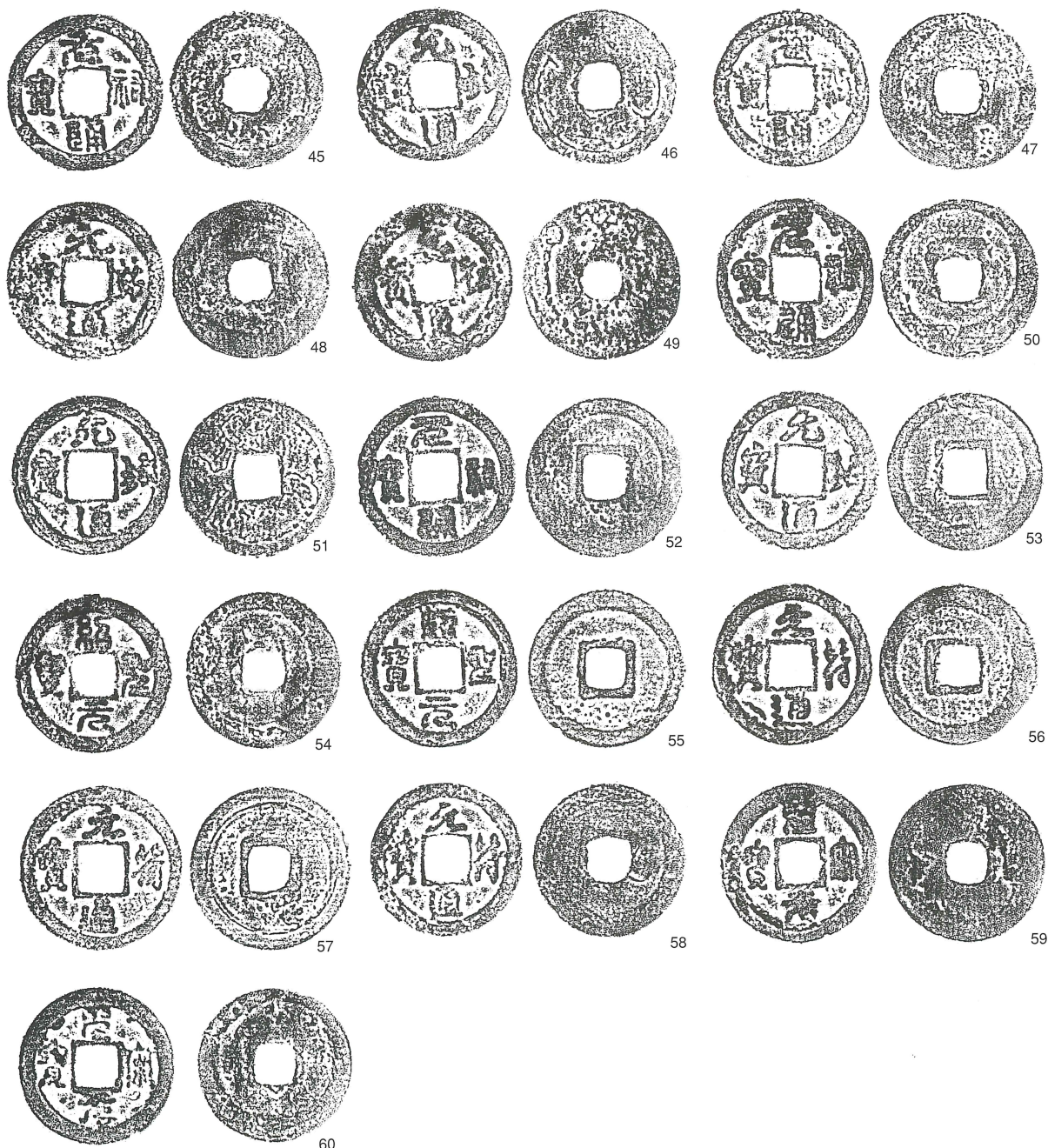
銭貨以外の遺物の出土はないが、遺構の検出状況から16世紀後葉と考える。

瓦灯

SK411 SK411はSD363の上面、J・K32で確認された土坑である。遺構の規模は南北0.8m、東西1mの楕円形で、深さは約20cmである。出土遺物は第153図7に図示した瓦質土器の瓦灯の上部である。遺構の時期は、検出状況から16世紀後葉と考える。

SK412 SK412はSD363の上面、K32で確認された土坑である。遺構の東側は調査区外に延びている。確認できる遺構の規模は、南北1.7m、東西0.9mの不定形をしており、深さは約15cmである。遺構内から出土した遺物は第153図8・9に図示した口径12.0cmと12.4cmである。

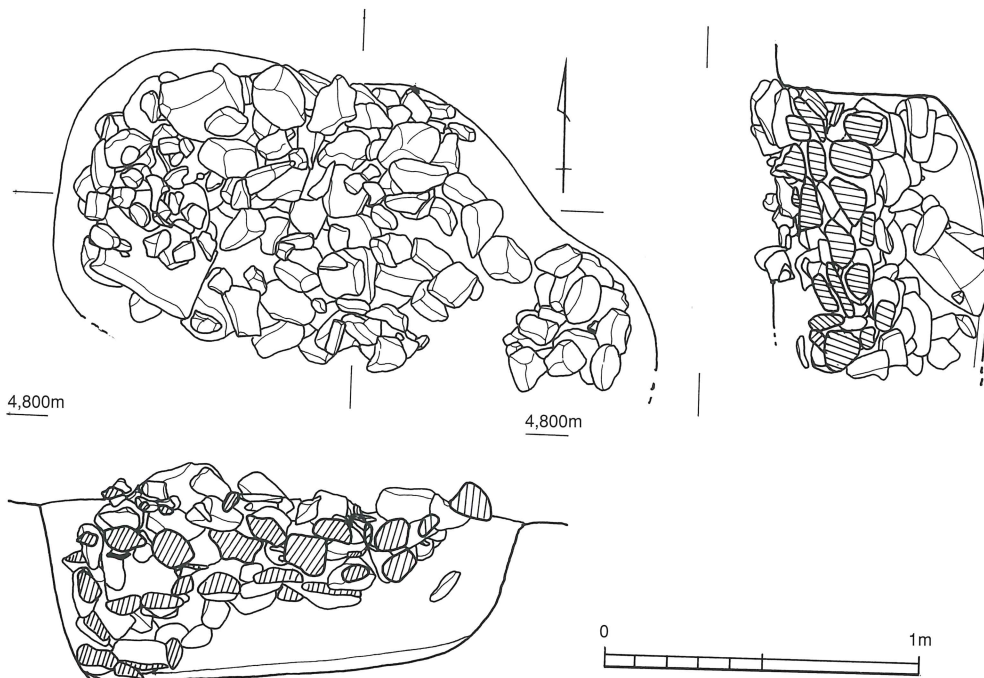
遺構の時期は、16世紀後葉と考える。



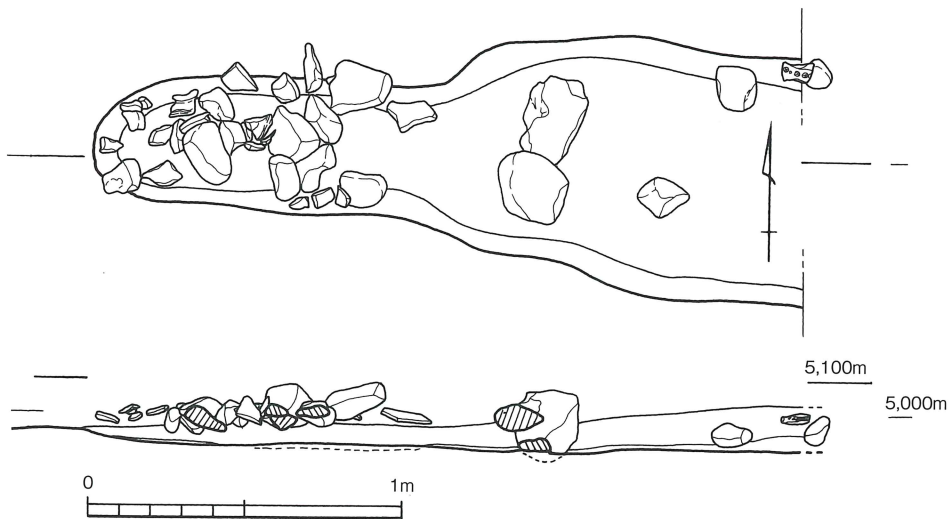
第148図 SK410出土銅銭実測図③ (1/1)

SK415 第145図に図示したSK415はSD363の上面、J36で確認された土坑である。遺構の規模は、南北1.2m、東西1mの楕円形をしており、南に向けて傾斜する床面は南端で最深部となり25cmである。遺構内には焼土層もあり、第153図10～12の京都系土師器が出土している。いずれも小破片であるが、12は口径5cmで、焼塩壺の蓋の可能性がある皿である。時期は、遺構内に焼土を含むことから、天正14年（1586）以降の可能性が高い。

SK422 第149図に図示したSK422は、J35の第2南北街路面に掘り込まれた土坑で、内部に礫が充填されていた。遺構の規模は、南北約1.1m、東西2mで、深さは約60cmである。遺構内からは、礫に混じり、第154図に図示した遺物が出土している。1・2は器高が高い在地化した京都系土師器の坏である。3～5は瓦質土器で、3は浅鉢で、4は口縁部が直立し、胴部が緩く張る甕である。5は底部近くに細い突帯のある火鉢である。6は安山岩製の板状の製品で、穿孔がある。7は茶臼の下臼である。8は四面使用された砥石で、天草石を素材にしている。9の銭貨は1038年初鑄の「皇宋通寶」である。遺構の時期は、検出状況から16世紀末葉と考える。



第149図 SK422 実測図 (1/30)



第150図 SK429 実測図 (1/30)

SK429 第150図に図示したSK429は包含層を除去した後、J36のSD363上面で検出された東西に細長い不定形な土坑である。遺構は東に延びており、確認された規模は、東西2.3m、南北約0.6mで、深さは10cmである。遺構内からは、図のように礫が出土しており、それに混じり第153図13が出土している。この土器は、タイ産四耳壺の肩部の破片で、時期は、16世紀後葉から末葉と考える。

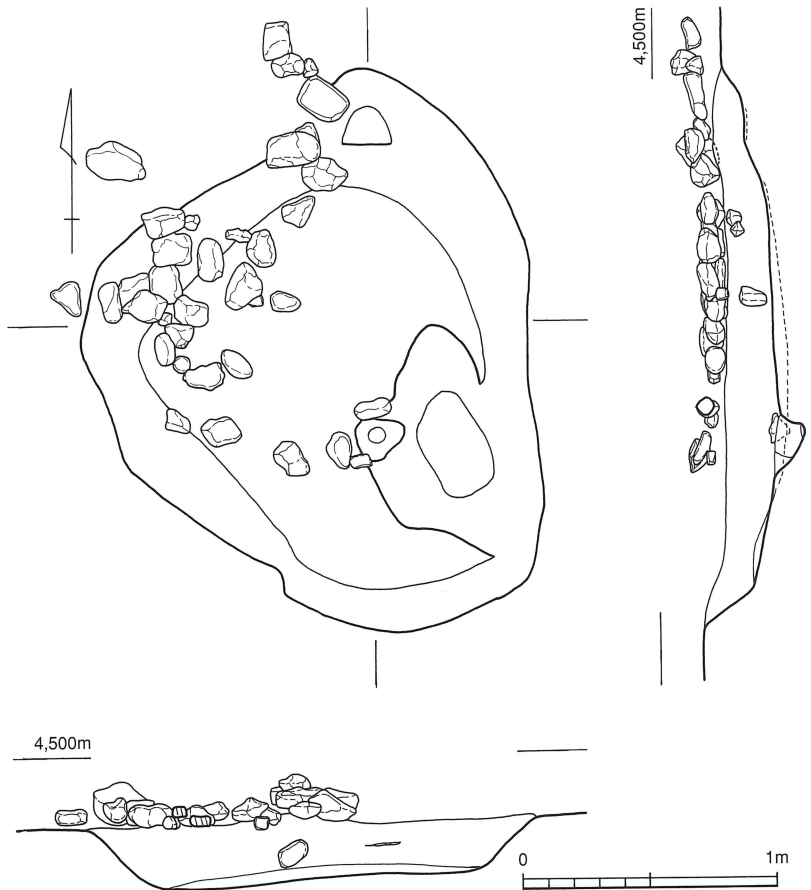
SK430 第151図に図示したSK430は第2南北街路に掘り込まれた土坑で、J32で検出された。遺構の規模は、南北2.2m、東西1.8mの不定形をしている。床面は、南東部に掘り込みがあるが、深さは25cmである。上面には礫が散布している。遺構内からの出土遺物は少なく、第153図14に口径13.8cmの京都系土師器を図示した。時期は、検出状況から16世紀後葉から末葉と考える。

SK431 第152図に図示したSK431は埋立てられたSD363の上面に掘り込まれた土坑で、J33で検出された。確認できた遺構の規模は南北1.2m、東西0.7mで、遺構の深さは約60cmである。遺構内からは第153図15～32の京都系土師器が出土した。完形品も多く、一括廃棄された状況である。

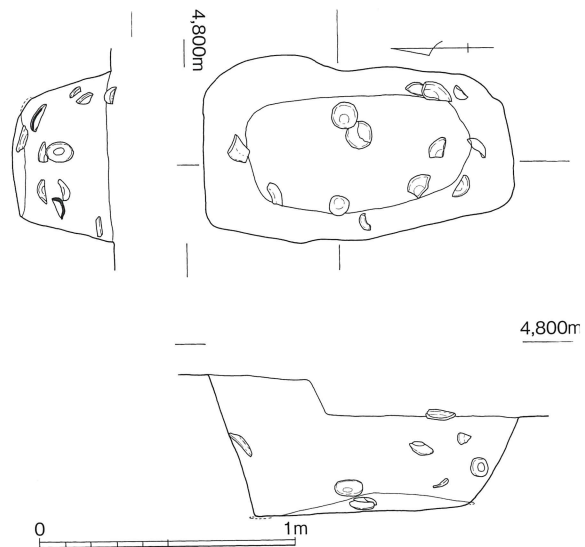
出土した京都系土師器の口径は、15・16が9cm前後、17～22が11cm前後、23～26が13cm前後、27～30は15cm前後、31が約17cm、32が5cmで焼塩壺の蓋状である。このように、豊後府内で出土する京都系土師器の五法量と焼塩壺の蓋の全てが揃っている。

時期は、16世紀後葉と考える。

SK434 第155図に図示したSK434は、第2南北街路の上面、J34で検出された土坑である。遺構の規模は、南北1.1m、東西0.8mの不定形をしており、平坦な床面



第151図 SK430 実測図 (1/30)

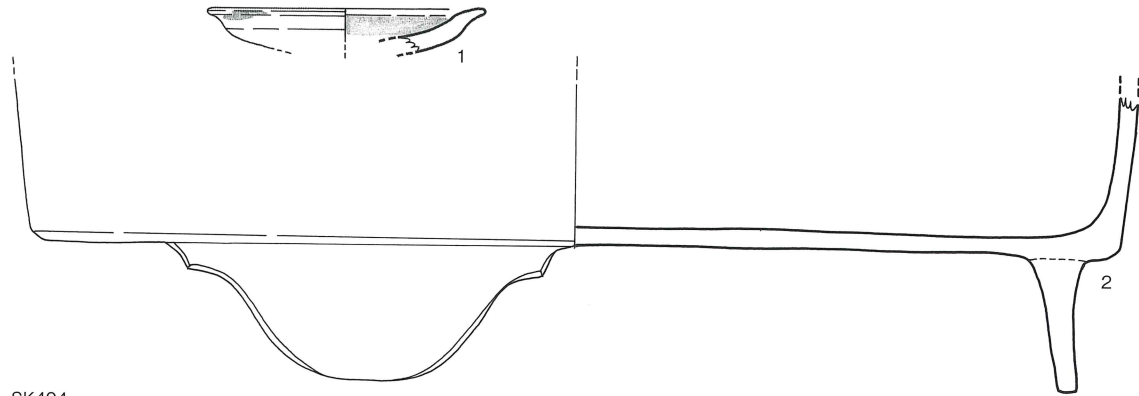


第152図 SK431 実測図 (1/30)

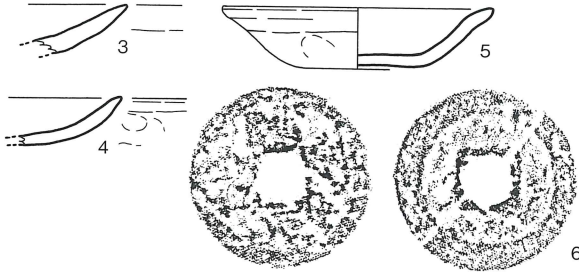
五法量

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

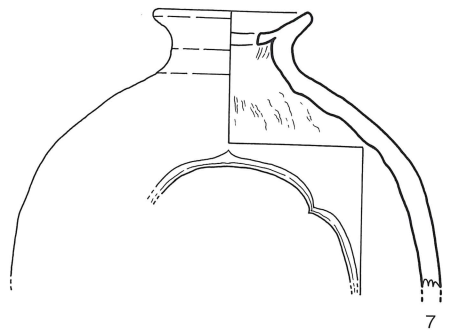
SK388



SK404



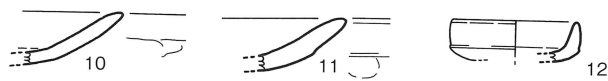
SK411



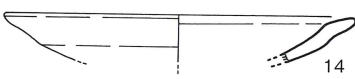
SK412



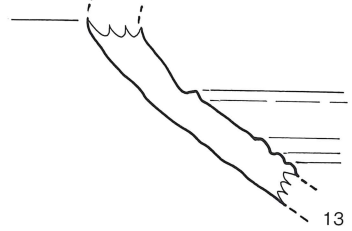
SK415



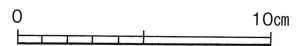
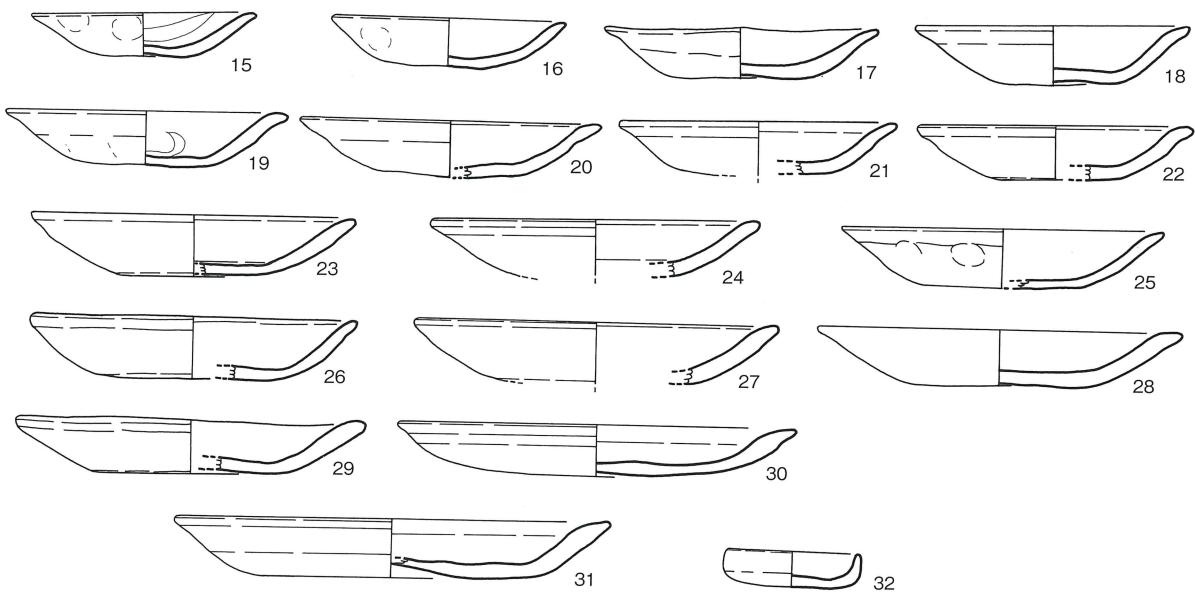
SK430



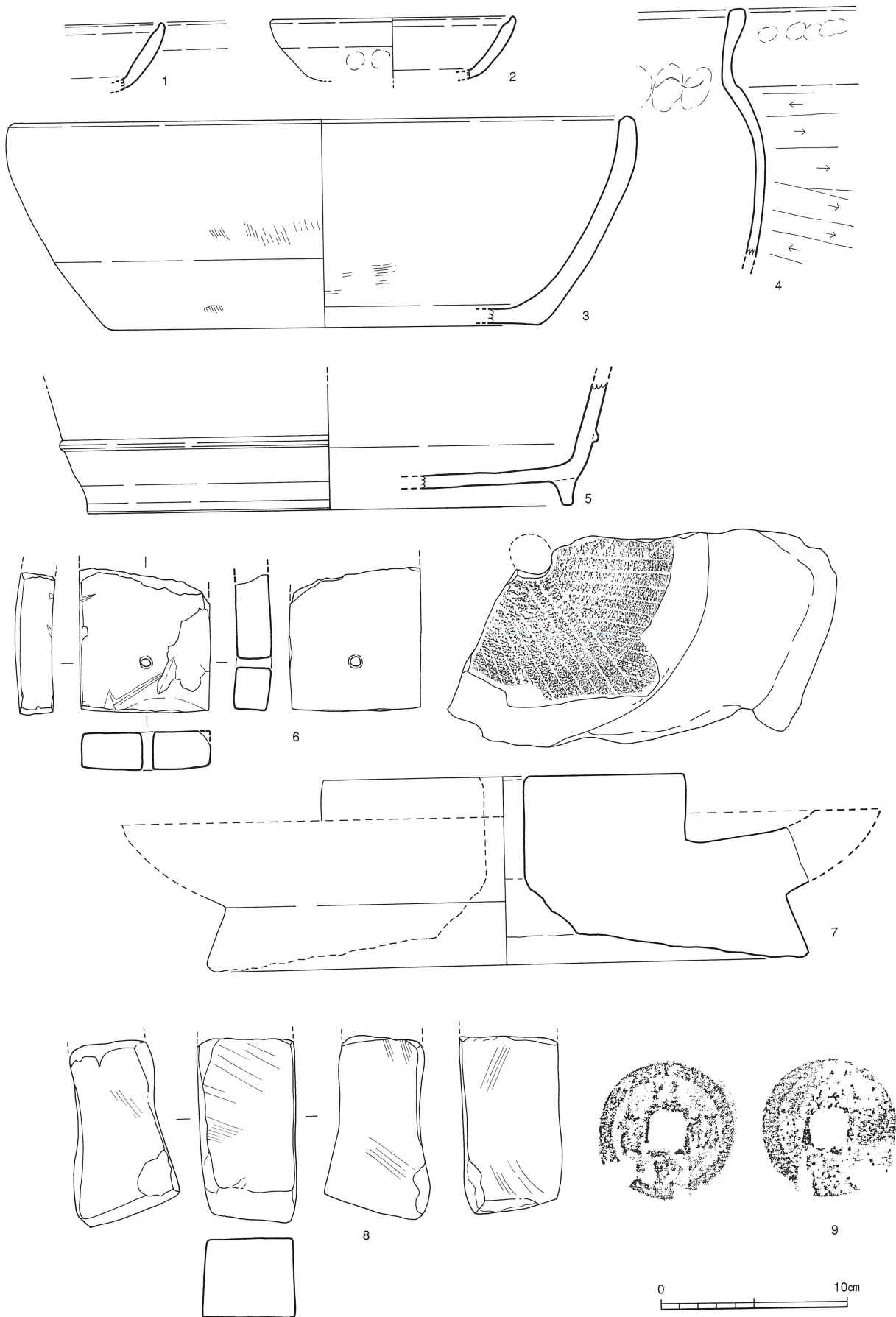
SK429



SK431



第153図 SK388・404・411・412・415・429・430・431出土遺物実測図(1/3) 6(1/1)



第154図 SK422出土遺物実測図 (1/3) 9(1/1)

までの深さは約20cmである。さらに中央部に直径30cm、深さ約40cmの柱穴状遺構がある。遺構内からは礫がまとまって出土し、それに混じり、京都系土師器の小破片が出土している。

時期は、出土遺物や検出状況から16世紀後葉から末葉と考える。

**SK438** 第156図に図示したSK438は、第2南北街路下のJ34で検出された遺構である。図では、南北1m以上、幅約0.7mの規模であるが、J35にこの遺構の南の延長部と想定される遺構が検出されている。それを加えると、南北に2.5mの細長い土坑である。遺構内からは、礫と一緒に第159図1～7に図示した在地系土師器が出土している。1～3は口径8cm前後の皿である。4～7は坏で、4の口縁部は中位の器壁が最大になる。5～7は底部から直線的口縁端部が尖るように伸びる口縁部である。

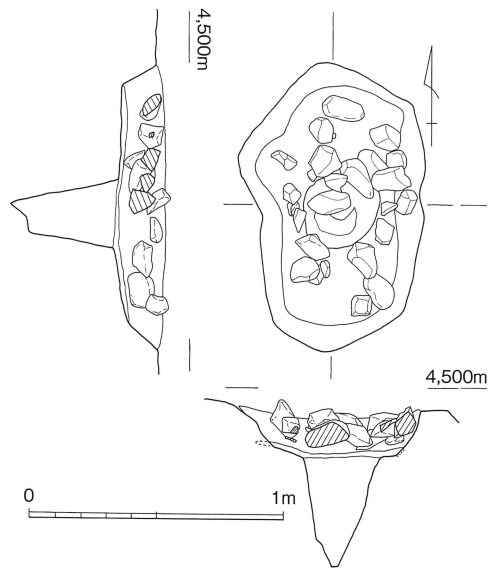
遺構の時期は14世紀代である。

**SK457** 第157図に図示したSK457はJ37の第2南北街路と万寿寺の北側の東西街路との交差点で検出された土坑である。遺構は両街路を除去後に検出された。また、西側はSK533の大型土坑と重なっている。確認できる遺構の規模は、南北3.3m、東西1m以上で、深さは約50cmである。

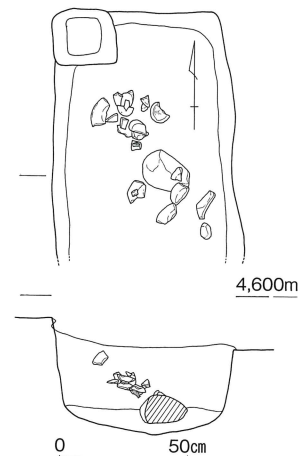
遺構内からは瓦質土器や京都系土師器の破片が出土しており、16世紀後葉と考える。

**SK458** SK458も第157図に図示している。遺構は、SK457と同じ位置、同じ層位で検出された。遺構は西側でSK457と重なり、確認できる規模は、南北1.0m、東西0.6m以上で、深さは約20cmである。遺構内には礫が充填されており、その状態から、SK458が新しい。遺構内から遺物の出土はなく、時期を決められないが、街路下で検出され、SK457より新しいことから、16世紀後葉と考える。

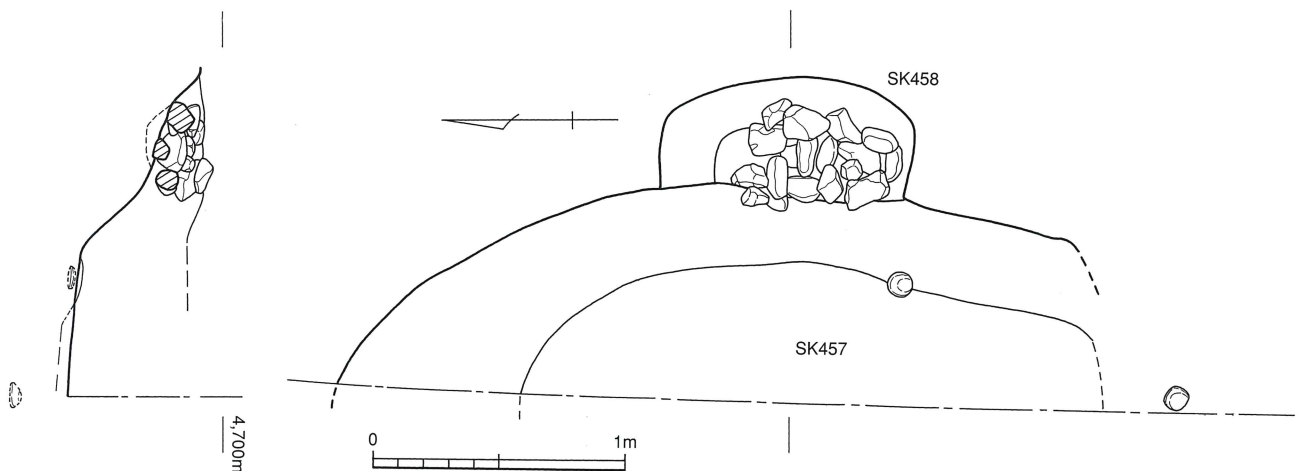
**SK465** SK465はJ34の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約3.6m、東西約2.5mで、深さは約



第155図 SK434実測図 (1/30)



第156図 SK438実測図 (1/30)



第157図 SK457・458実測図 (1/30)

白磁の碗

30cmである。床面は平坦で、南西部をSK470が切っている。

遺構内からは、第159図8～17に図示した遺物が出土している。8は白磁の碗である。9～13は京都系土師器で、口径は9～12が11cm前後で、13は13.8cmで一段階大きい。14は備前焼の播鉢で、内面には放射状の播り目が付けられている。15は口縁部が直立する瓦質土器の甕である。16・17は銅銭である。2点とも破損、磨滅で銭貨名は不明である。

**SK466** 第158図に図示したSK466は、J35で検出された不定形土坑である。第2南北街路下で検出されたが、西側と北側は、土層観察用の土手で未調査に終わった。遺構の規模は、東西1.5m以上、東西2m以上で、床面までの深さは約30cmである。遺構内からは人頭大よりひと回り大きい安山岩の礫が出土している他、第159図18～20の京都系土師器が出土している。

京都系土師器の口径は、18・19が11cm前後であるが、20は13.9cmで一段階大きい。時期は16世紀後葉である。

**SK469** SK469はJ34の第2南北街路下で検出された土坑である。土坑の規模は、南北約4.7、東西約2.5mの小判形をしており、深さは、検出面から30cmであった。先に報告したSK465の北方にあり、形状が類似する。遺構は大きいが出土遺物は少なく、第159図21に図示した口縁部の肥厚する瓦質土器のが出土している。

遺構の時期はこの他、京都系土師器の小破片が出土していることから、16世紀後葉と考える。

**SK470** 第159図22・23の京都系土師器はJ・K34・35で検出したSK270から出土したものである。SK470は第2南北街路下で検出された土坑で、確認できる規模は、南北約2.5m、東西約3mの不整円形をしている。出土遺物は多くないが、京都系土師器の口径は、22が8.4cmで、灯明皿として再利用されている。23は12cmである。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

灯明皿

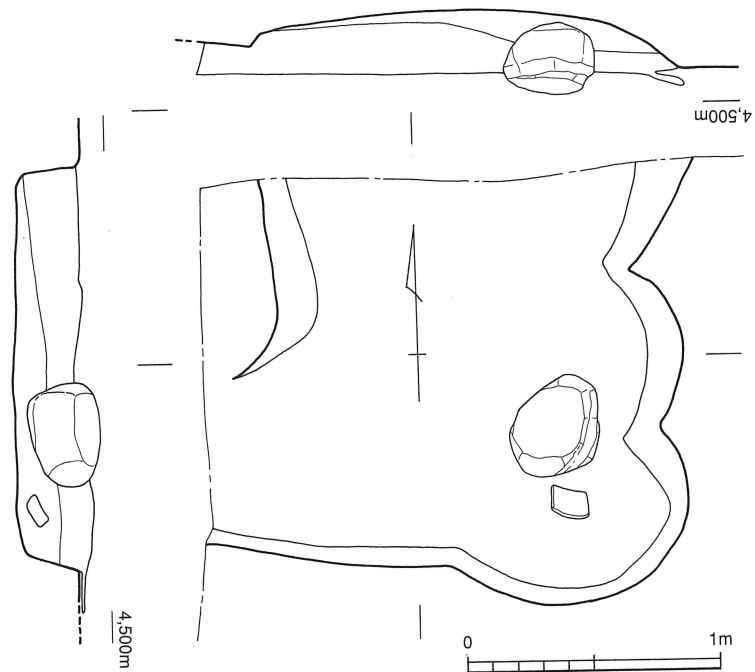
**SK471** 第160図に図示したSK471はJ32・33で、第2南北街路を除去後に確認された土坑である。確認された遺構の規模は、南北約4.2m、東西約2m以上の楕円形をしており、床面は平坦で、深さは15～20cmである。出土遺物は多くないが、遺物第164図1～3に代表的なものを図示した。1は青磁皿の輪花皿である。2は口径13cmの京都系土師器である。3は瀬戸美濃系の卸し皿である。

卸し皿

遺構の時期は16世紀後葉と考える。

**SK474** SK474は第2南北街路下で検出された、SK469の北東隅の上面で重なり、北方に広がる浅い土坑である。確認できる遺構の規模は東西幅約1.1mで、南北両端は不明である。土層観察では、SK474が新しい。出土した遺物は第164図4に図示した、口径11.8cmの京都系土師器があり、時期は16世紀後葉と考える。

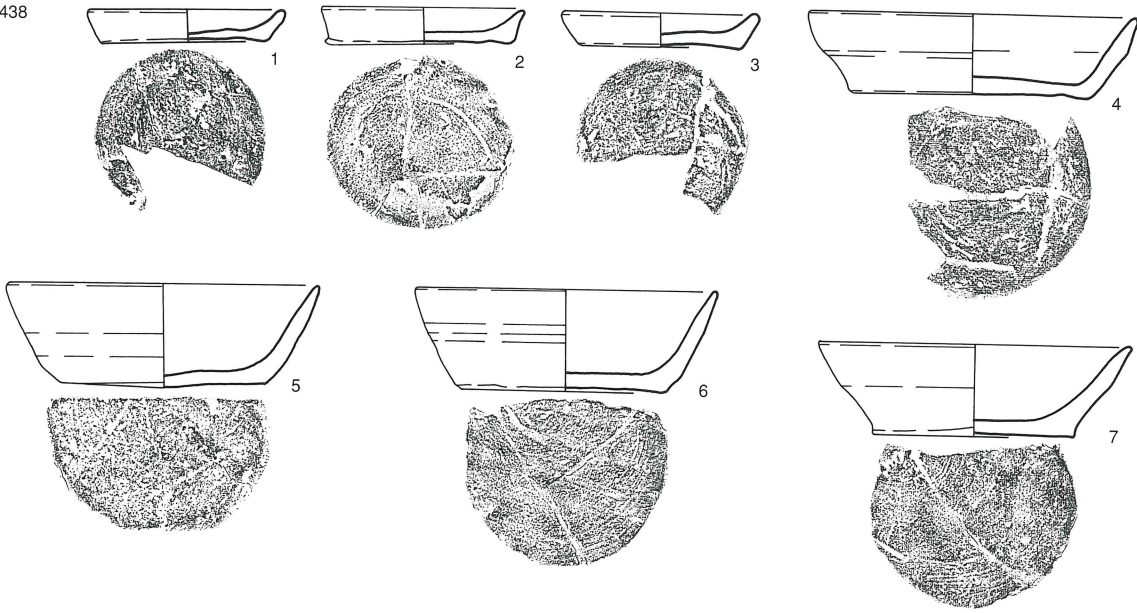
**SK475** SK475はSD200の上面で検出された集石SX442の下部で



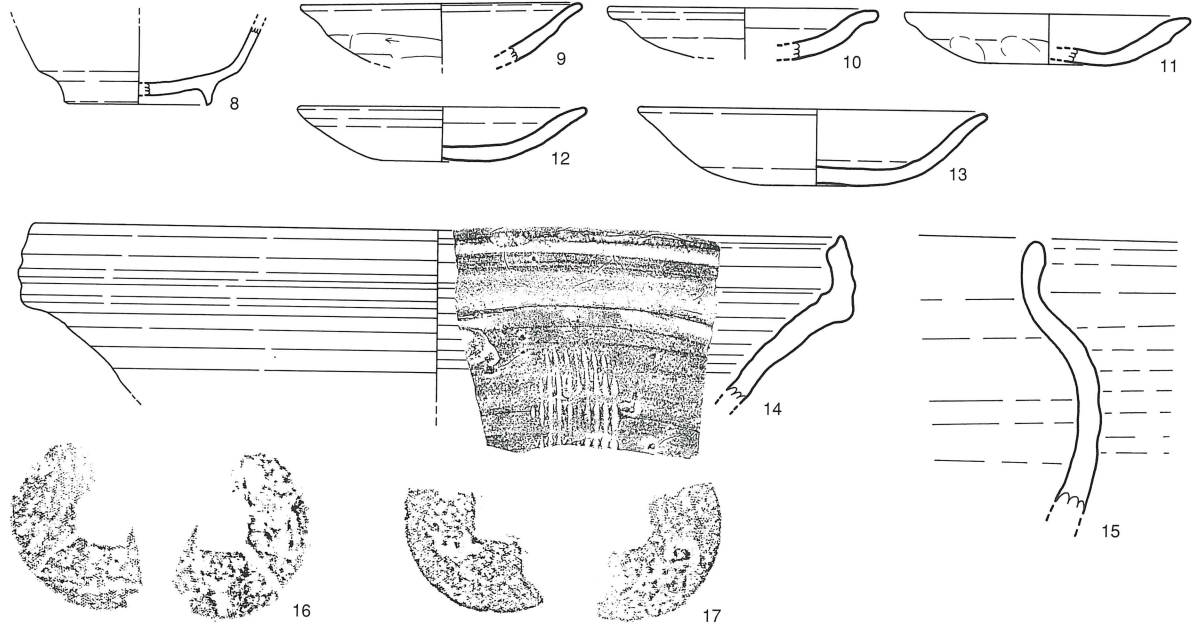
第158図 SK466実測図 (1/30)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

SK438



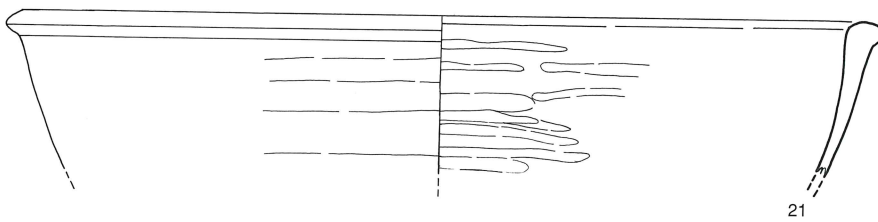
SK465



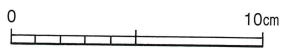
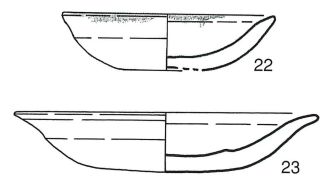
SK466



SK469



SK470



第159図 SK438・465・466・469・470出土遺物実測図(1/3) 16・17(1/1)



検出された土坑である。土坑の形態は不明瞭であったが、第164図5～7に図示した京都系土師器が出土した。いずれも破片であるが、口径は5が8.6cm、7が10.9cm、8が12.2cmである。

遺構の時期は、16世紀後葉と考える。

SK476 SK476はJ35の第2南北街路下で検出された不明瞭な土坑である。周辺には次に報告するSK477もあり複雑に重なり合う。第164図8・9に出土遺物を図示したが、他の遺構出土遺物と区別ができないものもある。口径は8が13.3cm、9は15cmで、16世紀後葉と考える。

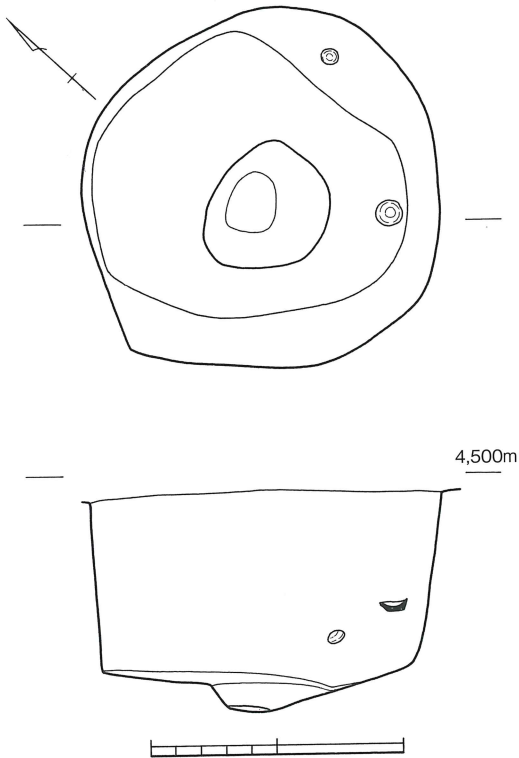
SK477 SK477はJ35の第2南北街路下でSK476と隣接・重複しながら検出された不明瞭な土坑である。このため、遺構の規模・形状は不明である。しかし、第164図10・11に図示した瓦質土器の大形破片が出土している。10は片口の鉢で、底部にはヘラ削り痕が観察される。11は瓦質土器の甕の底部と想定できる。内面には刷毛目調整痕が残る。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SK478 SK478はI・J33の第2南北街路中央部下で検出された遺構で、SK479と切り合い、これが新しい。遺構の規模は南北約2.1m、東西約1.5mの小判形をしている。床面はほぼ平坦で、深さは約40cmである。遺構内には草木灰の層があり、その層の観察で、SK479より新しいことが判る。遺構内からは、第164図12～14に図示した京都系土師器が出土している。口径は12が9cmであるが、13・14は12cmで、13は在地化した坏形の京都系土師器である。14の底部は糸切り底である。

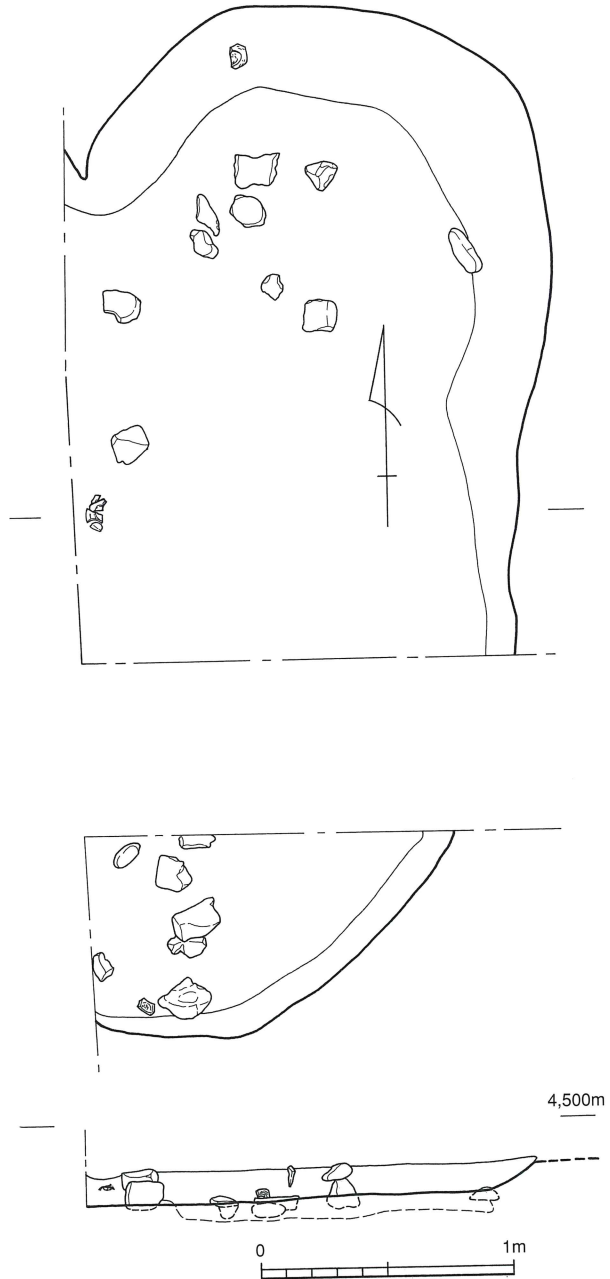
この土坑の時期は、16世紀後葉で、第2南北街路敷設直前である。

片口の鉢

草木灰の層



第160図 SK479 実測図 (1/30)



第161図 SK471 実測図 (1/30)

SK479 第160図に図示したSK479はJ33の第2南北街路下で検出された土坑で、北側の一部をSK478に切られる。確認できる遺構の規模は、直径約1.4mの円形をしており、壁はほぼ垂直に立つ。床面までの深さは約70cmで、中央部に直径40cmで、深さ10数cmの窪みはがある。

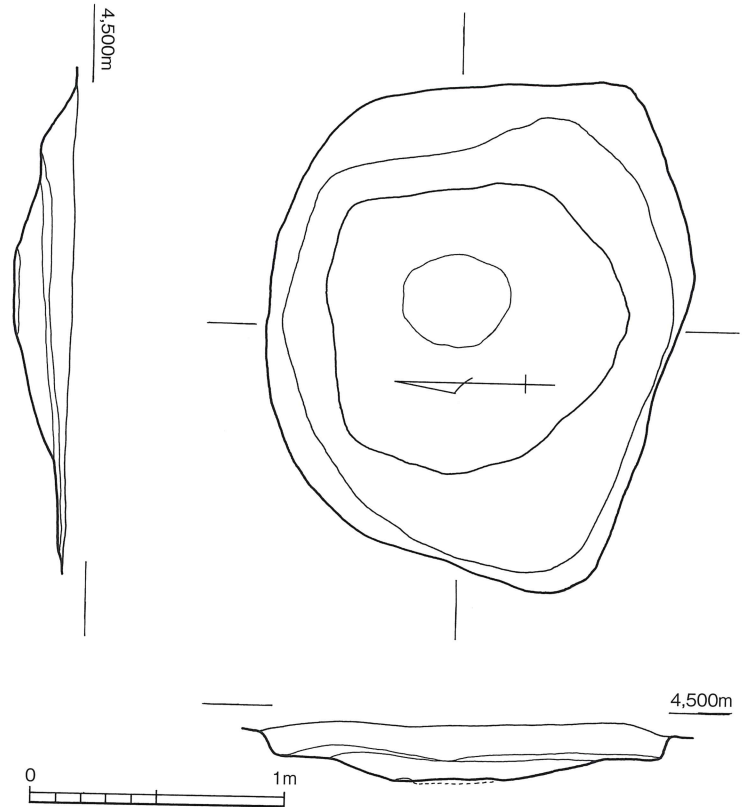
灯明皿

出土遺物は、第164図15～17に図示した。15は口径9.2cmの完形品で、灯明皿として使用されている。16・17の口径は12cmであるが、完形品の17の器高は3.8cmあり、2点とも、京都系土師器が在地化した坏である。時期は、16世紀後葉である。

SK480 第162図に図示したSK480はJ33の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の形状は浅い皿状で、二段堀になっている。その規模は、南北約1.7m、東西約2mの不整円形をしている。二段堀になった中央部が最深部で深さは23cmである。遺構内からは、第164図18・19に図示した口径12.2cmの京都系土師器と、ガラスの小玉が出土している。

ガラスの小玉

時期は、16世紀後葉と考える。



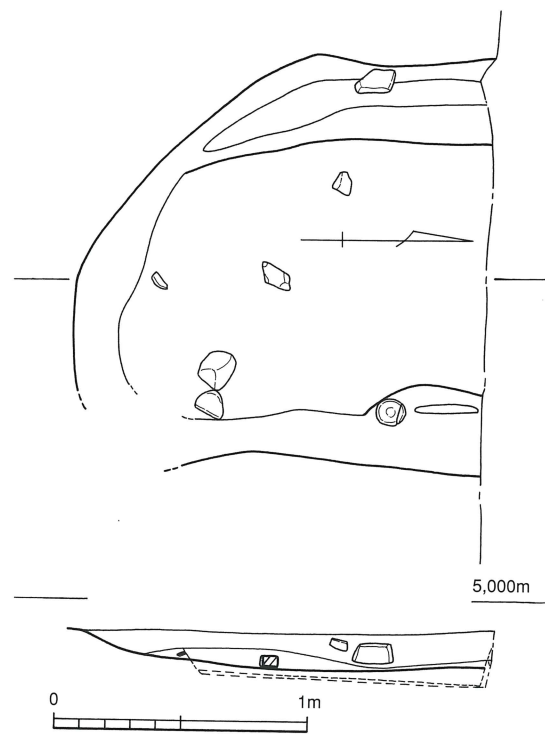
第162図 SK480 実測図 (1/30)

SK481 第163図に図示したSK481はI・J33の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の北側はSK489に切られている。確認できる遺構の規模は、南北2m以上、東西約1.6mの長楕円形をしている。平坦な床面までの深さは約20cmである。遺構の内から出土した主要な遺物は、第164図20～23に図示した。20は景德鎮窯系の青花碗である。21は口径12.5cm、23は口径12.5cmの皿であるが、22は口径11.1cm、器高3.6cmの在地化した坏である。

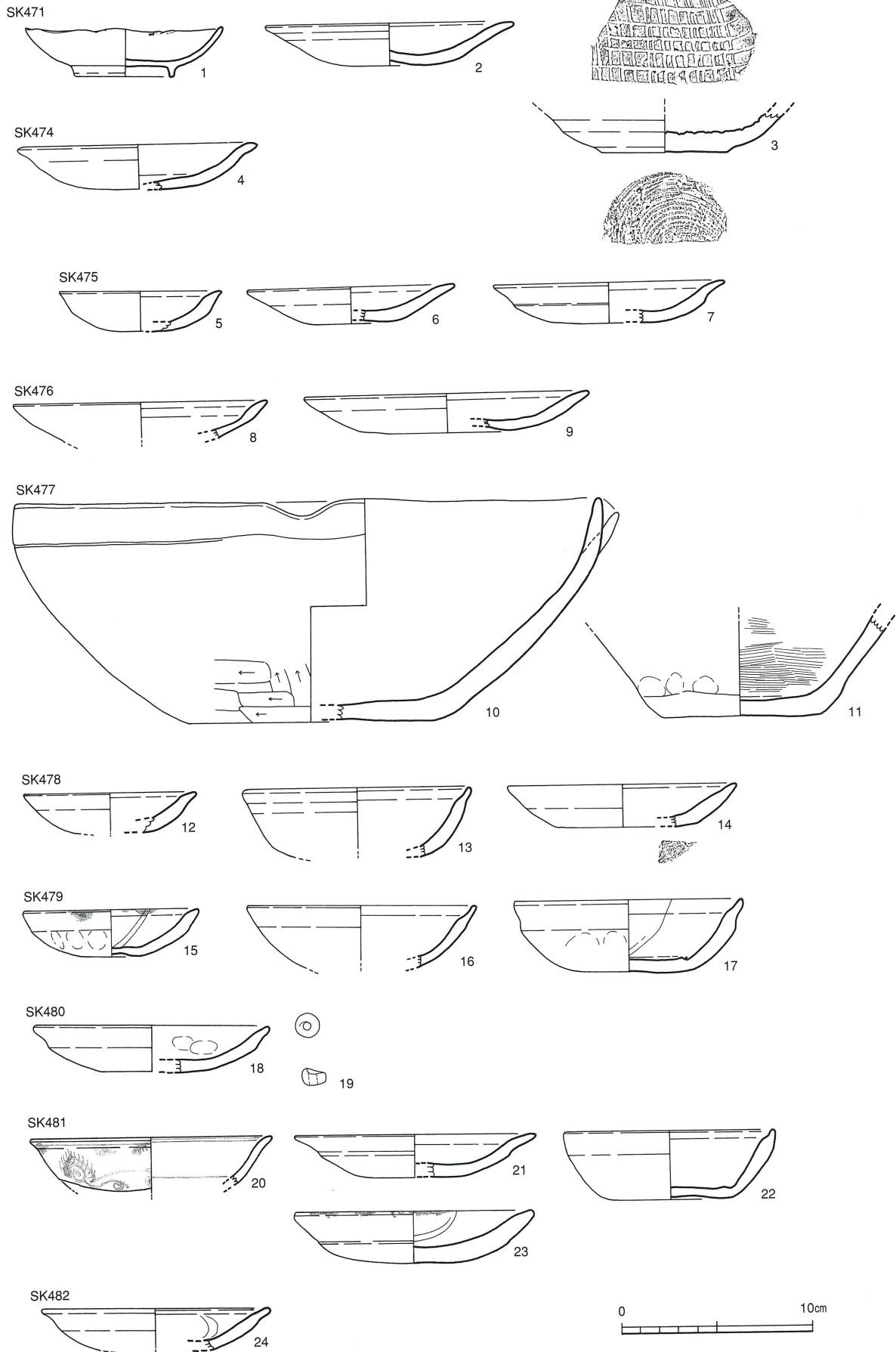
景德鎮窯系

時期は、16世紀後葉である。

SK482 SK482は第2南北街路下のI33で検出された土坑で、SK480の西に隣接する。遺構の規模は、南北約1.3m、東西約0.5mの長楕円形をしており、深さは約20cmである。遺構内からは第164図24に図示し



第163図 SK481 実測図 (1/30)

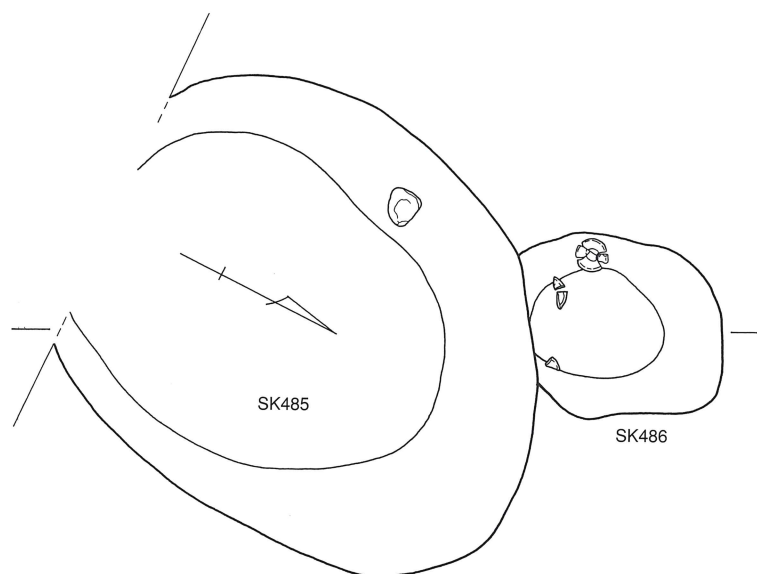


第164図 SK471・474・475・476・477・478・479・480・481・482出土遺物実測図(1/3) 19(1/1)

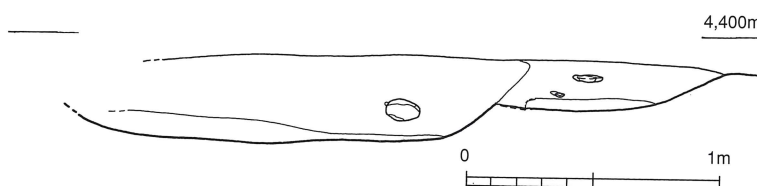
た口径12cmの京都系土師器が出土している。時期は、16世紀後葉である。

SK485 第165図にはSK485と次に報告するSK486を図示した。遺構とも、J32の第2南北街路下で検出され、切り会い、SK485が新しい。SK485の規模は南北約2.3m、東西約1.7mの卵形をしており、床面までの深さは約30cmである。遺構からの出土遺物は、第170図1～5に図示した。1は口径12cmの京都系土師器である。2は刀剣の部品で、金銅製の鍔（はばき）である。3は青銅製品で器種は不明であるが、中空状になっている。4の銅銭は1078年初鑄の「元豊通寶」、5は1068年初鑄の「熙寧元寶」である。遺構の時期は、16世紀後葉である。

鍔(はばき)

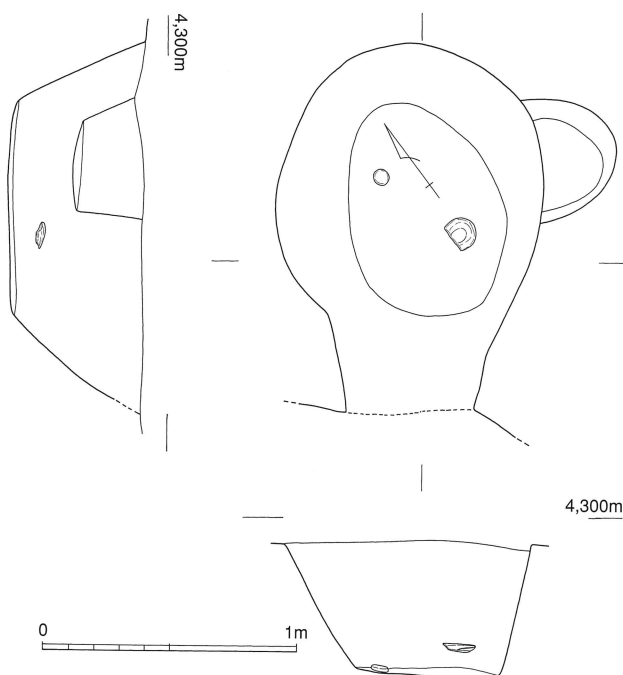


SK486 SK485に東南部を切られたSK468の規模は南北約0.8m、東西約0.7mの不整円形をしており、床面までの深さは約20cmである。遺構内からは第170図に図示した京都系土師器の口径12.6cmの皿と口径11.2cmの坏が出土した。時期は16世紀後葉である。



第165図 SK485・486 実測図 (1/30)

SK487 SK487は第134図に図示した土坑でI・J32の北端で検出された土坑で、第2南北街路の積み土を除去後に検出された。遺構の北側はSK319と切りあい、土層観察ではSK487が古い。遺構の規模は、南北が2m以上、東西が1.6mの楕円形をしており、平坦な床面までの深さは約40cmである。遺構内からは、第170図8に図示した口径9.8cmの器壁の厚い京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。



SK489 SK489はI・J32の第2南北街路下で検出された土坑である。東側にはSK485・SK486があり、土坑群が複雑に切り合う。このため遺

第166図 SK490 実測図 (1/30)

構の規模や形態が不明瞭で、あるが、南北約3m、東西最大幅2m、深さ約40cmの長楕円形を想定する。遺構内からは、第170図9～13に図示した遺物が出土している。9～11は京都系土師器で、11の口径は11.2cmである。12は瀬戸美濃産の天目茶碗で、13は瓦質土器の播鉢である。

遺構の時期は、16世紀後葉である。

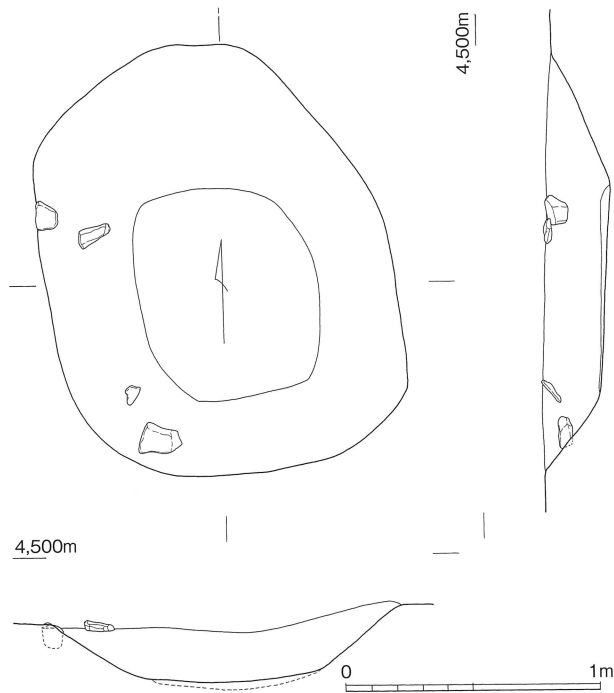
SK490 第166図に図示したSK490はJ32の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は南北1.2m、東西約1.1mの不整形円形をしている。床面は平坦で、深さは55cmである。遺構内からは、第170図14～19に図示した京都系土師器を主体とした遺物が出土している。京都系土師器の口径は、いずれも12cm前後であるが、焼塩壺の蓋の可能性のある18の口径は4.9cmである。19の在地系土師器の皿は混入であろう。

時期は16世紀後葉である。

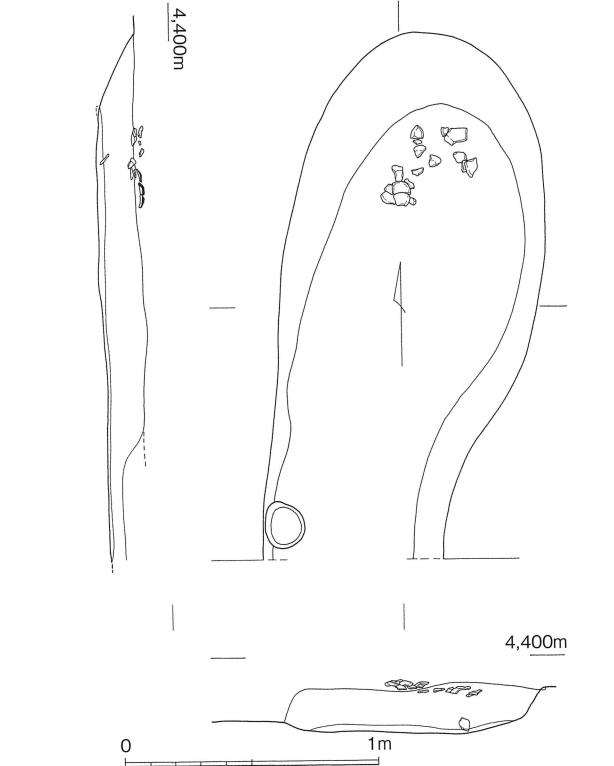
SK491 SK491はI33のSD060上面で検出された土坑である。遺構の規模は、南北1.3m、東西0.7mの小判形をしており、深さは約20cmであり、さらに北隅は約10cm掘り窪められている。遺構内から出土した遺物は、第170図20に図示した口径9cmの京都系土師器が出土している。このため、遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SK493 SK493はJ35の第2南北街路を除去後検出された土坑群の中で西端にあたる。周辺を他の土坑に切られるため、遺構の形状と規模は不明である。ただ、第170図21・22に図示した京都系土師器の破片が出土しており、時期は16世紀後葉と考える。

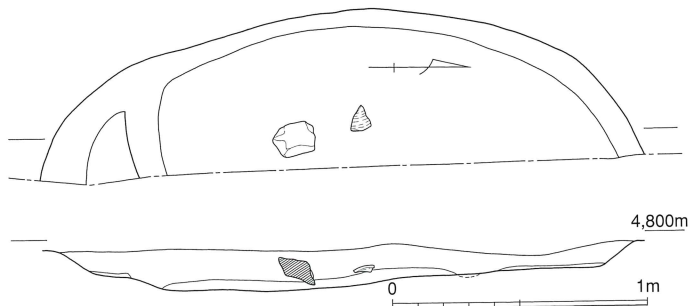
SK496 第167図に図示したSK496は、I34の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約1.7m、東西約1.4mの楕円形で、断面は皿状をしており、深さは約25cmである。遺構内からは、第170図23・24の京都系土師



第167図 SK496 実測図 (1/30)



第168図 SK497 実測図 (1/30)



第169図 SK498 実測図 (1/30)

天目茶碗

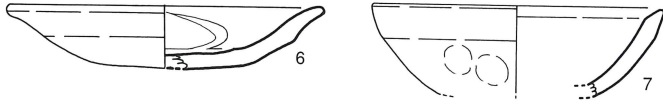
焼塩壺の蓋

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

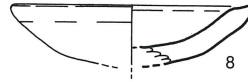
SK485



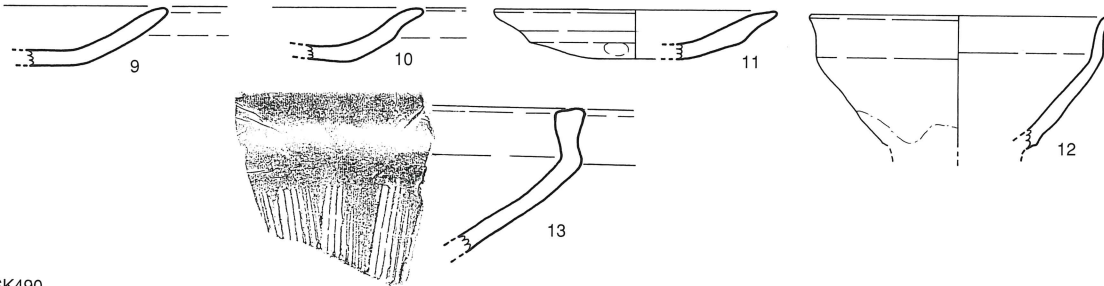
SK486



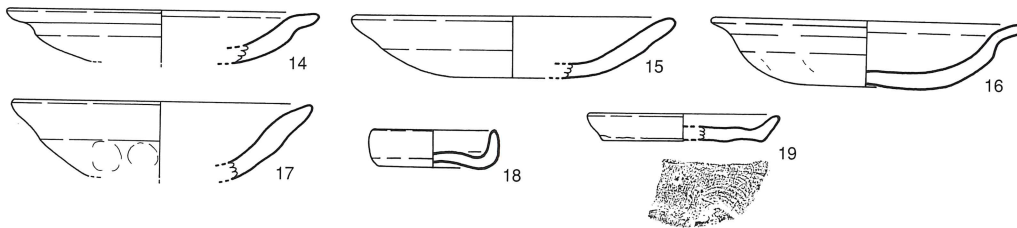
SK487



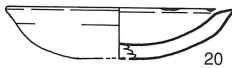
SK489



SK490



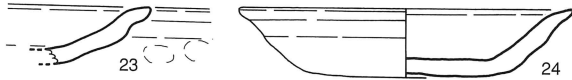
SK491



SK493



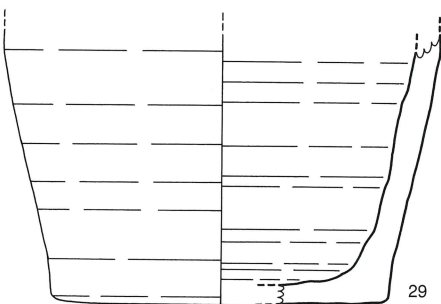
SK496



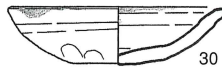
SK497



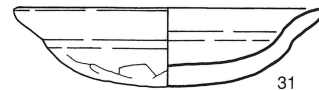
SK498



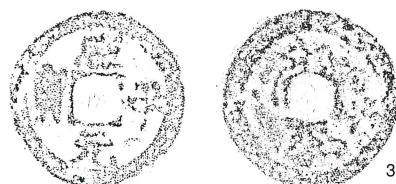
SK501



SK500



SK502



第170図 SK485・486・487・489・490・491・493・496・497・498・500・501・502出土遺物実測図 (1/3)  
2・3 (1/2) 4・5・32 (1/1)

器が出土しており、24の口径は13.2cmである。

遺構の時期は16世紀後葉である。

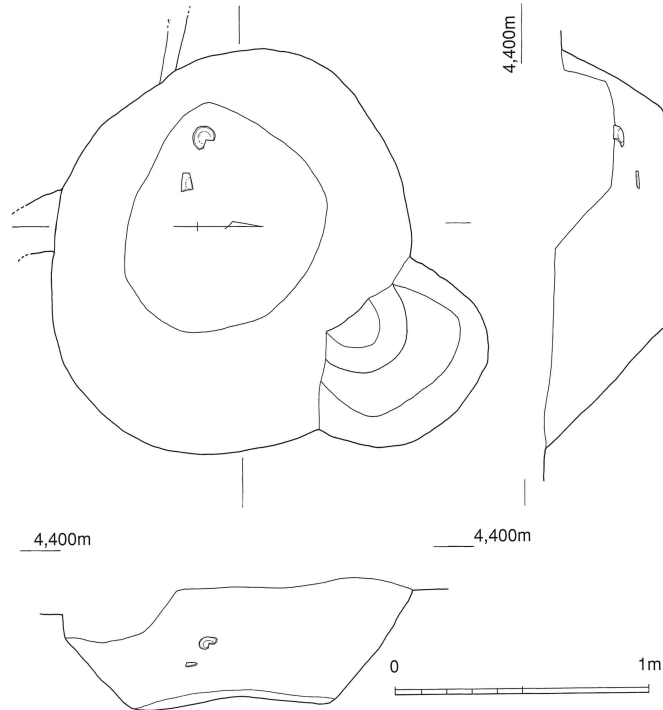
SK497 第168図に図示したSK497はI34の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は南北に2m以上あるが、土手のため未掘である。幅は約1mで、深さは約20cmである。第170図25～28は遺構の上面を中心に出土した遺物で、京都系土師器が主体を占める。口径は、25～27が9cm前後、28は12.4cmである。16世紀後葉と考える。

SK498 第169図に図示したSK498はJ34の第2南北街路下で検出された土坑である。東側は土層観察用の土手で未掘である。想定できる遺構の規模は南北約2.5m、東西約1mの楕円形で、深さは約20cmである。遺構内からは、第170図29に図示した備前焼の壺の底部が出土している。

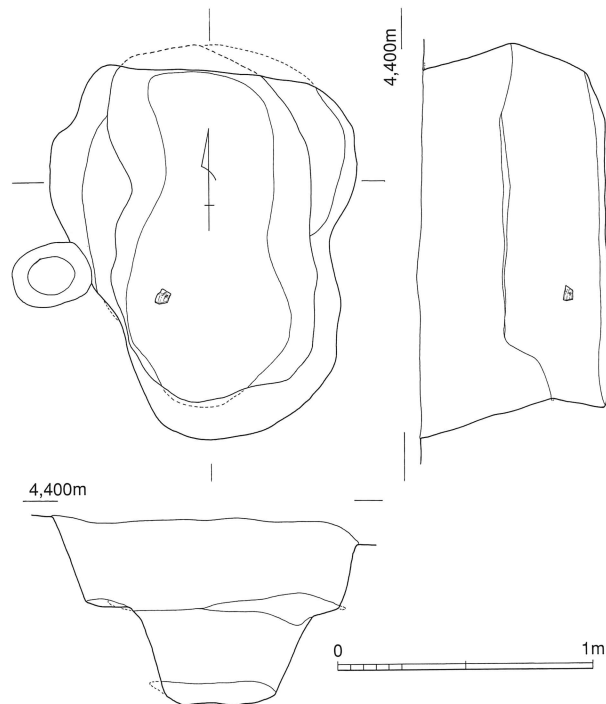
備前焼

遺構の時期は、16世紀後葉と考える。

SK500 SK500はI・J32・33の第2南北街路下で検出した土坑群の切り会いの中で検出した遺構である。遺構は南北約5m、東西約2mと認識したが、床面には凹凸があり、複数の土坑が重複している可能性が強い。しかし、図化できるような遺物が少なく、第170図31に図示した口径11.9cmの京都系土師器がある。他の土坑と同様、16世紀後葉と考える。



第171図 SK505 実測図 (1/30)



第172図 SK506 実測図 (1/30)

灯明皿

銅銭

SK501 SK501はJ33の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は南北2.5m、東西2.2mの不整円形をしており、深さは約15cmである。井戸であるSE310の上面に掘られた遺構である。遺構内からの出土遺物は少なく、第170図30に図示した、口径8.2cmの完形品の京都系土師器がある。この土器は灯明皿として再利用されている。遺構の時期は16世紀後葉である。

SK502 SK501の北側で検出された浅い土坑である。遺構内からは京都系土師器の小片が出土した他、第170図32に図示した銅銭が出土している。銭貨名は998年初鑄の「咸平元寶」である。時期は他の土坑と同様16世紀後葉と考える。

SK505 第171図に図示したSK505はJ34の第2南北街路下で検出された土坑群のひとつでSK505→SK506→SK504の順で新しい。SK505の規模は南北1.4m、東西1.6m、深さ約50cmである。出土遺物は第174図1～4に図示した糸切り底の在り系土師器がある。1～3は坏で、4は皿である。遺構の時期は、これらの遺物から14世紀代と考える。

SK506 第172図に図示したSK506はI・J34の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約1.5m、東西約1.2mの規模で、床面は深さ30cmとさらに30cmの二段になる。遺構内からは、第174図5～21に図示した遺物が出土している。1は内面に斜め播り目のある備前焼の播り鉢である。6～16は京都系土師器で、口径は6～9が8cm台で、10～12は10cm台、13～16は12cm台である。17・18は糸切り底の土師質土器で胎土と口縁部は京都系土師器に類似する。19は硯で、石材は砂岩質である。20・21は一部判読できるものの銭貨名は不明である。

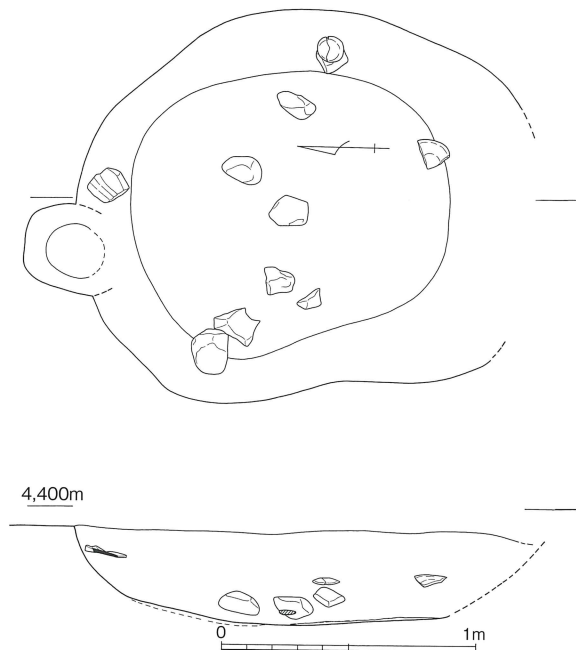
遺構の時期は、16世紀後葉と考える。

SK507 第173図に図示したSK507はI35の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約1.8m、東西約1.5mの楕円形をしており、深さは約40cmである。遺構内からは、第174図22～25に図示する遺物が出土している。22～23の京都系土師器は口径が12cm台のものである。25は口径8.8cmで糸切り底であるが、胎土は京都系土師器と同じである。

時期は16世紀後葉と考える。

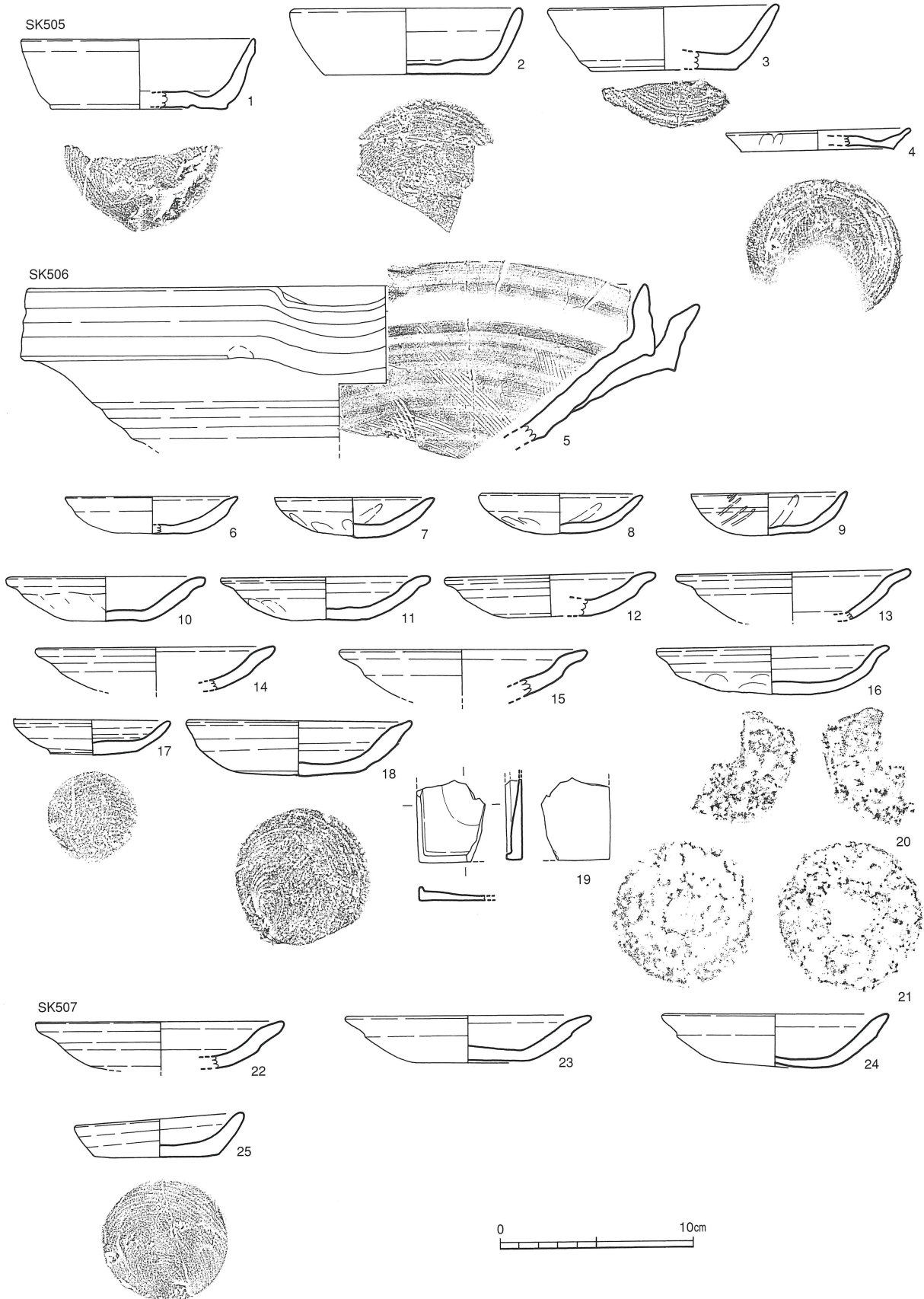
SK508 第175図に図示したSK508はI34の第2南北街路下で検出された土坑で、検出当初、ひとつの遺構と判断した。しかし、調査を進行させると、二つの土坑であることが判明した。これをki北からSK508A、SK508Bとした。なおSK508Aの北側はSK506と切り合い、南からSK508B→SK508A→SK506の順で新しい。

遺構の規模は、SK508A、が南北2m、東西1.8mで、深さは約80cmである。また、SK508Bも南北約2mが想定され、東西は1.9m、深さは約1mである。遺構内の埋土には多量の炭を含む。出土遺物は最終的に二つの土坑と判断したため、一緒に取上げた。第177図1～9に図示したのがそれである。1～



第173図 SK507 実測図 (1/30)





第 174 図 SK505・506・507 出土遺物実測図 (1/3) 20・21(1/1)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査

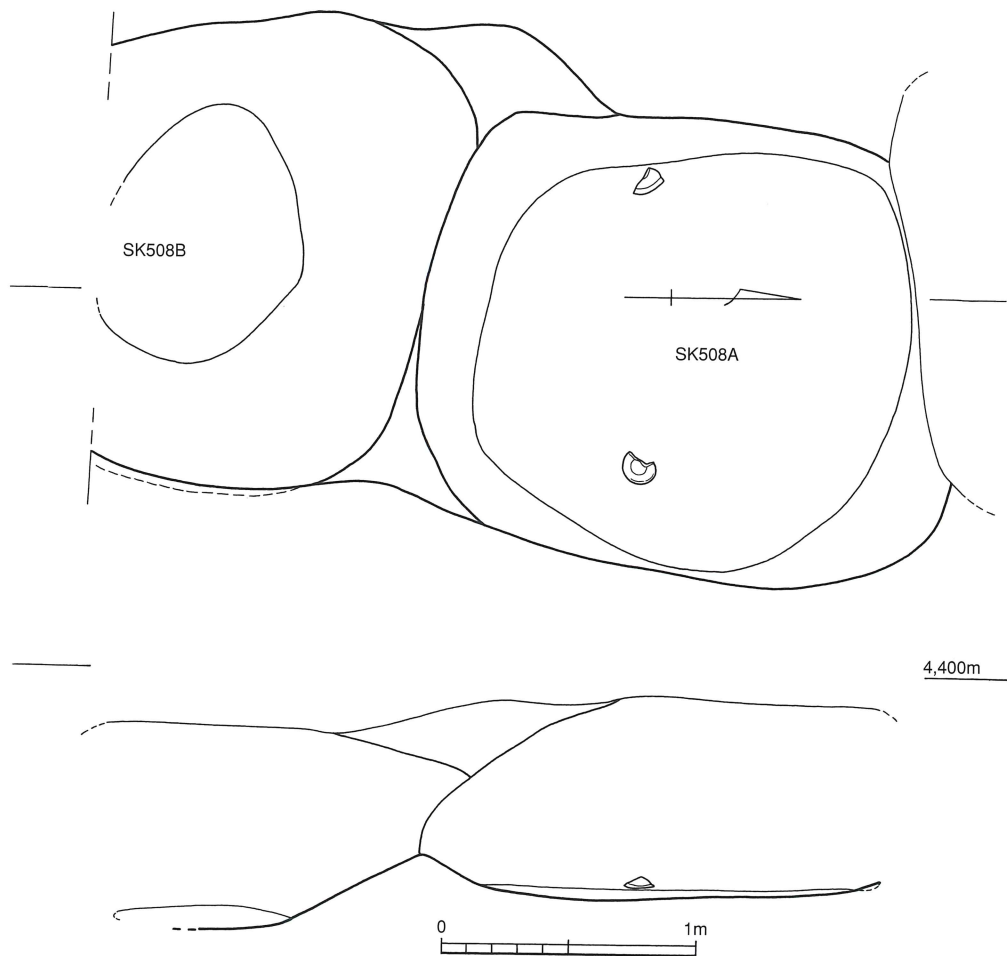
金銅製小柄 6は京都系土師器で、口径は1が9cm台、2～5は12cm前後、6は20cm台である。7は金銅製の長さ9.4cmの小柄である。8は1038年初鑄の「皇宋通寶」、9は1023年初鑄の「天聖元寶」である。遺構の時期は16世紀後葉である。

SK509 SK509はI・J33の第2南北街路下で検出された南北に細長い溝状の土坑で、SK500を切る。遺構の規模は、長さ7.5m、幅1mで、深さは約40cmである。遺構内から出土した遺物は、第177図10～15に図示した。10～14は京都系土師器で、口径は10・11が8cm台、12～14が13cm前後である。15の銅銭の銭貨名は「寶」のみ読める。遺構の時期は16世紀後葉である。

銅銭 SK510 SK510はI35の第2南北街路下で検出された土坑で、SK507に大部分を切られ、東側がわずかに残る。このため遺構の規模は不明であるが、第177図16・17の銅銭が出土している。16は990年初鑄の「淳化元寶」、17は1038年初鑄の「皇宋通寶」である。

遺構の時期は、他の遺構の切り合いから16世紀後葉と考える。

SK511 第176図に図示したSK511はI35の第2南北街路下で検出された土坑である。検出された



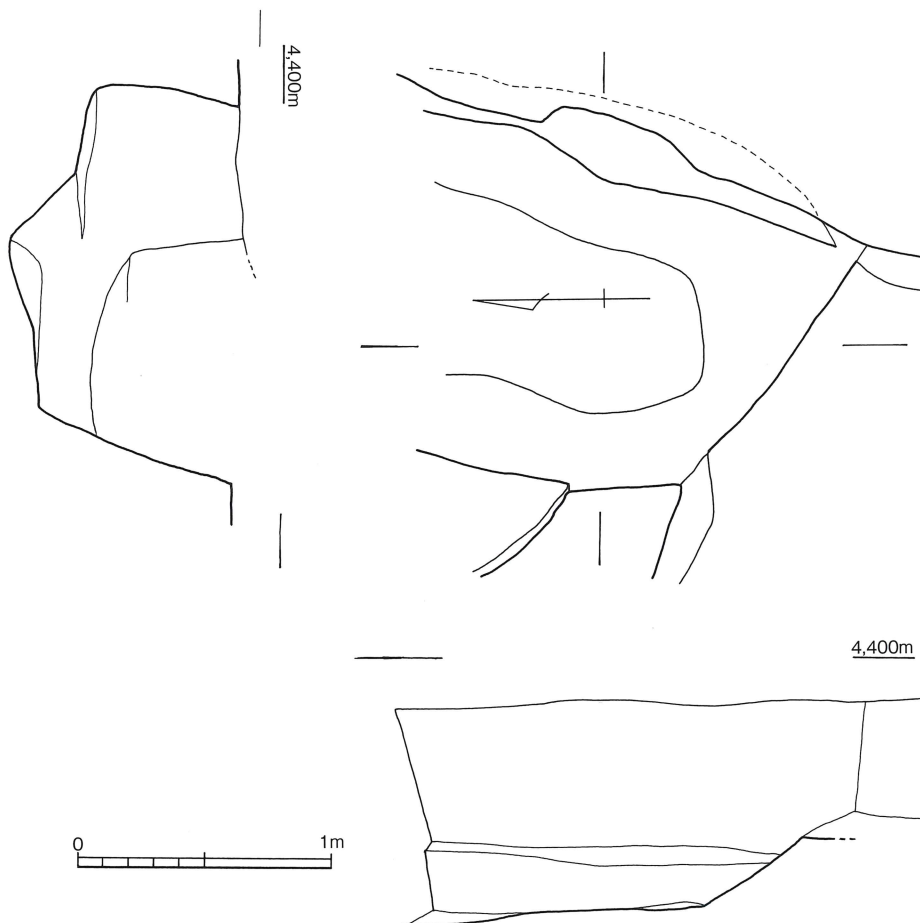
第175図 SK508 実測図 (1/30)

部分で想定できる遺構の規模は、南北約2m、東西1.4mで、深さは約80cmである。遺構内はSK508と類似し、埋土に炭化物を多く含む。遺構の時期を決定できる出土遺物は少ないが、検出状況から16世紀後葉と考える。

**SK512** SK512はI32の第2南北街路下で検出された土坑で、SD060の上面に切り込みSD483から切られる南北3m以上、東西約2m、深さ20cmの浅い土坑である。出土遺物は、第177図18～20に図示している。18・19は京都系土師器で19の口径は12.8cmである。20は口径11.6cmのロクロ目土師器である。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

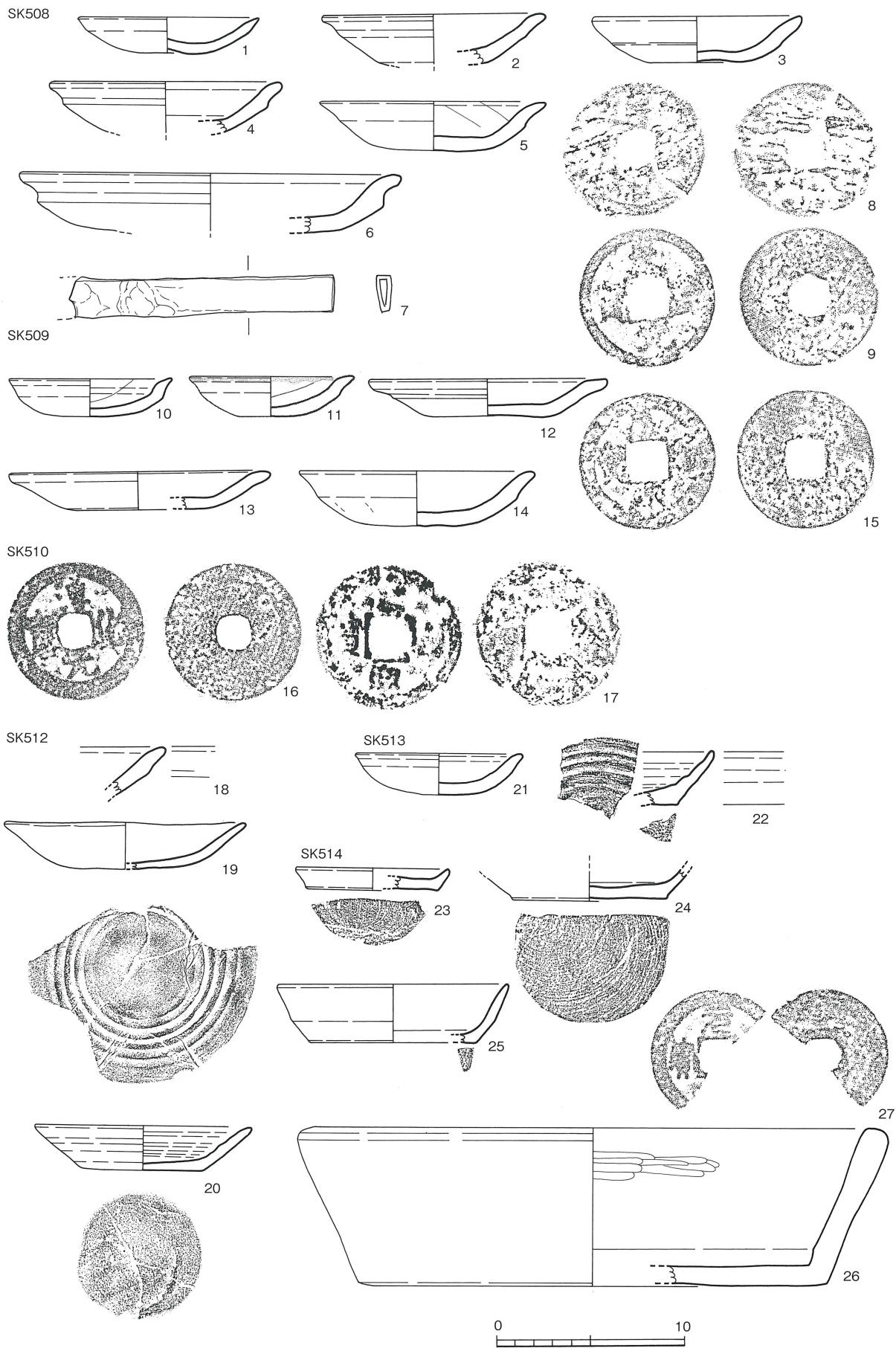
**SK513** SK513はI・J33の第2南北街路下で検出された土坑で、SK509の上面に掘り込まれている直径約50cmの不整形形の土坑で、深さは15cmである。遺構内からは、第177図に図示した21・22がある。21は口径9cmの京都系土師器、22はロクロ目土師器である。遺構の時期は検出状況から16世紀後葉と考える。

**SK514** SK514はJ33の第2南北街路下で検出された土坑で、SK485・SK500に切られ、わずかに残り、



第176図 SK511 実測図 (1/30)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査



第177図 SK508・509・510・512・513・514出土遺物実測図 (1/3) 7(1/2) 8・9・15~17・27(1/1)

遺構の規模や形態は不明である。出土遺物は、第177図23～27に図示した。23～25は在地系土師器で23は皿、24・25は坏である。26は瓦質土器の鉢である。27の銅銭は「元」と「寶」のみ残る破片である。遺構の時期は、14世紀代と考える。

SK516 SK516はI32の第2南北街路下で、西側の大部分がSD060の上面に掘り込まれている。遺構はSD060の調査時に判別出来なかったため、東側の一部が確認される。その規模は、南北約1.8mで東西は1mに満たない。深さは約20cmである。遺構の中からは、第179図1に図示した、口径12cmの京都系土師器の皿が出土している。時期は16世紀後葉と考える。

SK517 SK517はJ33の第2南北街路下で、検出された土坑であるが、SK481やSK500と切り合う。このため、遺構の形状はわずかに残るのみであるが、南北約0.8m、東西約0.6mで、深さは20cmの小さい土坑であることは判る。遺構内からは第179図2・3に図示した遺物が出土した。2は口径13.8cmの京都系土師器で、3は1038年初鑄の「皇宋通寶」である。

遺構の時期は16世紀後葉である。

SK520 第178図に図示したSK520はJ35の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約0.9m、東西約1.2mの小判形をしており、床面までの深さは、約40cmである。遺構内からは床面付近で礫と一緒に第179図4の東播系の鉢と5の在地形土師器の皿が出土している。遺構の時期は、14世紀代と考える。

東播系の鉢

SK521 SK521はJ35の第2南北街路下で、検出された土坑であるが、東半分は土層観察用の土手で未調査である。確認できた遺構の規模は、南北約1m、東西は1m以上ある楕円形の遺構で、深さは約30cmである。出土遺物は、第179図6～9がある。6～8は京都系土師器で、口径は7が12cm、8が13.6cmである。9の銅銭は不明瞭であるが1064年初鑄の「治平元寶」である。

遺構の時期は、16世紀後葉である。

大型土坑

SK533 SK533は付図5-1に図示した大型土坑である。第2南北街路下で検出され、街路を遮断するように掘り込まれ、東端は万寿寺の堀であるSD200から切られている。確認できる遺構の規模は、南北約20mあり、北側はSD060を切っている。東西は12m以上あり、西に延びている。府内町跡第49次調査でも確認されており、さらに西に広がる可能性が強い。調査した範囲内での遺構の深さは西壁際で約2.5mあり、さらに西へ傾斜している。遺構の掘削順はSD060→SK533→SD200となる。

土囊

遺構内の埋め立ては底面から約1mまで土囊による埋め立てを行っており、発掘調査の瞬間はムシロのような明茶色の繊維質の植物が観察され、それに包まれた土の単位が判別出来た。この状況は、土層断面でも観察され、付図5-2に図示している。さらに遺構内には建築部材や切り倒した斧跡のある直径50cmの松の丸太など埋め立てに混じっている。

出土遺物は第179図10～23、第181図・第182図・第183図1～14に図示した。第179図10～19は貿易陶磁器で、10は漳州窯系、11は景德鎮窯系の青花の碗である。12～14は景德鎮窯系の青花の皿である。15は白磁、16は明褐色をしており、焼成の悪い白磁の皿の可能性もある。17・18は龍泉窯系青磁で、17は碗、18は皿である。19は中国産の天目碗である。

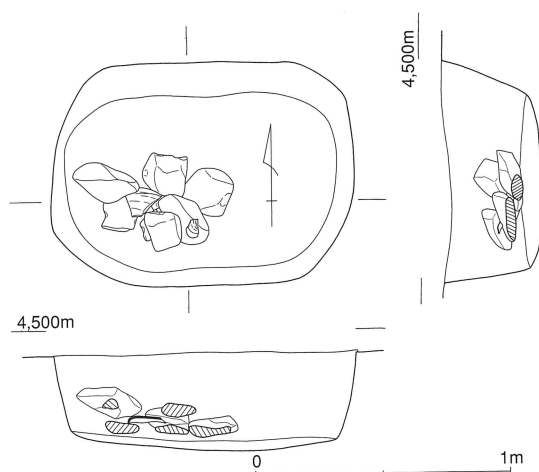
漳州窯系

景德鎮窯系

白磁

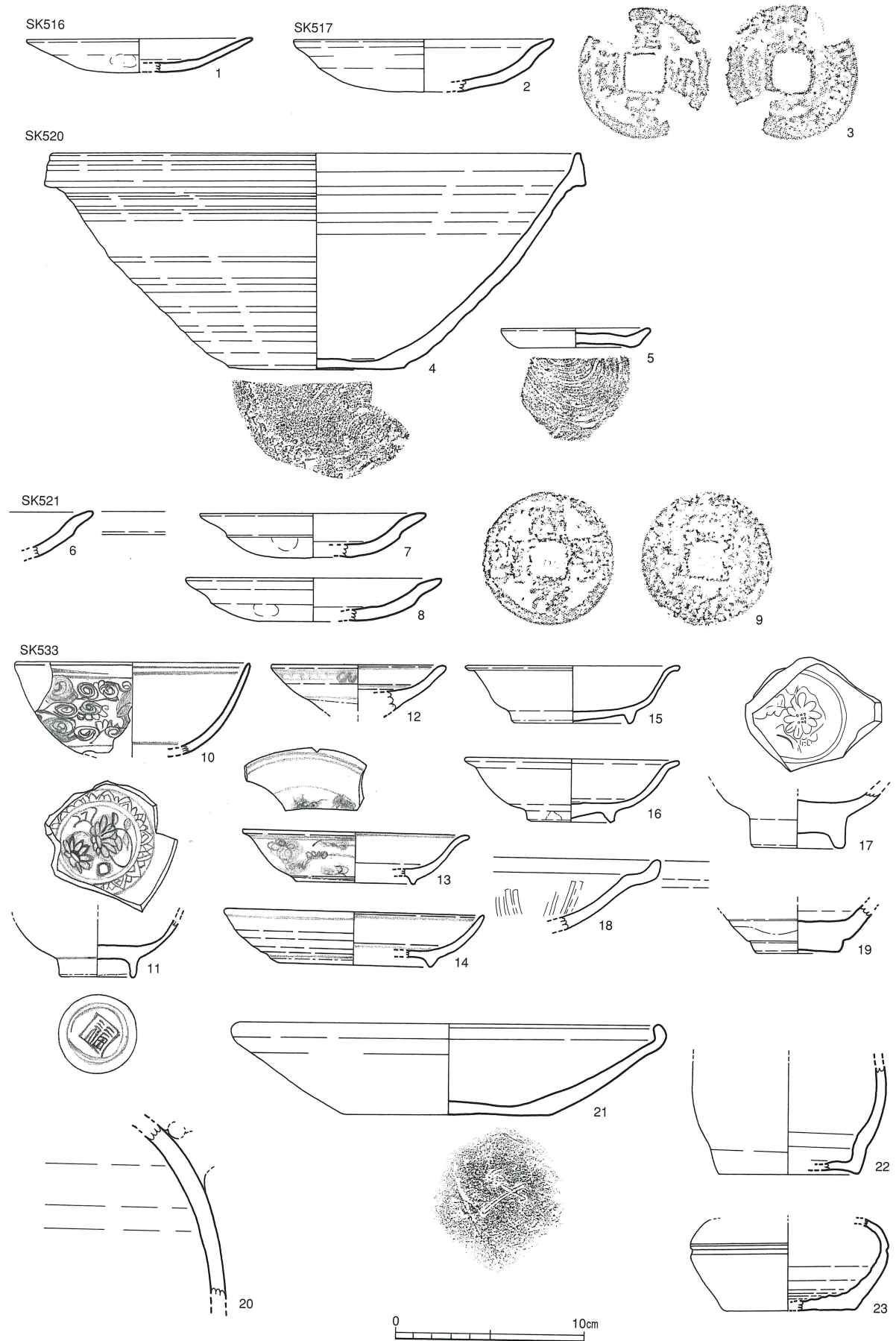
中国産天目碗

20～23・第181図1は備前焼で、20は耳の付く壺、21は底部にヘラ記号のある



第178図 SK520 実測図 (1/30)

第2節 中世大友府内町跡第51次調査



第179図 SK516・517・520・521・533出土遺物実測図(1/3) 3・9(1/1)

皿、32・33は小型の壺である。第180図1は内面に放射状の播り目のある播鉢である。

金箔土器

第181図2～31は京都系土師器である。口径は2～10が9cm前後で、8～10は器高が高い。11・12は10cm台、13～28は12cm前後であり、29は16cm台で、金箔土師器である。四法量がある。30・31は器高3.5cm前後の在地化した京都系土師器の坏である。32の底部は回転ヘラ切りで、古代の杯である。

第182図1・2は糸切り底であるが、胎土と口縁部は京都系土師器である。3～11は口縁部に螺旋状の段が付く、ロクロ目土師器である。12は在地系土師器の坏である。13は瓦質土器の播鉢である。14は瓦質土器の碗、15は三脚の火鉢である。

木製の箸  
青銅製の鍵

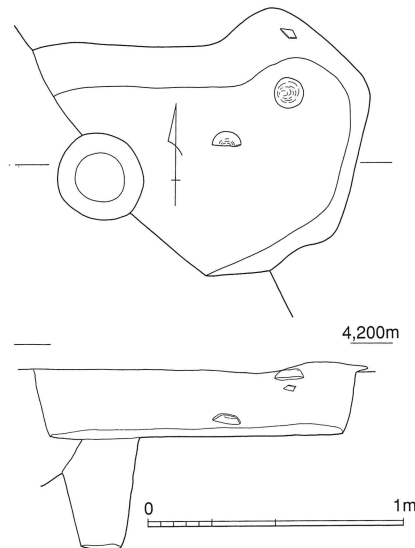
第182図1・2は木製の箸である。3・4は漆塗りの碗である。3は黒漆に赤漆で文様が描かれている。5は青銅製の鍵であるが曲がっている。7は鋌状で、中央部に金箔がある。8～14は銅銭である。8は無文銭であろうか。9・10は1038年初鑄の「皇宋通寶」、11・12は1078年初鑄の「元豊通寶」であるが、13・14は破損や鏽のため判読不明である。

SK538 第180図に図示したSK538は、I・J36で検出された東西に長い土坑で、SK533に西側を切られている。残された遺構の規模は、南北約1m、東西約1.2m以上で、深さは約30cmである。遺構内からは第183図に図示した在地系土師器の皿と坏が出土している。

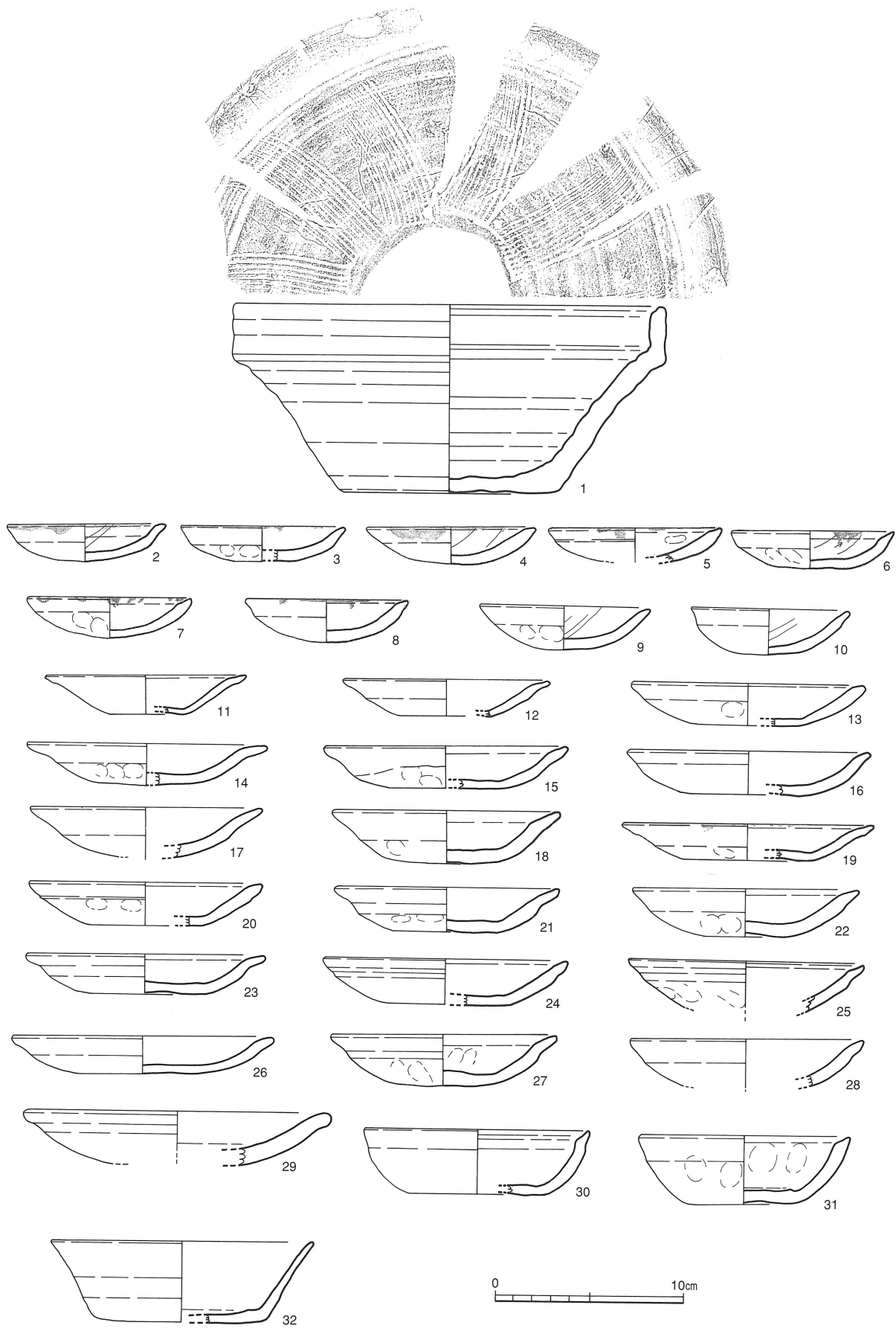
時期は14世紀代とである。

SK550 第184図に図示したSK550は、I・J38の第2南北街路下で検出された土坑で、SK551・SK552・SK553と切り合う。その関係は、SK552→SK551・SK553→SK550となるが、全体は万寿寺の堀であるあるSD200に上面を削られている。SK550の規模は、南北約2.3m、東西約1.2mで、深さは約60cmである。遺構内からは、第183図19の鎬連弁のある龍泉窯系の青磁碗と、20の口径8.6cmの京都系土師器がある。時期は16世紀後葉である。

龍泉窯系

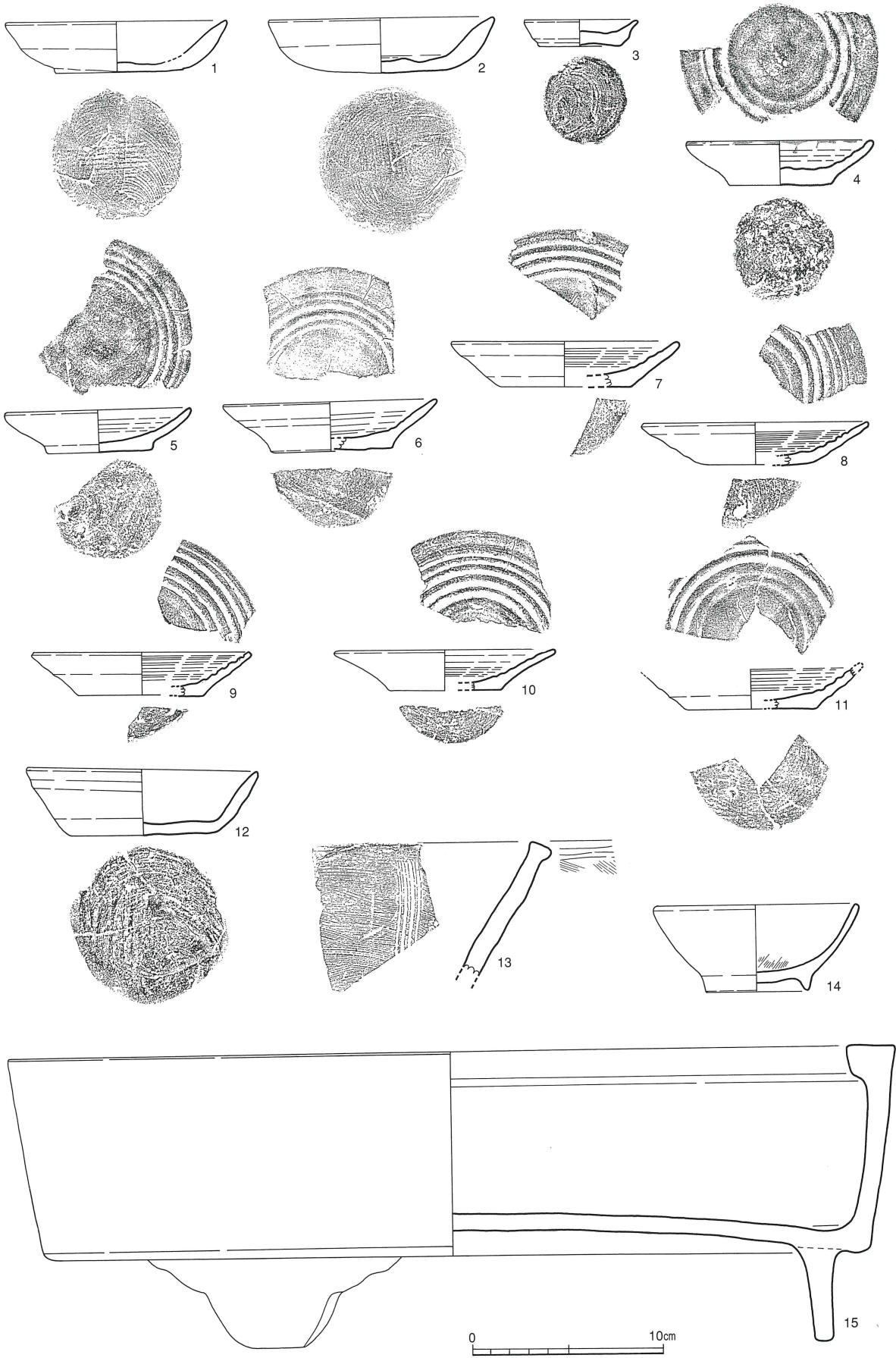


第180図 SK538 実測図 (1/30)



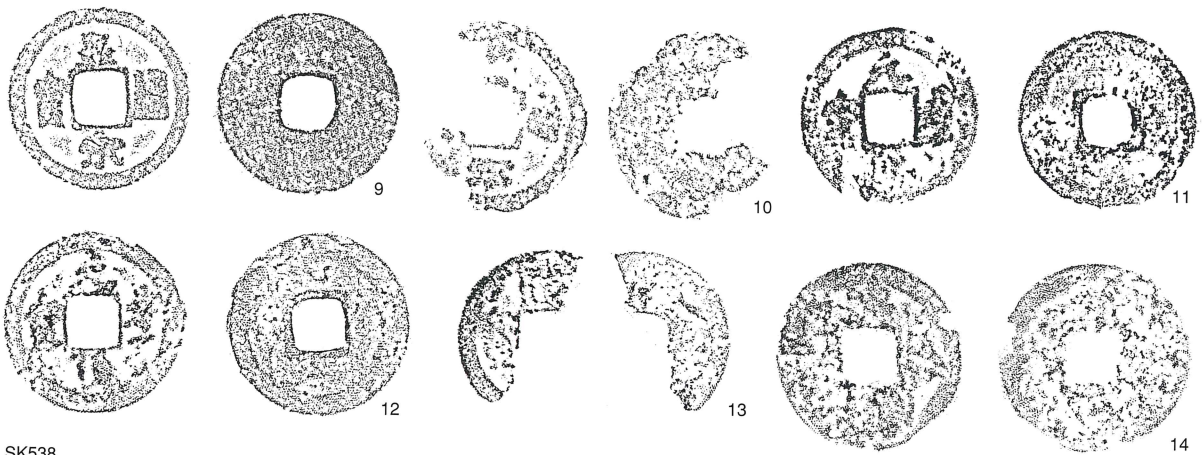
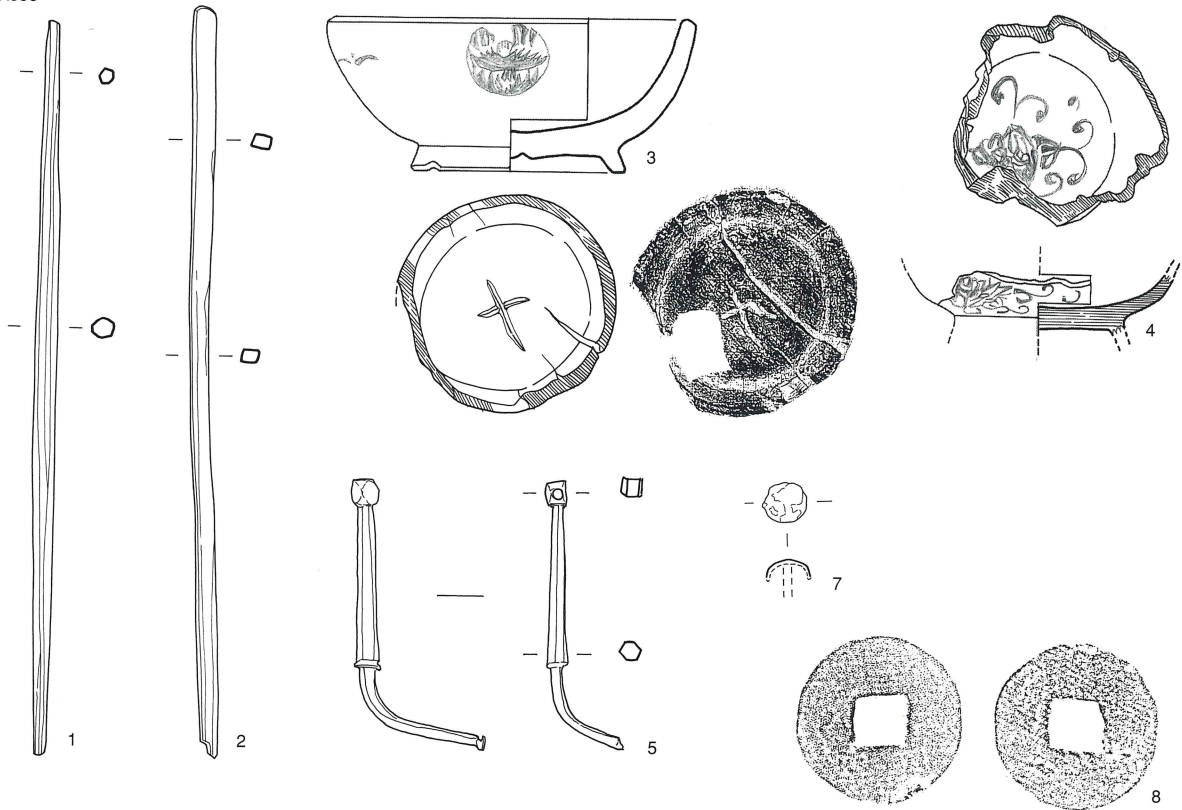
第181図 SK533出土遺物実測図① (1/3)



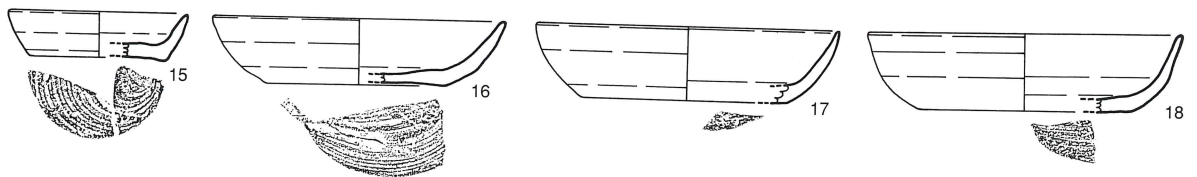


第182図 SK533出土遺物実測図② (1/3)

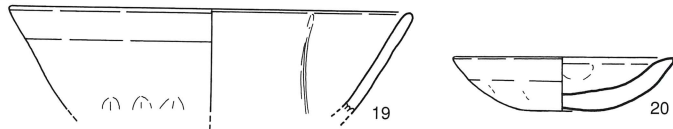
SK533



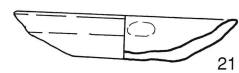
SK538



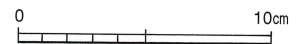
SK550



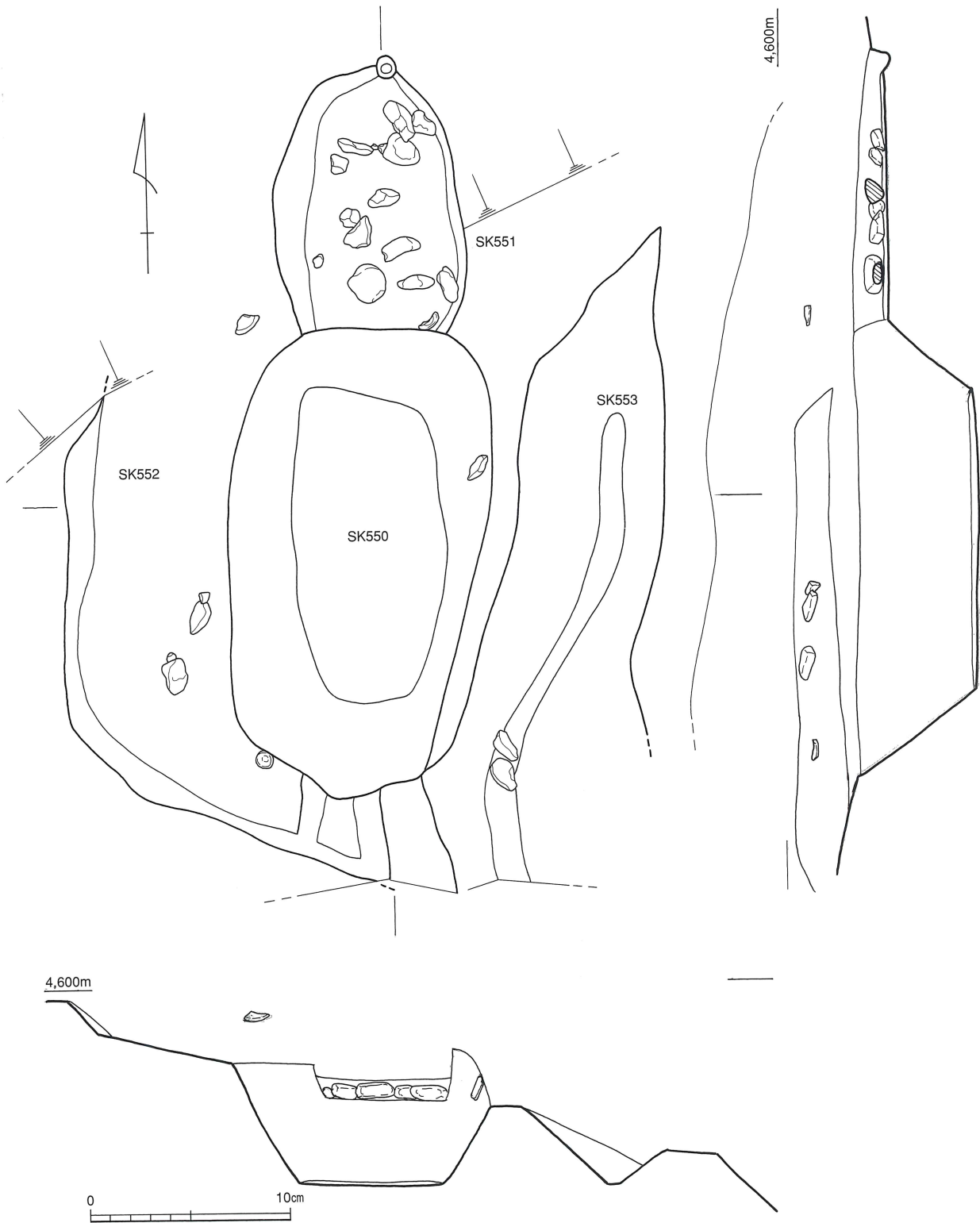
SK551



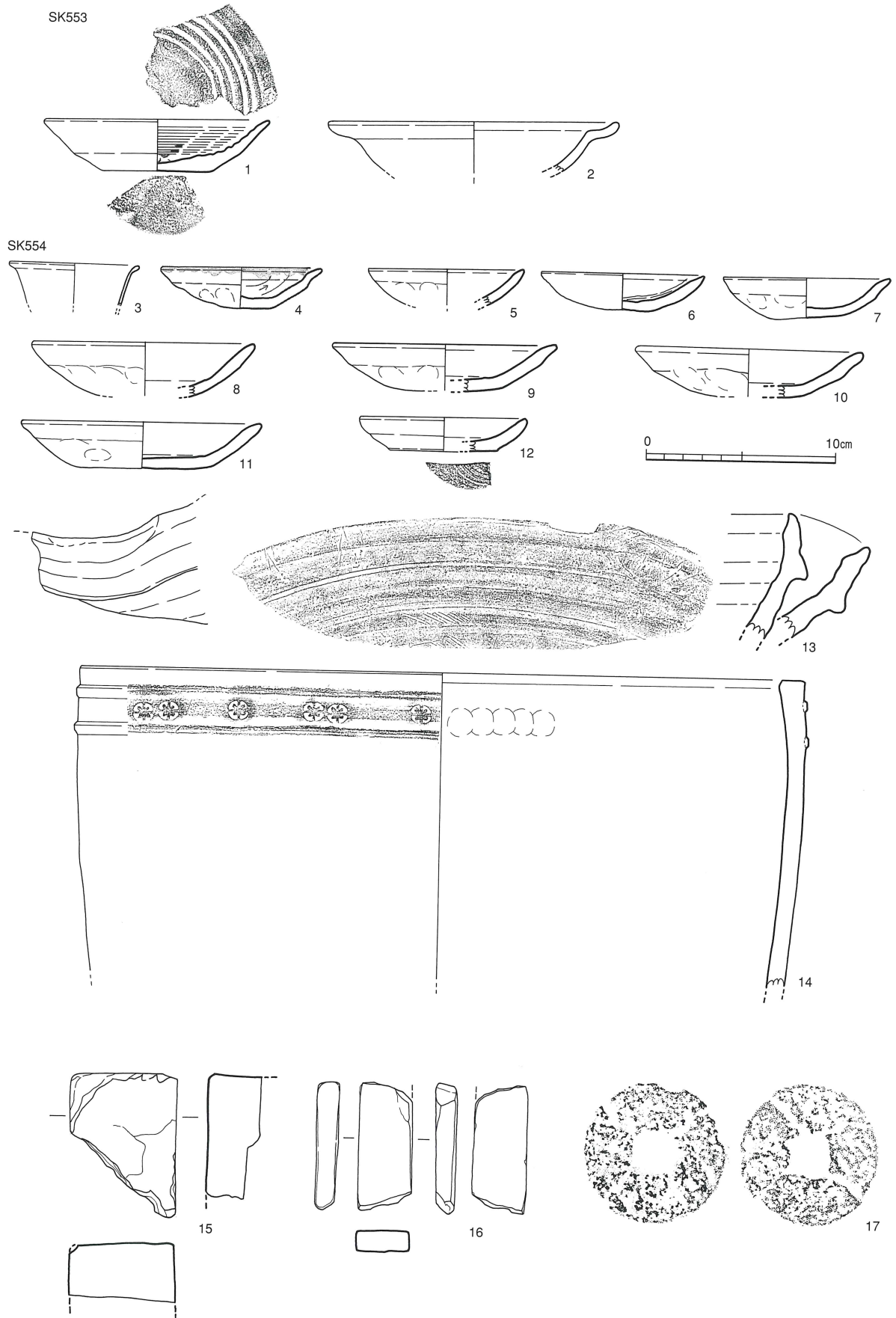
SK552



第183図 SK533・550・551・552出土遺物実測図 (1/3) 5(1/2) 7~14(1/1)



第184図 SK550・551・552・553実測図 (1/30)



第185図 SK553・554出土遺物実測図 (1/3) 17(1/1)

SK551 第184図に図示したSK551はSK550の北側で検出された、南北1.3m以上、東西約1m、深さ20cmの浅い土坑である。遺構内からは、拳大の礫と共に、第183図21に図示した、口径8.6cmの京都系土師器が出土している。時期は16世紀後葉である。

SK552 第184図に図示したSK552はSK550の西側で検出された、南北2m以上、東西1m以上で、深さ10～20cmの土坑である。遺構内からは第183図22・23に図示した京都系土師器が出土している。口径は22が8.2cm、23が12.6cmである。時期は16世紀後葉と考える。

ロクロ目土師器  
龍泉窯系

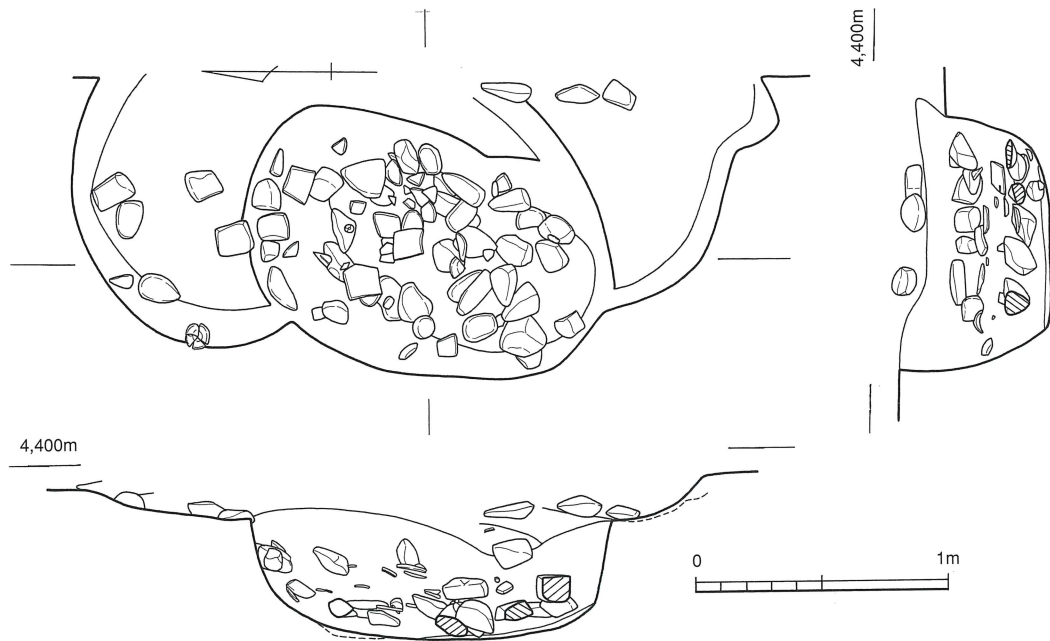
SK553 第184図に図示したSK553はSK550の東側で検出された細長い土坑である。規模は南北3.3m以上、東西最大幅1mで、南ほど幅広くなっている。深さは断面V字状で、約30cmが残されている。出土遺物は第185図1・2に図示した。1はロクロ目土師器で、2は龍泉窯系の青磁の皿である。遺構の時期は遺物から見ると15世紀代の可能性もあるが、検出状況から16世紀後葉と考える。

SK544 第186図に図示したSK544はJ36の第2南北街路下で検出された土坑で、次に報告するSK554と切り会い、拳大の礫の出土状況から、SK544が古いと考える。遺構の時期は、良好な遺物が出土しないが、検出状況から16世紀後葉と考える。

備前焼播鉢

赤間石の硯

SK554 第186図に図示したSK554はJ36の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約1.5m、東西約1mで小判形をしており、深さ約0.6mである。遺構内からは、拳大の礫と一緒に比較的多くの遺物が出土した。主要な遺物は第185図3～17に図示した。3は中国産の白磁の小坏である。4～11は京都系土師器で、口径は4～7が8cm台、8～11は12cm前後である。12は底部が糸切り底で、京都系土師器との折衷形態である。13は内面に斜め播り目のある備前焼の播鉢である。14は瓦質土器の火鉢で、口縁部には2条の細い突帯が巡り、その間に菊花のスタンプ文がある。15・16は砥石であるが、16は赤間石であり、硯の可能性もある。17の銭貨名は鏽のため判読できない。遺構の時期は、16世紀後葉と考える。



第186図 SK544 実測図 (1/30)

灯明皿

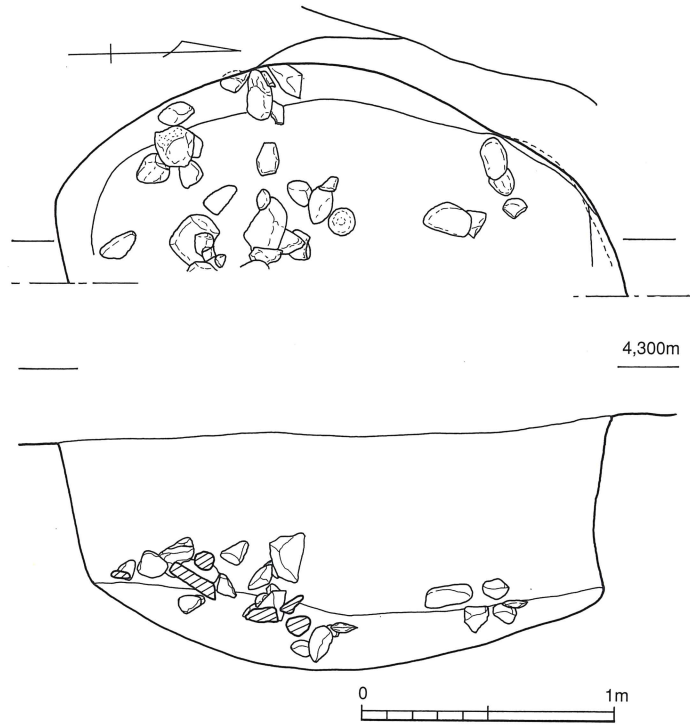
SK558 第187図に図示したSK558はJ36の第2南北街路下で検出された土坑である。遺構の東側は、土層観察用の土手で未調査である。想定できる遺構の規模は、南北約2.2m、東西1m以上の楕円形をしており、深さは、中央の最深部で約1mある。遺構内からは、拳大の礫と共に炭も多量に出土しており、それに混じり、第188図1～3の京都系土師器が出土している。口径は1・2が8cm台で、2点とも灯明皿として使用されている。3は12cm台である。遺構の時期は、京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。

銅銭

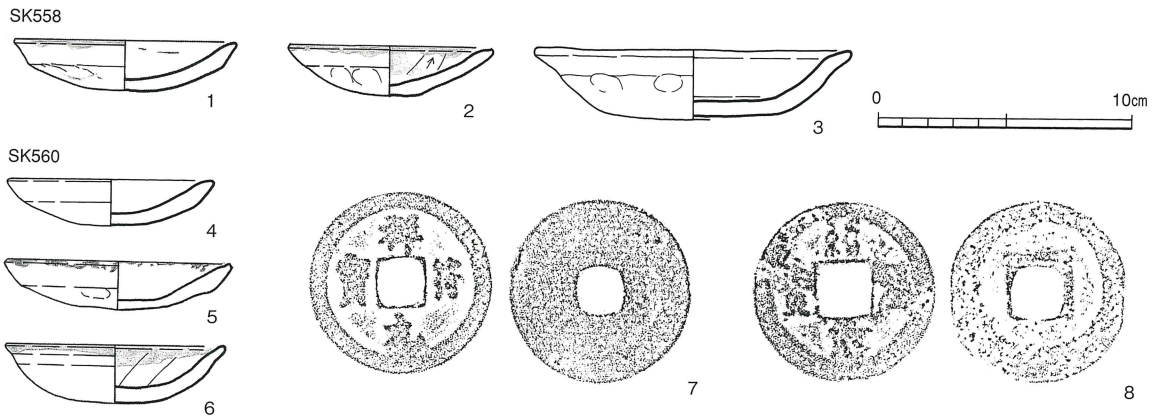
SK560 SK560はI・J34の第2南北街路下で検出された土坑である。北西部をSE310で切られ、さらに北部はSK501が上面に乗る。確認できる遺構の規模は、南北約2mで、東西は約1.3mの小判形をしており、深さは約50cmで、床面は平坦である。出土遺物は、第188図4～8に図示した。4～6は最小サイズの京都系土師器で、口径は8cm台であり、5・6は灯明皿で使用している。7・8は銅銭であるが、銭貨名は7が1009年初鑄の「祥符通寶」、8が1094年初鑄の「紹聖元寶」である。

遺構の時期は、16世紀後葉である。

SK568 SK568はI38の第2南北街路下で検出された直径約70cm、深さ約30cmの柱穴状の小型の土坑である。遺構内からは第190図1に図示した14世紀代の在地系土師器の坏が出土しており、その時期と考える。



第187図 SK558 実測図 (1/30)



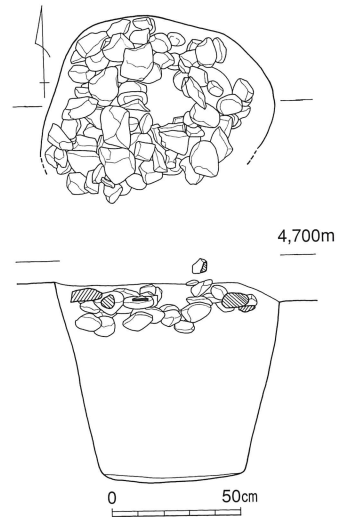
第188図 SK558・560出土遺物実測図 (1/3) 7・8(1/1)

SK570 SK568はI38の第2南北街路下で検出された土坑で、調査区の西端で、大型土坑であるSD533の上面でもある。遺構の西半分は調査区外になっているが、確認できる規模は、南北約50cm、東西約30cmで、深さは20cmであった。しかし、遺構内からは、第190図2～5に図示する遺物が出土している。2～4は京都系土師器で、口径は2が10cm台で、3・4が12cm台である。5は糸切り底での底部で14世紀代の在来系土師器である。遺構の時期は16世紀後葉と考える。

SK575 SK575はJ35・36間の土層観察用の土手を除去する際に検出された土坑で、SK521の東側と理解できる。第190図6・7の京都系土師器と第179図6～9の遺物は同じ土坑からの出土である。第190図6の口径は11.2cm、7は14.3cmである。

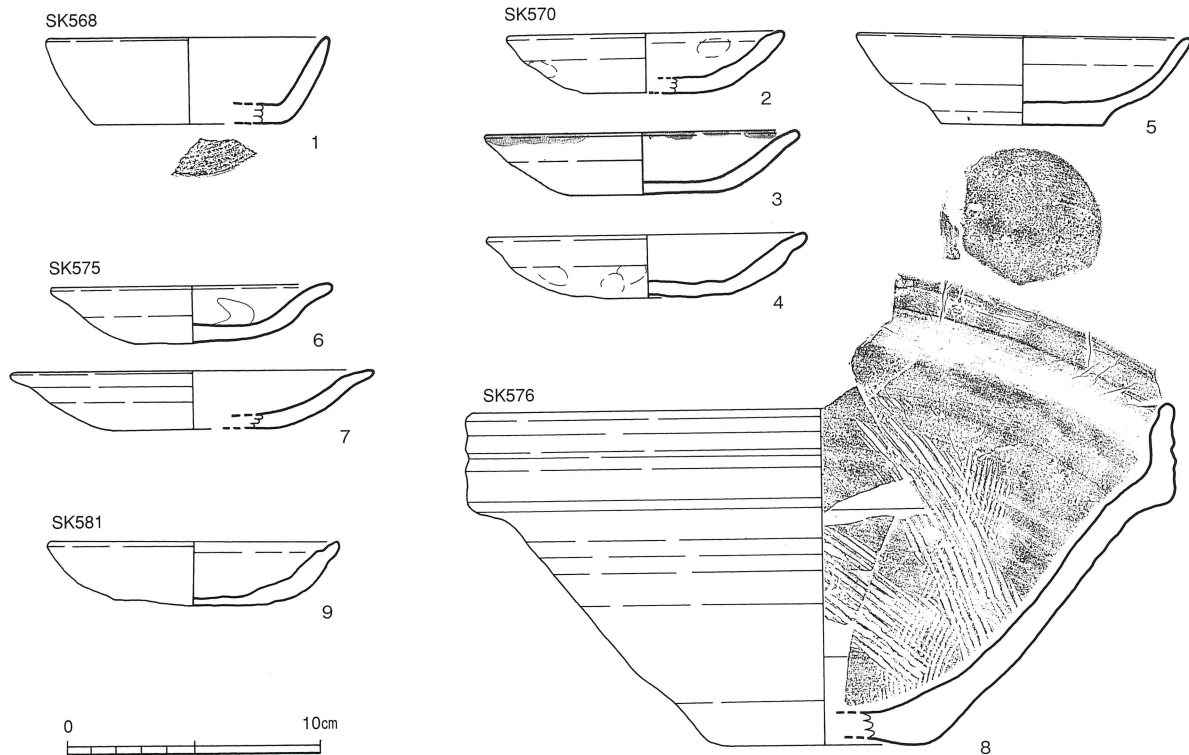
SK576 第189図に図示したSK576はI37・38の土手を撤去中に検出した土坑である。すなわちSK533の大型土坑の上面で検出したことになる。確認できる遺構の規模は、南北約0.7m、東西約0.9mの楕円形をしており、深さは約0.8mである。遺構の上部には拳大の礫が集中して詰められており、それに混じり、第190図8の斜め揺り目の備前焼の播鉢が出土している。遺構の時期は、16世紀後葉と考える。

SK581 SK581は、J38の第2南北街路下で検出された土坑である。周辺にはSK533やSD200などの大型遺構があり、SD200からは東側を切られる。残された遺構から想定する規模は、直径約1mの不整形円で、深さは30cm程度である。遺構内からは、第190図9に図示した口径11.4cmの京都系土師器が出土している。16世紀後葉と考える。



第189図 SK576実測図(1/30)

備前焼播鉢



第190図 SK568・570・575・576・581出土遺物実測図(1/3)